

錢龜塚古墳ほか

菊池川中流域古墳・横穴群総合調査報告書(4)

1 9 8 9

山鹿市教育委員会

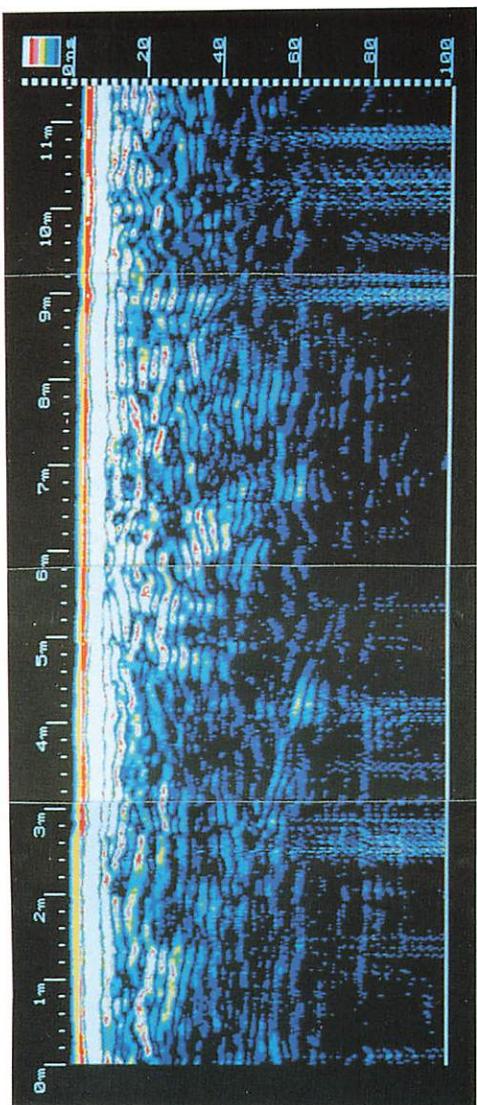


錢龜塚古墳ほか

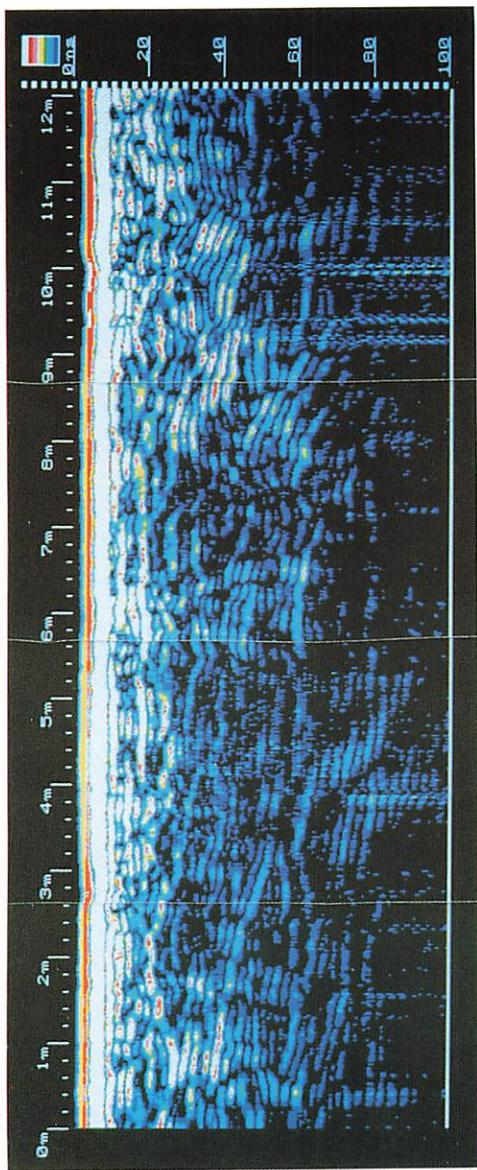
菊池川中流域古墳・横穴群総合調査報告書(4)

1989

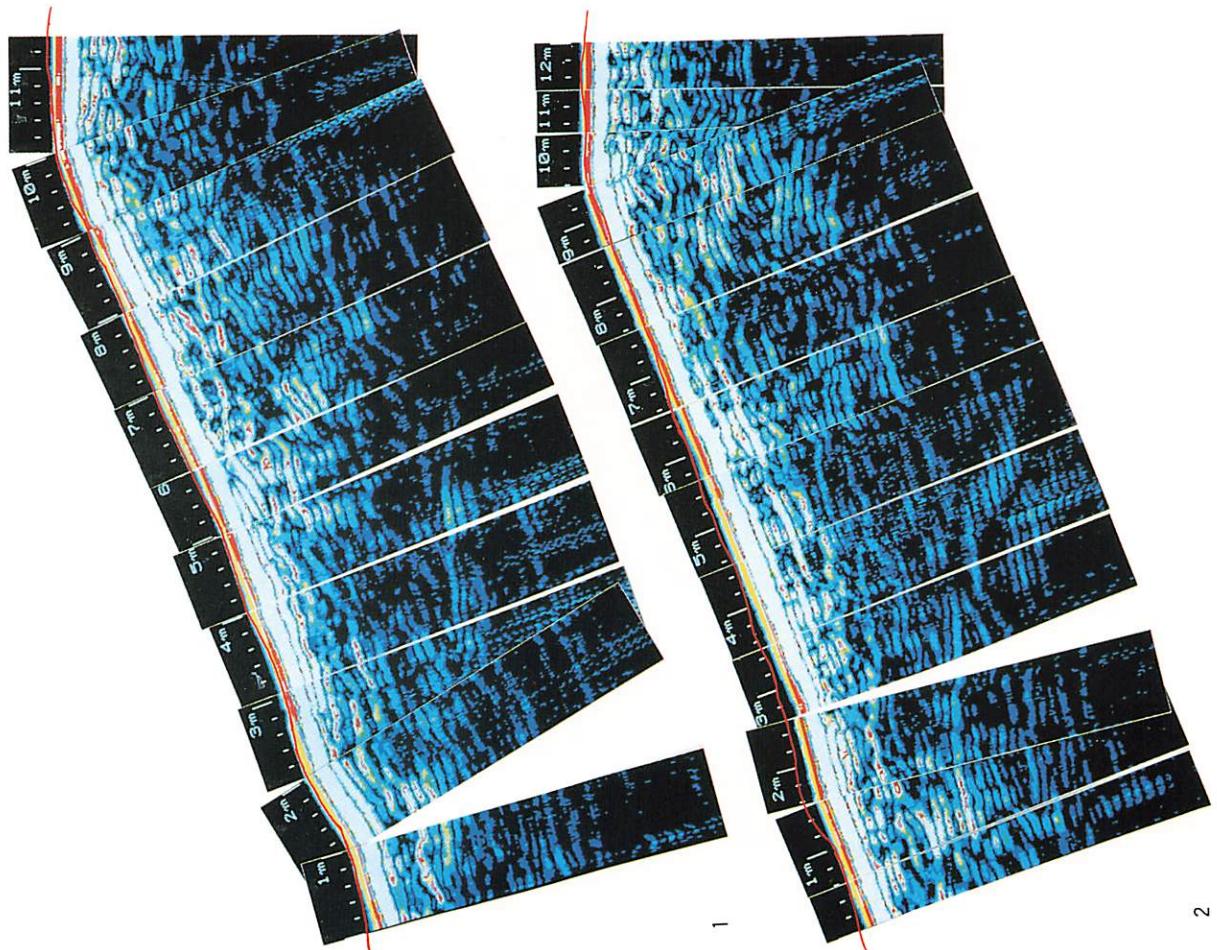
山鹿市教育委員会



1



2



序 文

菊池川中流域古墳・横穴群調査報告書第4集をお届けいたします。

この報告書は、昭和63年度国庫補助事業による遺跡分布調査の一環として、山鹿市中部に位置する八幡校区内の古墳を中心に実施した調査結果をまとめたものであります。調査中、その作業状況を見聞しながら、私なりに期待を寄せてまいりましたが、その成果は私の予想をはるかに上回るものがありました。中でも鮮烈な印象を受けたのが銭亀塚、毘沙門塚の両古墳であります。

まず、通称ひょうたん平の山頂に立地する銭亀塚古墳が自然の地形を生かした全長約70mにも及ぶ前方後円墳であることが判明したことです。さらに内部主体も今まで竪穴式石室の可能性が高いとされていた築造様式が、竪穴式石室の様式を伝えてはいるものの、実は竪穴系横口式石室であることが明らかとなりました。この結果、当古墳が市内最大の規模をもつ前方後円墳であること、そして内部構造が竪穴式石室から横穴式石室に移行していく過程で存在した竪穴系横口式石室が市内で初めて確認されたこと——これは学術的視点からだけでなく、教育的側面からも高く評価されるべき知見であろうと考えます。

一方、毘沙門塚古墳は、石屋形をもつ横穴式石室構造となっていますが、石屋形の袖石がチブサン古墳やオブサン古墳に見られる板石状のものではなく、柱石による築造様式を探っていることです。これは管見ではありますが、九州でも福岡県宗像郡玄海町に在る桜京古墳にその事例を見るにすぎない極めて特異なもので、古墳文化を地域的特性とする菊池川流域において、その付加価値を高めるに充分な資料であるといえましょう。

このほか、古老の話では墳丘自体が神社境内に在ることから、神社火災時の廃材を積み上げたものであるとする風説もあった京塚古墳についても、今回の墳形測量と併せてN H K熊本放送局のご協力で実施した電磁波による地下探査調査の結果、古墳の周濠の一部も確認できたばかりでなく、内部主体も横穴式石室の可能性が浮上するにいたりました。

わずか1カ年の調査で、このように多様で密度の高い成果が得られたことは、菊池川流域の古代文化がいかに豊饒かつ先進性に富んだものであったかを示唆しており、今後の調査によって、さらに地域的特性が明らかになっていくものと期待されます。

調査に際し、酷暑のさなか、先端技術を駆使してご協力いただいたN H K熊本放送局と関係スタッフの皆さん、標高160m余の山頂に至る道なき道を通って発掘作業に従事していただいた皆さんに対し、感謝の意を表したいと思います。

終りになりましたが、本報告書が学術研究の一資料として活用され、文化財愛護思想昂揚の一助となれば、これに過ぐる喜びはありません。

平成元年3月31日

山鹿市教育長 北井澄生

例　　言

1. 本書は山鹿市教育委員会が国庫補助事業として実施した菊池川中流域古墳・横穴群総合調査の報告書である。
2. 本調査は菊池川中流域に所在する古墳・横穴群の実態を把握することを目的としたもので、5年目の事業として錢龟塚古墳ほかを実施した。
3. 調査に際して山鹿市教育委員会が主体となり、山鹿市立博物館において実施した。
4. 本書の執筆は中村幸史郎が行い、人骨に関しては長崎大学医学部解剖学第2教室より玉稿をいただいた。
5. 本書の古墳、遺物の実測図作成および製図は挿図目次に示すとおりである。
6. 本書に掲載した写真は中村が撮影し、焼付けた。
7. 本書の編集は中村が行った。
8. 本書の題字は山鹿市文化財保護委員長 幸 平和氏にお願いした。

本 文 目 次

序 文

I 調査の経過	1
1. 調査による経過	1
2. 調査の組織	2
II 八幡校区の古墳	2
1. 立地と環境	2
2. 錢龟塚古墳	5
3. 京塚古墳	14
4. 尻沙門塚古墳	22
5. 倉塚古墳	30
6. 御靈塚古墳	34
7. 猿楽塚古墳	37
III その他の調査	42
1. 舞野石棺群	42
2. 神社裏古墳	51
3. 馬見塚古墳群	55
IV まとめ	69
V 付 論	71

図版目次

卷頭図版	1 京塚古墳電磁波写真	2 前庭部石材出土状況
	2 " "	3 前庭部堆積土層
図版	1 1 錢龟塚古墳遠景	15 1 倉塚古墳全景（北側より）
	2 後円部全景	2 倉塚古墳全景（東側より）
	3 前方部全景	3 墳頂部
2	1 後円部西側裾部	16 1 御靈塚古墳全景
	2 後円部墳頂部	2 猿樂塚古墳全景
	3 作業風景	3 猿樂塚古墳近景
3	1 石材散在状況	17 舞野遺跡全景
	2 石室全景	18 1 1号石棺調査風景
	3 南側側壁全景	2 2号石棺調査風景
4	1 北側側壁全景	3 1号石棺人骨出土状況
	2 羨門部全景	19 1 1号石棺出土状況
	3 奥壁全景	2 人骨出土状況
5	1 羨門部近景	3 人骨除去状況
	2 奥壁近景	20 1 頭骨出土状況
	3 羨門部コーナー	2 人骨出土状況
6	石室南西部全景	3 2号石棺出土状況
7	1 京塚古墳調査風景	21 1 2号石棺出土状況
	2 京塚古墳全景（南西方向より）	2 頭骨出土状況
	3 京塚古墳全景（南側より）	3 四肢骨出土状況
8	1 第1トレンチ表工除去状況	22 1 人骨及び遺物出土状況
	2 第1トレンチ礫出土状況	2 粘土枕
9	1 毘沙門塚古墳調査風景	3 重圈素文鏡
	2 古墳全景	23 1 3号石棺調査完了状況
	3 石室開口状況	2 石棺出土状況
10	1 羨門を露出状況	3 蓋石除去状況
	2 羨門より奥壁を見る	24 1 神社裏古墳全景
	3 石屋形全景	2 後円部全景
11	1 石室前壁全景	3 前方部より望む
	2 石室奥壁全景	25 1 馬見塚1号墳（北東方向より）
12	1 石屋形奥壁	2 馬見塚1号墳（北より）
	2 石屋形左側壁	3 馬見塚2号墳（北西方向より）
	3 石屋形右側壁	26 1 馬見塚2号墳（南東方向より）
13	1 天井石破損状況	2 馬見塚2号墳裾部
	2 石積崩壊状況	3 参考地（7号墳）全景
	3 石屋形天井石破損状況	
14	1 石材加工状況	

挿 図 目 次

第1図 八幡校区古墳分布図（中村幸史郎作成）	3
第2図 錢龟塚古墳位置図（中村作成）	5
第3図 錢龟塚古墳測量図（中村作成・富田清子製図）	7～8
第4図 錢龟塚古墳石室実測図（中村実測・有働八千代製図）	11～12
第5図 京塚古墳位置図（中村作成）	14
第6図 京塚古墳測量図（中村作成・富田製図）	17～18
第7図 京塚古墳第1トレンチ実測図（中村実測・富田製図）	19
第8図 京塚古墳出土遺物実測図（富田実測・製図）	21
第9図 毘沙門墳古墳位置図（中村作成）	22
第10図 毘沙門墳古墳測量図（中村作成・緒方久美子製図）	23～24
第11図 毘沙門墳古墳石室実測図（中村実測・有働製図）	25～26
第12図 毘沙門墳古墳出土遺物実測図（緒方、富田実測・製図）	28
第13図 倉塚古墳位置図（中村作成）	30
第14図 倉塚古墳測量図（中村作成・緒方製図）	31～32
第15図 御靈塚古墳位置図（中村作成）	34
第16図 御靈塚古墳測量図（中村作成・緒方製図）	36
第17図 猿楽塚古墳位置図（中村作成）	37
第18図 猿楽塚古墳測量図（中村作成・緒方製図）	39～40
第19図 平小城校区古墳分布図（中村作成）	43
第20図 舞野石棺群位置図（中村作成）	44
第21図 舞野1号石棺実測図（中村実測・緒方製図）	45
第22図 舞野1号石棺出土遺物実測図（中村実測・製図）	45
第23図 舞野2号石棺実測図（中村実測・富田製図）	46
第24図 舞野2号石棺出土遺物実測図（中村実測・有働製図）	47
第25図 舞野3号石棺実測図（中村実測・有働製図）	49
第26図 大道校区古墳分布図（中村作成）	50
第27図 神社裏古墳位置図（中村作成）	51
第28図 神社裏古墳測量図（中村作成・富田製図）	53～54
第29図 馬見塚古墳群位置図（中村作成）	55
第30図 馬見塚1号墳測量図（中村作成・富田製図）	57～58
第31図 馬見塚2号墳測量図（中村作成・富田製図）	59～60
第32図 馬見塚3、4号墳測量図（中村作成・有働製図）	63～64
第33図 馬見塚5号墳測量図（中村作成・緒方製図）	65～66
第34図 馬見塚古墳群参考地測量図（中村作成・緒方製図）	67～68

I 調査の経過

1. 調査に至る経過

昭和53年に山鹿市立博物館が開館して早いもので10年を過ぎてしまいました。開館当時から菊池川流域を中心とした地域の考古・歴史・民俗資料を収集し、地域の文化財センターの役割を持たせようとの基本方針で活動してきました。この間博物館の業務はむろんのこと、文化財行政も併せて遂行してきました。

山鹿市にはご存じのように、国指定史跡チブサン古墳をはじめとして、弁慶が穴古墳、鍋田横穴群等の全国的に著名な装飾古墳が数多く残っており、全国各地から見学者が絶えず訪れます。

『古墳と灯籠といで湯の街・山鹿』とした山鹿市の観光にとって文化財は重要な資源となっています。そのため、市議会において『文化財愛護宣言都市』の採択が昭和54年になされました。このほかにも多くの文化財が散在し、とくに埋蔵文化財は各地で見ることができます。

このような環境の中では当然開発行為と遺跡保存の問題が出てきますが、文化財行政を博物館で担当しているため学芸員が行う小規模な発掘調査では限りがあり、行政指導に至っては十分な対応ができない状況でした。さらに、博物館においては、装飾古墳はもとより、他の古墳や横穴群に関する資料を一切持たず、来館者の要望に応えることが出来ませんでした。

そこで、市内に分布する古墳や横穴群、さらには出土遺物に至るまで記録していくことを目的として、昭和59年度より実測及び測量調査を実施しています。この年は山鹿市大字蒲生所在の『湯の口横穴群』を対象とし、湯の口溜池に面して水没する部分について調査しました。

昭和60年度は山鹿市大字城所在の熊本県指定史跡『城横穴群』の実測調査と、前年度の調査報告書の作成を実施しました。

昭和61年度は山鹿市大字方保田所在の『馬見塚古墳群』『方保田神社裏古墳』等の古墳の測量を中心として調査を実施し、前年度の調査報告書作成を行いました。

昭和62年度は『湯の口横穴群』の第2次調査を行い東端部を対象としました。

本年度は八幡校区に所在する古墳の実測、測量調査を行うこととし『銭龟塚古墳』『京塚古墳』『毘沙門塚古墳』などをその対象にしました。

調査に際しましては、NKK熊本放送局をはじめ、大栄設計株式会社、三菱電機株式会社等のご協力を得て、地下レーダー探査や赤外線テレビによる科学的調査を行い、多くの成果を上げる事が出来ました。ここに記して篤くお礼申し上げます。

2. 調査の組織

調査主体 山鹿市教育委員会

総括 弓掛正久（山鹿市教育長 9月まで）

北井澄生（ " 10月から）

調査団長 藤木正斗（山鹿市立博物館館長）

調査事務 毛利大地（ " 参事）

次木万里子（ " 主任主事）

大森 熊（ " 主任主事）

調査員 中村幸史郎（ " 参事・学芸員）

作業員 野田辰起、前川誠一、緒方泰男、脇山源市、坂田精一、高橋信子、淵上美里、有働八千代、緒方久美子、木下広美、前川真由美

整理員 松本清子、有働八千代、緒方久美子、木下広美

調査協力 NHK熊本放送局 竹田年郎、尾崎康治、上田倫明、宮本和俊、桝木賢一、半田 隆、丸山 学

地下レーダー探査 大栄設計株式会社 橋本 榮、松藤英之、永田政盛

赤外線調査 三菱電機株式会社 柳本重治

名塚区（区長 小松直幸）、熊入区（区長 中原 繁）、杉稻荷神社、大久保奎次、富田良一、中原 登、三森光子

II 八幡校区の古墳

1. 立地と環境

昭和29年4月1日をもって山鹿町、八幡村、三岳村、平小城村、川辺村、米田村、大道村、三玉村の一町七村が合併して山鹿市となりました。今日でもこれらの行政区は各小学校区として存在しています。

八幡校区は山鹿校区の北に位置した旧八幡村の区域で、北には三岳校区、東には三玉校区、西は川辺校区と隣接しています。これらの校区とは川と山で境を接しており、東の三玉校区と南の山鹿校区との境には菊池川支流の吉田川が流れ、西の川辺校区との間には岩野川の流れが存在しています。校区北側には、鹿本富士とも呼ばれる震岳（標高416.3m）がそびえ、三岳校区との境を接しています。

震岳の南麓には標高65mの台地がひろがり、集落はこの台地の裾を取り巻く様に形成されています。また、岩野川と吉田川の流れは菊池川へと注ぎ、流れに沿って氾濫源が形成されています。今



第1図 八幡校区古墳分布図

日でも重要な穀倉地帯となっていますが一部では条里の跡も残っていたところからも、古くから水田経営を行なっていました。さらに、微高地に於いては集落を形成しています。

八幡校区には国指定史跡『弁慶が穴古墳』をはじめとした古墳が多く残されており、これらを概観してみることとします。

校区北西部の大字杉地区には、赤穂義士遺髪塔やつつじの名所として知られる日輪寺が在ります。この裏山の頂上（標高130m）から、昭和44年内部主体に県北で唯一の竪穴式石室をもった『竜王山古墳』が発見されました。この調査に際し、震岳から南に伸びる尾根の先端の通称『ひょうたんびら』（標高161.8m）にも古墳が存在することが確認されました。^{註1}『竜王山古墳』の南東700mに位置した前方後円墳で、散在する石材から竪穴式石室の可能性が高いとされ、地名から『ひょうたんびら古墳』と呼ばれました。しかし、肥後国誌には山鹿郡中村手永名塚村の条に、銭を掘り出したところから銭亀山と言うと記され、また、鹿本郡誌にも『銭亀塚古墳』として数回の盗掘を受けていたことを記しているところから『銭亀塚古墳』の名前で今後呼ぶことにします。

震岳南麓の台地では、裾部を複雑に谷が刻んでいるため台地が舌状を呈しており、この先端部に立地するように古墳が築かれています。

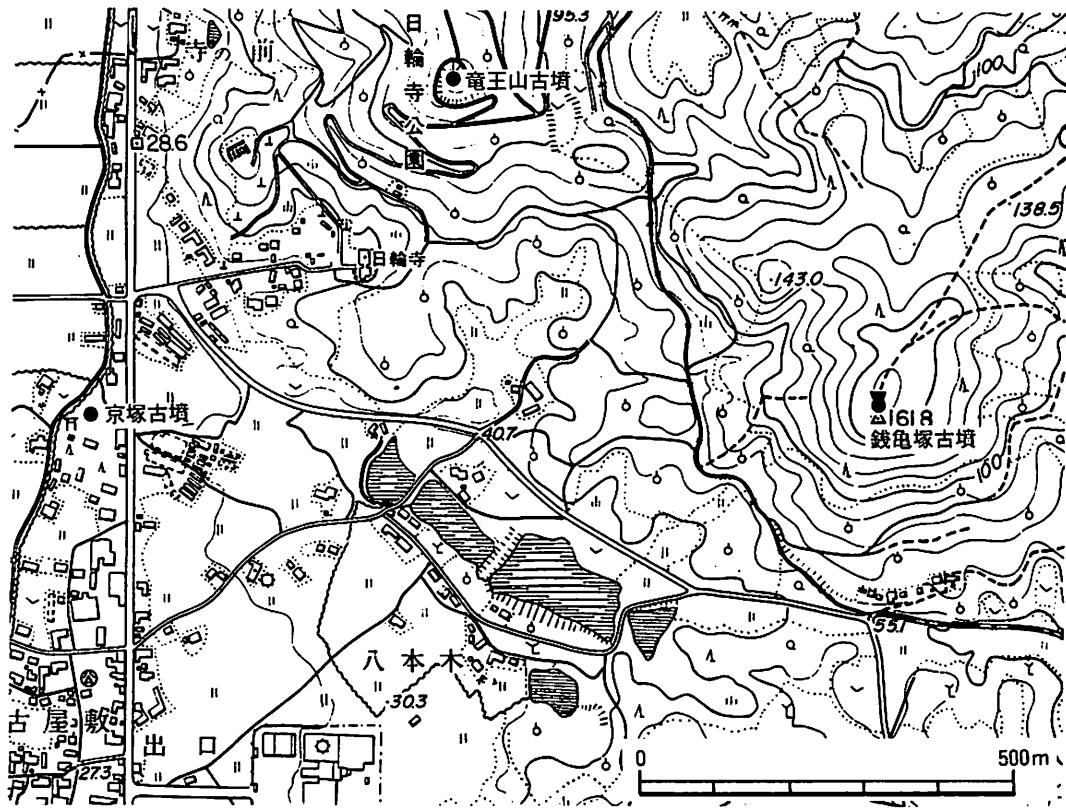
東端部の大字名塚地区には『猿楽塚古墳』をはじめとして七つの塚が在ると言われていますが、これまで本格的な調査は行われていません。肥後国誌によれば『猿楽塚古墳』から短刀と茶碗が出土したと伝えています。

西端部の熊入地区には台地中央に『毘沙門塚古墳』『御靈塚古墳』が残されていますが、昭和43年の圃場整備事業で『乳母塚古墳』が破壊されました。台地西端部では岩野川沿いの氾濫源を見下ろすかのごとく北から『倉塚古墳』『弁慶が穴古墳』が並んでいます。

さらに南に位置する觀念寺境内で円筒埴輪の破片が発見されたのは僅か2年前のことです。ここはかつて熊入城が築かれていたところで、城主多久大和宗貞は天正15年の『城村城の戦い』で佐々木奥守成正に内通していたと言われています。落城後觀念寺が築かれたりして墳丘の殆どを破壊していますが、円筒埴輪の出土によって、古墳であることが判明したので、『觀念寺古墳』と呼ぶこととしました。

岩野川沿いの氾濫源にも数基の古墳が残っています。北から大字杉地区の杉稻荷神社境内には『京塚古墳』が残り、南西約900mの位置には、県指定史跡『付城横穴群』と岩野川を挟んで対峙するように『河童塚古墳』『姫塚古墳』（消滅）が築かれています。また、ここから南へ1300mの大字石地区には武装石人と装飾古墳で知られる『臼塚古墳』と『臼塚西古墳』が残り、さらに南へ約300mの位置には円筒埴輪を出土した『金屋塚古墳』が在ります。

註1 畿 昭志・杉村彰一 「熊本県山鹿市竜王山古墳調査報告」『考古学雑誌』57巻3号



第2図 錢龜塚古墳位置図

2. 錢龜塚古墳

1 所在地

山鹿市大字名塚字野馬見 1007,1008

2 立地と環境

錢龜塚古墳は標高161.8mの通称「ひょうたんびら」の山頂に立地しています。

この山は山鹿市街地から北へ2kmの位置にあり、震岳(416.3m)から南西方向に延びる尾根の先端部にあたります。そのため震岳へのハイキングコースとして市民の間で親しまれている所です。

ここからは、南麓の熊入台地はもとより山鹿市内のほぼ全域を見渡すことができ、遠くは阿蘇の山々や有明海を隔てて雲仙岳を展望できます。

北西700mの所には標高120mの竜王山があります。この山は日輪寺の裏手にあたり現在はつつじの名所として知られており、山頂には県北唯一の竪穴式石室をもつ竜王山古墳が築かれています。

菊池川流域に於ける古墳の多くはせいぜい平野を見渡せる台地上か、微高地に築かれていましたが、これらの古墳がこれまでの常識では考えられなかった山頂に立地していることは、今後空白部分とされていた前期古墳の発見の可能性が出てきたものと理解することができます。

3 過去の記録

この古墳の名称については、先に述べたように『ひょうたんびら古墳』の別名で呼ばれていたことがあります。しかし、過去の文献や記録からはこのような名称は見いだすことができません。

明和9年（1772）に書かれた肥後国誌によれば山鹿郡中村手永名塚村の条につぎのような記載が見られます。

錢亀山 當村ト杉村トノ堺ニテ搖嶽ノ尾續也 津留村鶴ノ城跡ニ云ヘル錢亀山也 往昔里民夢ヲ感シテ錢ヲ掘タル跡トテ有之 舊ハ亀山ト云ヒシヲ錢ヲ掘出セシヨリ錢亀山ト稱スルニヤ南ノ平太タ嶮シ瓢簾平ト云 此邊ノ小石雨ニ漏ヘハ菊花ノ紋アリト雖モ一瑞未タ見ス 此上ヨリ上吉田ノ内柿迫ニ至リ紅躑躅甚タ多シ花ノ爛漫タルトキハ見物群集ス

明治8年（1875）に書かれた山鹿郡誌には名塚村の条で次のように記載されています。

錢亀塚 野馬見字瓢簾平ニアリ周廻五十間程也 昔杉村ノ者此塚ヲ掘テ石棺ノ蓋石ヲ持行溝ノ橋トス石ニ銘アリ 此ノ塚ノ石棺ハ四方ニ石ヲ積立タル物ニテ其石ニ朱附リト云今石棺埋レテ不見……

また、大正12年（1923）に出された鹿本郡誌には次のように記載してあります。

錢亀塚 同村（八幡村）名塚にあり、圓塚数回発掘せられて其の形を一変す、然れども石柳石棺なし唯岩石に朱の附着せるものを多く掘出したり。

このように古くから古墳として理解され、さらに錢亀塚と呼ばれていたことから考えても『ひょうたんびら古墳』の別名はふさわしくないので今後『錢亀塚古墳』と統一して呼ぶこととします。

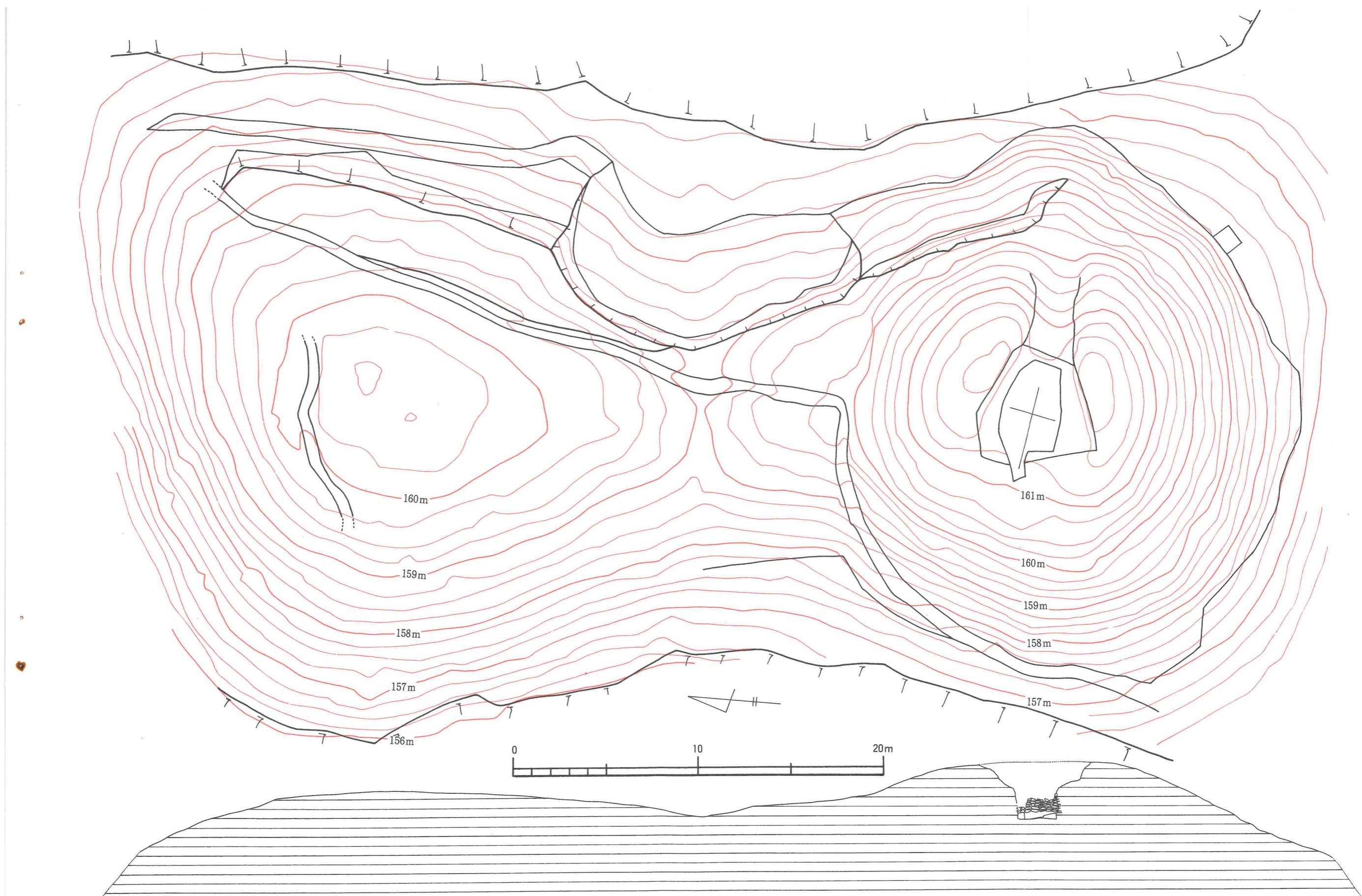
さて、これらの記録からこの古墳が過去数回の盗掘を受け、錢が出土したり石蓋を持ち出されたりしていたことが理解されます。

錢を掘り出したことによってそれまで亀山と呼んでいたのを錢亀山と言うようになったのは当時としてはかなりセンセーショナルな出来事だったと思われますが、残念な事に盗掘の時期や誰が掘り出したのか全く解りません。少なくとも明和9年の時点で往昔（おおむかし）と書かれていることはそれよりかなり以前の出来事として理解しなければなりません。また、古墳の内部構造についても興味深いことが記されています。

肥後国誌が書かれた明和9年（1772）の段階では錢が出土したことのみが注目されて、内部構造に就いての記載は見られませんが、明治8年（1875）の山鹿郡誌には天井石を有し四方が石積みの石棺とあり、石室構造であったことが推察され、石材には朱が塗られていた事も確認されています。

また、昔、天井石を杉の者が持ち帰り石橋に転用しており、この石に何かが刻まれていたといいます。これが、石橋として現在も残っているか追跡調査の必要があります。さらに石に刻まれていたのが何であったのかも併せて調査する事が重要になってきます。もしかしたら装飾の可能性もあるようです。いずれにしてもこの段階で石室の石材が既に抜き取られていた事が窺えます。

鹿本郡誌が書かれた段階（大正12年）では、既に数回の盗掘を受けており、墳形はおろか内部主



第3図 錢亀塚古墳測量図

体も石棺か石室が判断出来ない程に破壊されたことが窺えます。当時古墳の形は円墳として認識されていたようです。

その後この古墳は火葬場として利用されるようになり、地元名塚村はもとより杉、寺島、熊入の村々の人々の間で戦前まで盛んに使用されました。そのため古墳であることを忘れかけていましたが、昭和44年の竜王山古墳調査で改めて古墳として確認されました。

当時全長40m、後円部径約20m、高さ5m位の前方後円墳であろうとされ、散在する石材から竜王山古墳と同じ堅穴式石室の可能性が高いとされたのです。またこの時初めて『ひょうたんびら古墳』という名称が付けられました。

3 墳丘(図版1, 2-1, 第4図)

古墳が立地するひょうたんびら山は標高161.8mの高さを測り、麓の台地からでも比高差106mに達しています。頂上は南北方向になだらかな尾根を形成しており、この自然地形を利用するように古墳が築かれています。

古墳は主軸を N5°W とほぼ南北に向けた前方後円墳ですが、自然の地形を利用しているため古墳自体の規模については不明確な点があるのも否めない事実です。

後円部は古くから古墳として認識されていましたが、前方部については竜王山古墳調査の際初めて注目されたのです。当時も北に延びる尾根が前方部とすればという表現で断定には至っていませんが、雑草が繁茂した状況の中では当然の結果だったと思われます。

今回は檜のみを残し雑草をすべて刈り取った状態で調査を実施しましたので古墳の東側と西側の斜面においては、墓域を示すかのごとく削り出しが見られたり、くびれ部の状態から前方後円墳であることは確実で全長約65m、後円部径27m、高さ5m、前方部幅32m、高さ4mの規模になるとと思われます。

しかし、前方部については自然地形を利用しているため、どこまで含むかについては今後の調査で確認する必要があります。

現在墳丘上には踏み分け道が後円部西側を迂回してくびれ部から前方部東端部に向かうものと、前方部を横断していくものがありますが、最近では山歩きする人も少なく一部では道が途切れている所も見られます。とくに後円部に於いては墳丘裾部に沿って道が延びており、くびれ部西側には僅かではあるが裾部のラインが残っています。

墳丘東側ではくびれ部から前方部に沿って階段状を呈しており、あたかも三段築成のようになっています。また一部では削り込まれている所も見られますが、概ね原形を保っているようです。

後円部は既に数回の盗掘を受けていたり、火葬場として使用されていたため、墳頂部が直径4m、深さ約1mに亘って窪んでいました。その時堆土した土が後円部東側に流れ出ており、墳丘裾部が大きく膨らんでいます。さらに東南部には天保12年に築かれた石の祠が残っており、この部分を中心にして墳丘裾部には変成岩による葺石が確認されます。

4 内部主体(図版3~6, 第4図)

この古墳の内部主体については石材や立地条件等から竜王山古墳と同じ豊穴式石室の可能性が高いとされていたため、豊穴式石室であろうと考えて調査を開始したのですが、豊穴式石室の要素を多く残し、なおかつ西側に向かって開口する入口部を有する豊穴系横口式石室もしくは、初期の横穴式石室であることからが明らかになりました。

石室は变成岩の割り石を積み上げたものですが、過去の盗掘でその殆どを破壊され、天井石はもとより壁面の石積みも多く失い、僅かに石室の下部を残す程度が検出されました。

石室は主軸を N80°30'W を測り、真西と西北西の中間位置に向けており、古墳の主軸と直交する形をとっています。

平面プランは長方形で長さ335cm、幅217cmの規模で作られていますが、床面から48cm~54cmの高さまでは变成岩の岩盤を割り貫いて石室のプランを作り出していました。

岩盤の部分には凝灰岩板石を石障として立て掛けましたが、僅かに奥壁の石障が半欠の状態で検出され、南側壁と入口部の石障は端部の根の部分が僅かに残っている程度検出されました。しかし、床面には石障を立てるための溝が幅10~15cm深さ10cmの規模で残されており、石障が岩盤を隠すかのごとく壁面の前に立て掛けていたことが理解されます。また、石障は左右石障を前後の石障が挟み込むように立てていたことも明らかになりました。床面はほぼ平坦で石棺等の埋葬施設は見ることはできませんでした。これはいわゆる肥後型横穴式石室の特徴を多く持っていると言えます。

石室壁面は先に述べたように、盗掘による破壊がひどく僅かに奥壁が半分を残しているだけで、南側壁は両端部、北側壁は下端部のみ、入口部では南側の石積みが残されていました。

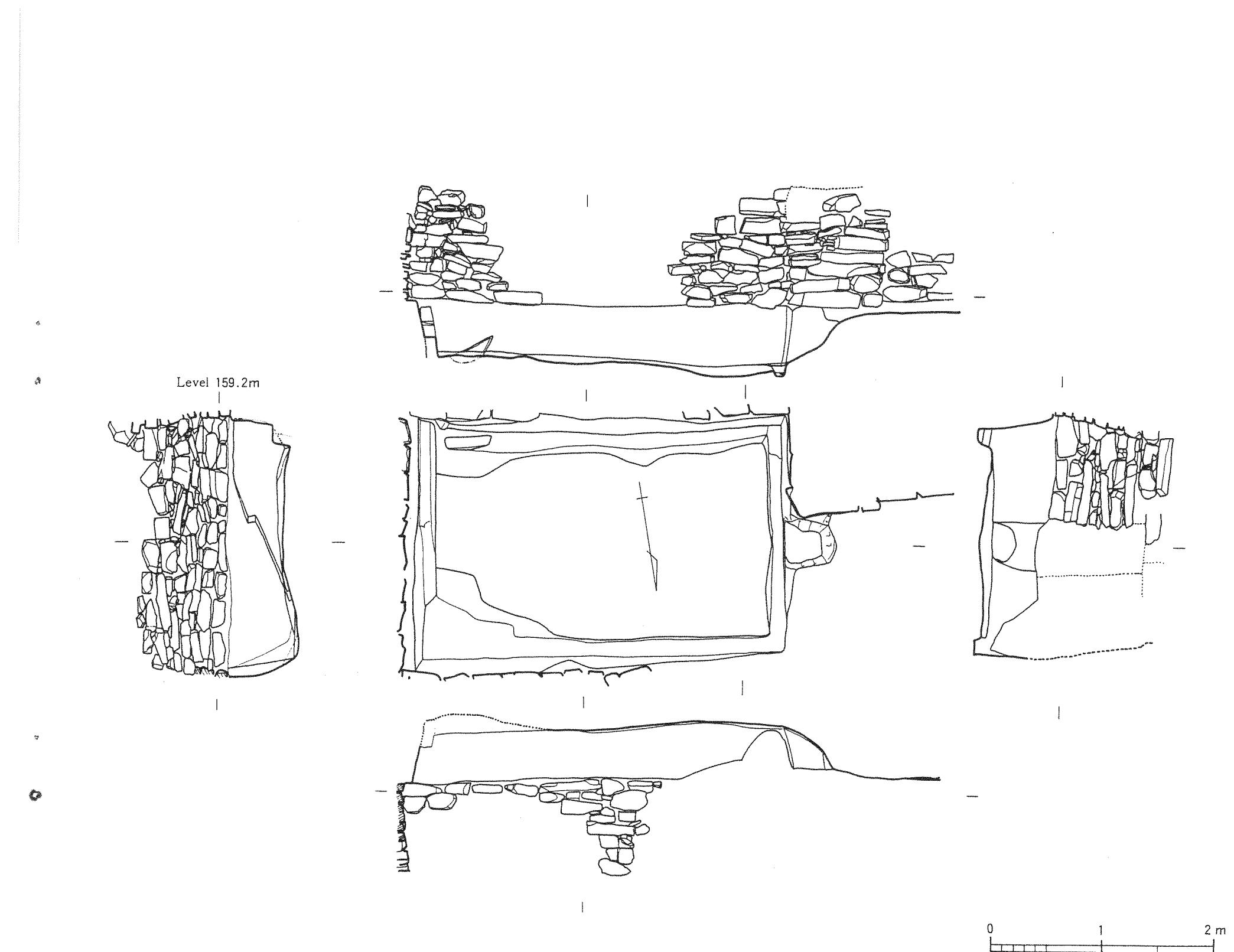
入口構造については檜が植っていたため調査区域を拡張することが出来なかったことや、北側の石積みの破壊が著しく、構造や規模については不明な点も見られますが、概略理解することができました。

羨道部は4段の石積みで長さ60cmまでを確認することができました。さらに、羨門部は割り石小口積みで、長さ80~90cmに亘り僅か10cmですが羨道部より狭くなっています。これらの床面も岩盤まで掘り込んでいましたが、石室床面より45~55cm程度高くなっていました。

また、石室に入る所では45cm四方で深さ25~45cmに亘ってステップが作られており、これから考えて羨門の幅は45cm程度の規模になると推察されます。さらに、石室内に入ると石障が置かれているためステップとの間に仕切りが出来て狭くなるため、石障上面にはU字形の割り込みが存在していたものと推察されます。

石障自体破壊が著しかったため、あまり残っていなかったことは先に述べた通りですが、調査の段階で出土した凝灰岩は破壊のため破片が多く、石障総ての石材は出土しませんでした。従って山鹿郡誌に記載されていたところの、杉の者が溝の橋とした石棺の蓋石は石障ではなかったかと考えられます。

石室は变成岩の割り石小口積みで全面に赤色顔料を塗布しており、僅かに残っていた石障の外面



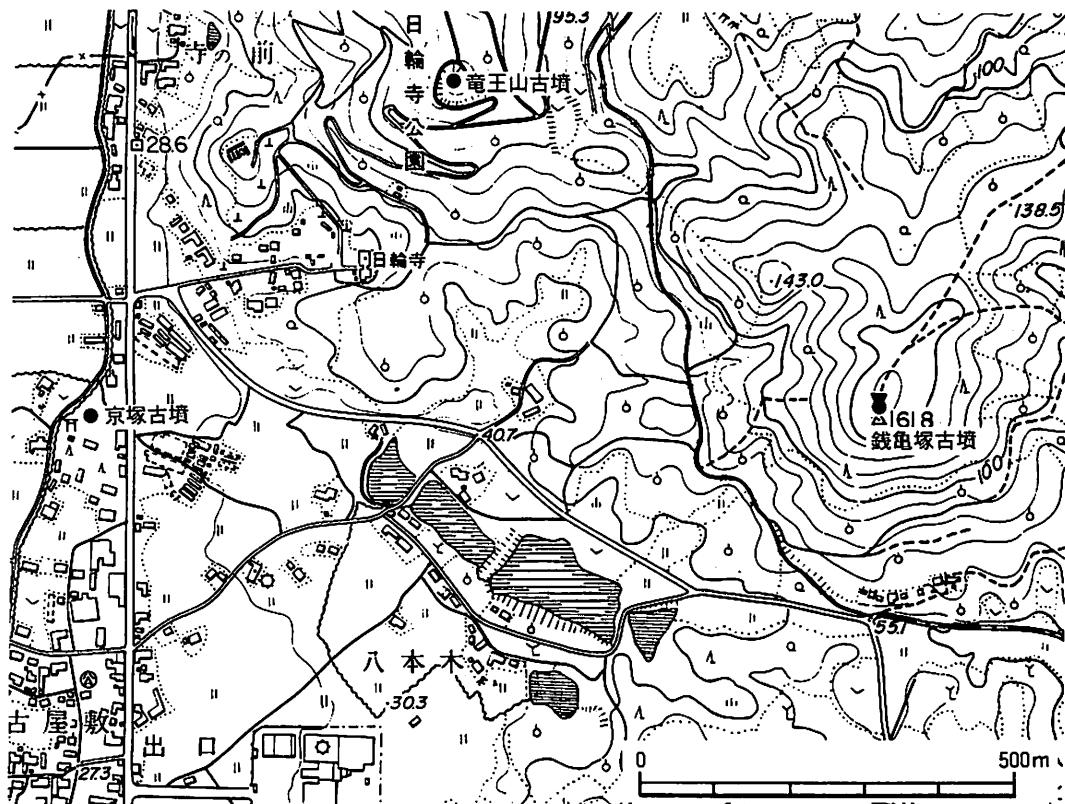
第4図 錢龜塚古墳石室実測図

にも全面に亘って塗られていきました。むろん盗掘による石材の移動は著しく、調査の段階でも石室自体の構造を断定するにはかなりの時間を要しました。当初は竪穴式石室のつもりで調査に臨んでいましたが、石室の規模が竪穴式石室にした場合長さに対して幅が広すぎる点が気掛かりでした。その後の調査で石室西側に入口施設を有していたことが確認され、石室の構造は竪穴式石室ではなく竪穴系横口式石室もしくは初期の横穴式石室であることが判明しました。いずれにしてもこの種の石室は菊池川流域に於いては非常に数が少なく、竪穴式石室から横穴式石室への変遷を考えるうえに於いて貴重な古墳であることが明らかになりました。また、石障系横穴式石室（肥後型横穴式石室）との問題を考えるうえに於いても重要な古墳であると言えます。

5 出土遺物

肥後国誌にこの古墳からかつて錢が出土したと記載されている事は、1過去の記録の項で述べましたが、この時ことごとく中の遺物を掘り出したものと思われます。さらに度重なる盗掘によって石室まで破壊されてしまったため、石室内からは残念ながら何一つ古墳に関する遺物は出土しませんでした。ただ火葬場として利用していた時に混入したと思われる遺物が数点出土しました。

従ってこれらは、古墳の時期を決定するに足りうる資料ではありませんので省略しました。



第5図 京塚古墳位罫図

3 京 塚 古 墓

1 所在地

山鹿市大字杉字平原721-2

2 立地と環境

山鹿市街地から国道3号線を約4km北に行くと右手につづじの名勝地となった古刹日輪寺があります。この日輪寺から国道3号線を挟んで南西400mの所に大木に覆われた杉稻荷神社があります。

杉稻荷神社はその名にふさわしく杉の大木が多く残っています。かつては榎や楠の古木が残っていたということでしたが、今では殆ど見ることが出来ません。京塚古墳はこの杉稻荷神社の境内に残っています。

山鹿市を西流する菊池川には大小65の支流が注いでいます。支流の中で最も大きいのが岩野川です。この川は鹿本郡鹿北町大字多久の山間部に源を発し、山鹿市鍋田の合流点まで全長24.5kmの長さを測り、途中谷あいに氾濫源を形成しています。とくに山鹿市に於いては南北4km、東西500m、菊池川との合流点の付近でも幅1kmと細長い氾濫源が広がっており、今日に於いても重要な穀倉地帯となっています。この氾濫源の中には古墳が散在し、東端に立地するのが京塚古墳です。この外

にも、南西900mの所に河童塚古墳と姫塚古墳（消滅）がありました。山間部に目を転じれば京塚古墳の北東700mの山頂には竪穴式石室をもつ竜王山古墳があり、東に1100mには銭龟塚古墳があります。

3 過去の記録

京塚古墳が古墳として記録されたのは鹿本郡誌（大正11年）が初めてです。

京塚 同村（八幡村）大字杉にあり圓塚未発掘、頂上に楓樹一株あり、東西三間南北四間高さ一間。

その後は古墳としての認識が薄れ、どちらかというと忘れられて行った感があります。というのも、杉の人々の間には昔稻荷神社が火事になったとき、その廃材を積み上げたものであるという言い伝えが残っており、今日まで信じられているのです。

確かに古墳の周囲には瓦の破片が散在したり、北側には廃材や砂利が積み上げられたりしていました。さらに墳丘には全面に杉が植えられたりしていましたが、管理状態が悪く雑草が繁茂しており、これらの事から考えても古墳としての認識は低かったようです。

また、神社総代の池田敬次郎氏の話によれば、昭和22年頃先代の神主緒方高明氏と雑談した時、神社の境内に本殿より高い構造物があったらよくないとの事だから、塚を削ろうということになって、瓦焼き屋に粘土を取って貰ったが、粘性が強く外の土と混ぜて使わなければならず採算が取れないので中止したとの事でした。これは墳丘東側の裾部のことで現在はブロックで囲ってあります。

京塚古墳はこれまで一度も正式な調査が行われたことはなく、どちらかといえば古墳である事に対して否定的な見方をされていたと言えるのではないでしょうか。

4 調査の方法

古墳か否かという問題に対して何等決定的な資料を持たなかったため、今回の調査では資料の収集を目的として古墳の平板測量と地下レーダー探査による内部主体及び周溝の確認調査を実施しました。

調査に当たってはN H K熊本放送局の全面的な支援のもと、大栄設計株式会社の協力を得て実施しました。地下レーダーについてはここ数年で開発されたもので、九州ではただ一台しかないという機械でした。

調査はまず草切りから開始し、古墳の平板測量、その後現地に1m四方の升目を落として地下レーダー探査の基準線づくりを行いました。

レーダー探査はアンテナ部分で電波の発信と受信を行い、ケーブルで接続したモニターで映像を見たり、フィルムやV T Rに收めたり出来ます。ただ、ケーブルが20mの長さしかなく、モニターの設置いかんでは調査の範囲が限られてくるという問題点を含んでいます。また、アンテナから発信された電波はアンテナ本体から真下に向かって発信され、モニターに出てくる映像は水平になっ

て映ります。そのために水平な地面を調査する場合は問題ありませんが、古墳などのように斜面の場合でも水平に映像が映り、モニターを見ただけでは遺構を判断出来ません。従って、事前に古墳の詳細な平面図と断面図が必要となるのです。

探査地点を確実に平面図に落とし、かつモニターに出てきた映像を断面図にのせて初めて完全な映像になるのです。この作業は本来コンピューターで解析するのですが、予算の関係もあってモニターの映像をフィルムに収め、写真にした後断面図に張り付ける作業を行いました。

探査地点は周溝の調査に22のポイントを実施し、内部主体の確認調査に10のポイントを実施しました。

5 墳丘（第6図）（図版7、第6図）

古墳の裾部を削られているため現在直径18mですが、地下レーダー探査によって東側裾部の削平部分について周溝の確認調査を行ったところ、現在の裾部から3m程度の範囲で土層の変化が見られました。当初周溝ではないかと考えていましたが、その後古墳測量図で復元推定ラインを引いたら、土層変化の外形線とびたり重なることが判明しました。従って、この土層の変化は周溝ではなく古墳築造の版築の跡であろうと考えられ、復元すると直径22mで、高さ4mを測る規模の円墳となります。

墳丘裾部の削平は東側の外に、南側でも幅9mに亘って行われていました。この面には草切りの段階で須恵器や土師器の破片が散在していることが確認されており、この時点で古墳であることが確定しました。

また、墳丘の南斜面においても一部土砂の流失が見られます。墳頂部は本来直径6mの円形になりますが、今では三日月形をするほどに封土の流失がみられ、恐らく内部主体の上に在ったものが何等かの理由で流れ出したものと思われます。これが盜掘に因るものか、自然崩壊に因るものか断定できませんが、墳丘の窪から考えて内部主体にも流れ込んでいる可能性が高いようです。

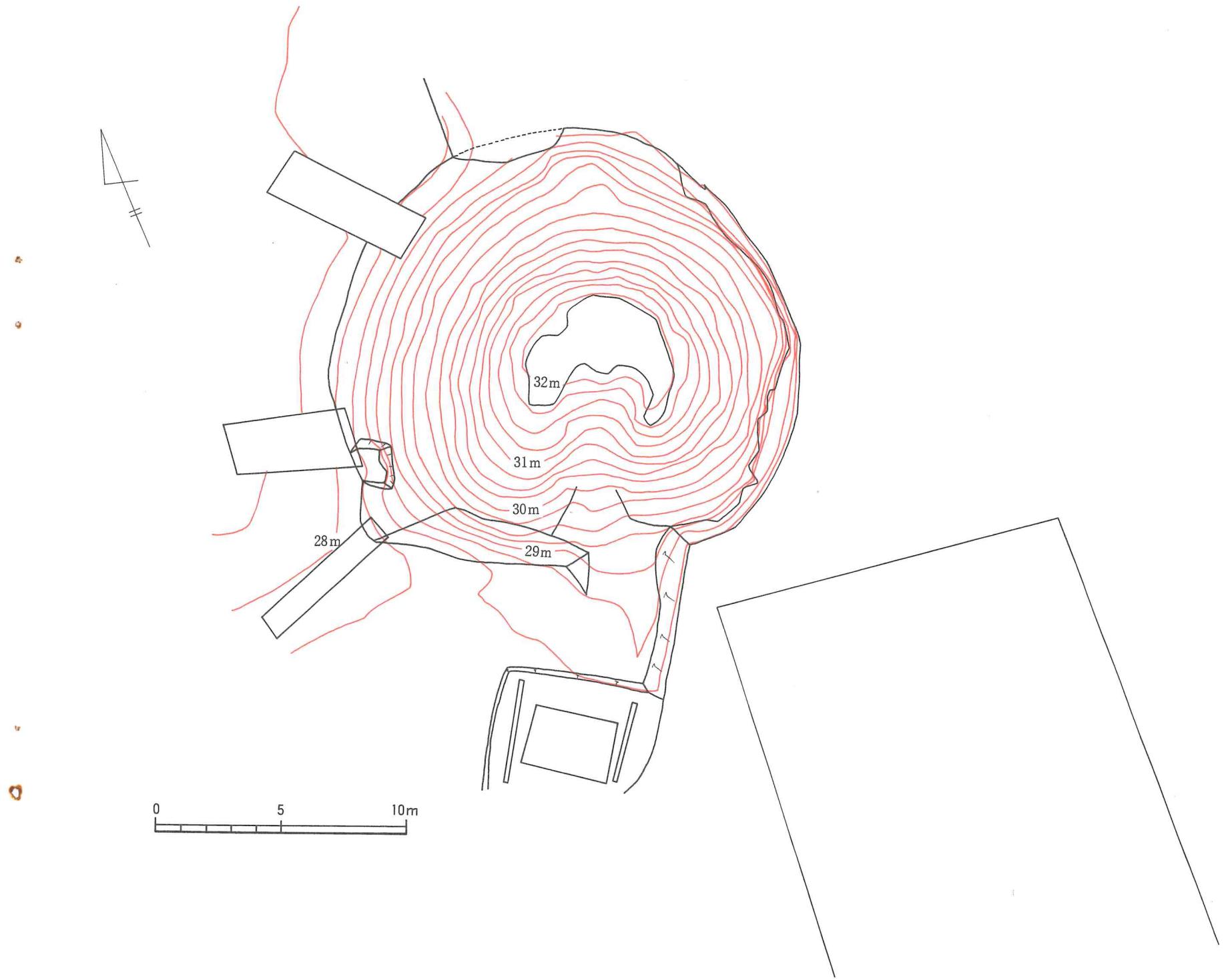
6 周溝（図版8、第7図）

古墳西側に於いては裾部まで比較的原形を保っていますが、レーダー探査によれば墳丘裾部の外側に幅2～5mに亘り土層の変化が見られました。

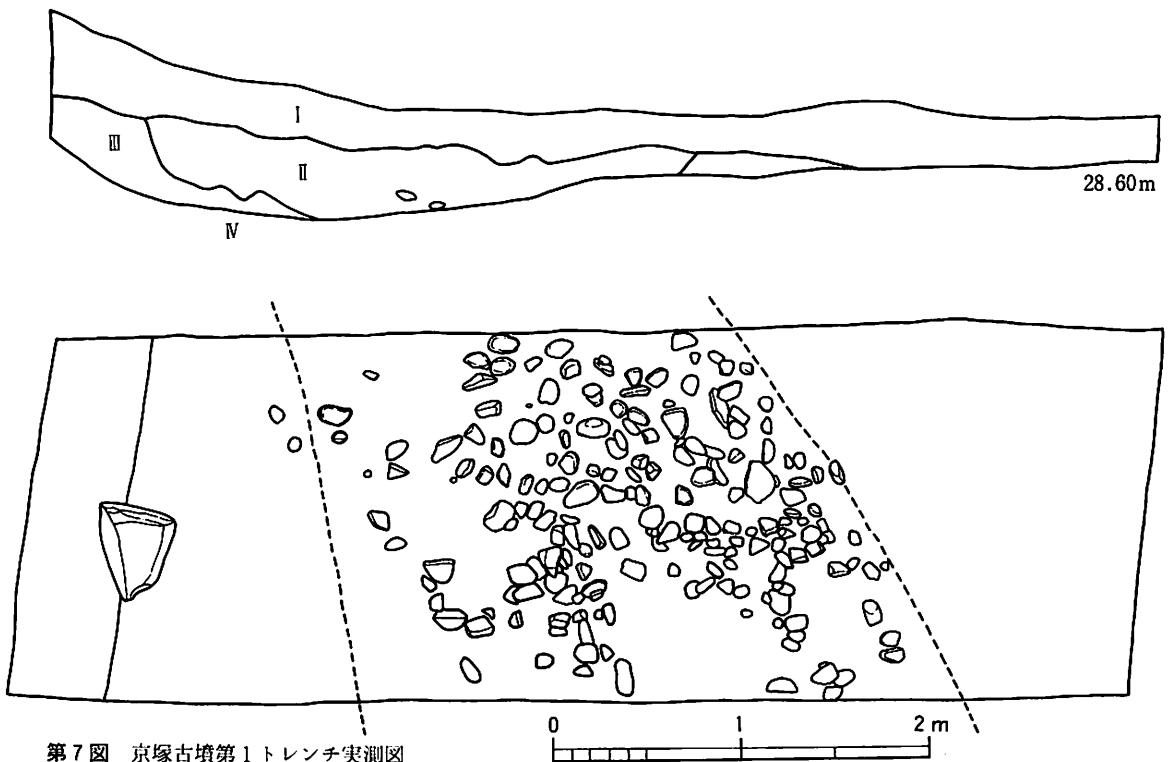
その為この変化が周溝であるのか否かの確認のため3箇所にトレンチを入れてみるとしました。トレンチは北から3本設置し、第1～3トレンチと呼ぶこととして調査を開始したところ稻荷神社と神社総代会からクレームがつき、調査途中で埋め戻しをすることとなり十分な成果を得ることが出来ませんでした。

第1トレンチ（第7図）

古墳の北西側でレーダー探査を行った結果地下1mのところで2.4mにわたってかなり強い反応が見られ、周溝の可能性が高いと考えられました。従ってレーダー探査の結果を確認する意味で長さ6m、幅2mの大きさのトレンチを設定しました。



第6図 京塚古墳測量図



第7図 京塚古墳第1トレンチ実測図

トレンチ内からほぼ中央部に於いて南北に延びる磐群が検出されました。この磐群は第Ⅱ層の暗褐色土層の中に含まれていたもので、この土層は浅い溝状を呈していました。第Ⅲ層は黄褐色土混褐色土層で、第Ⅳ層は黄褐色砂磐層となっています。従ってこの磐群が古墳築造の段階で使用した葺石が転落して出来たものか、または第Ⅳ層の露頭部分であるのかについての断定は出来ない状態で調査の中止を迫られたため、結論を出すに至りませんでした。

いずれにしてもレーダー探査で強い反応を示したのがこの磐群と思われます。

第2トレンチ

レーダー探査では古墳西側の墳丘裾部から4mの範囲で周溝らしい反応が見られましたので長さ5m、幅2~2.5mの規模でトレンチを設置しました。

第1トレンチで見られた暗褐色土層（第Ⅱ層）や磐群は確認できませんでしたが、トレンチ西端部から鉄製轡1点が出土しました。本来であれば古墳の内部もしくは前庭部から出土しなければならないものが墳丘裾部から4mも離れて出土した事から考えて、過去に盗掘を受けていた可能性が高いと言えるでしょう。また、轡出土によってここが古墳であることが決定付けられました。

しかし、神社側からの強い要請で調査を中断しなければならず、轡の出土状況や土層断面図などの実測図すら書くことができませんでした。

第3トレンチ

このトレンチは長さ6m、幅1mの規模で深さ約50cmまで掘り下げましたが、周溝を確認できる層は検出されませんでした。なお、須恵器破片4~5点が出土しましたが、いずれも流れ込んだ状

態での出土と考えられました。恐らく轡が移動した際墳丘南側で確認された須恵器の一部も表面に出てきたもので、これが流されたものと思われます。

レーダー探査の結果を確認するためにトレンチを設定しましたが、3本のトレンチはいずれも1m未満の深さしか掘ることが出来ず、不十分な状態での比較せざるをえなかったことが心残りです。

7 内部主体

内部主体について考える以前の問題として、果たして古墳であるか否かがこれまで決定されていませんでした。そのため古墳である事はむろん、内部主体について考える判断材料を持たなかったと言えます。

今回の調査では内部主体の確認を大きな目的としていたもので、地下レーダー探査による確認調査を行いました。調査は墳丘南側の土砂流失部分を内部主体の直上と考えて、この付近を中心には対象としました。

内部主体については墳丘の崩れ等から横穴式石室であろうと予測して、レーダー探査は石室主軸の方向に実施しました。

巻頭図版1（№1、2）は墳丘南側から墳頂部に向かって機械を走らせました。その結果1m、6m、9mの地点で石材らしき反応を示していました。さらに古墳断面図の上にこの写真を重ねますと、巻頭図版2（№1、2）のごとく横穴式石室の輪郭が微かに読み取れるようになりました。

写真で白もしくは赤に見える部分が石材で、紺色に見える部分が石室空間であろうと考えられます。写真左側には閉塞石が引き倒され、羨門の石材が反応しているようです。しかし、巻頭図版2-2では横穴式石室でも複室のようにも見えますが、2-1では単室のようにも見えます。従って单室か複室かについて即断できない状況ですが、複室の可能性が高いと考えます。

いずれにしても内部主体は石棺ではなく、横穴式石室であることが判明しました。

8 遺物（第8図）

遺物の出土については先にも述べましたが、原位置を保っている遺物はひとつもなく総てが移動していると考えられるものばかりでした。そのため総て破片ばかりで復元実測を行いました。

遺物は総て須恵器で墳丘南側斜面から出土したものです。

1～4は坏身破片で1は口径11.4cm、最大径14cm程度になります。立ち上がりは1.6cmで反り気味に延びており、蓋受けはU字形で先端部をつまみ上げています。胎土は極めて細かな土を使用し全面ナデ仕上げを施していました。

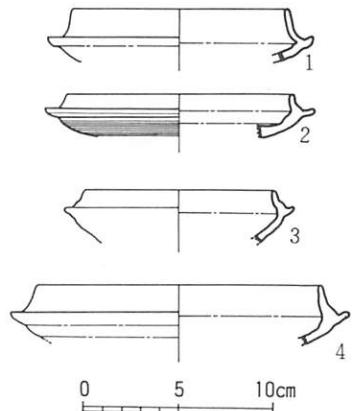
2は口径11.8cm、最大径14.2cm程度の大きさになります。立ち上がりは0.8と低く内側に傾きながら延びています。蓋受けは浅く先端部は水平気味に作られています。胎土には砂粒を含み、外面にはカキ目を残しています。

3は口径10cm、最大径12cm程度の大きさになります。立ち上がりは0.9と低いが先端部はシャー

に伸びています。また、蓋受け端部は僅かに水平方向に伸びています。胎土は砂粒を含まず全面ナデ仕上げを施していました。

4は口径12.8cm、最大径17.8cmになり、立ち上がりは1.6cmと高く、真っすぐに伸びています。蓋受けはU字形で先端は斜めに伸びています。胎土には砂粒が僅かに混入しており、全面ナデ仕上げを施していました。

このほかにも無蓋高壺の壺身部分や轡等が出土しましたが保存状態が悪く図化には至りませんでした。



第8図 京塚古墳出土遺物実測図

4 毘沙門塚古墳

1 所在地

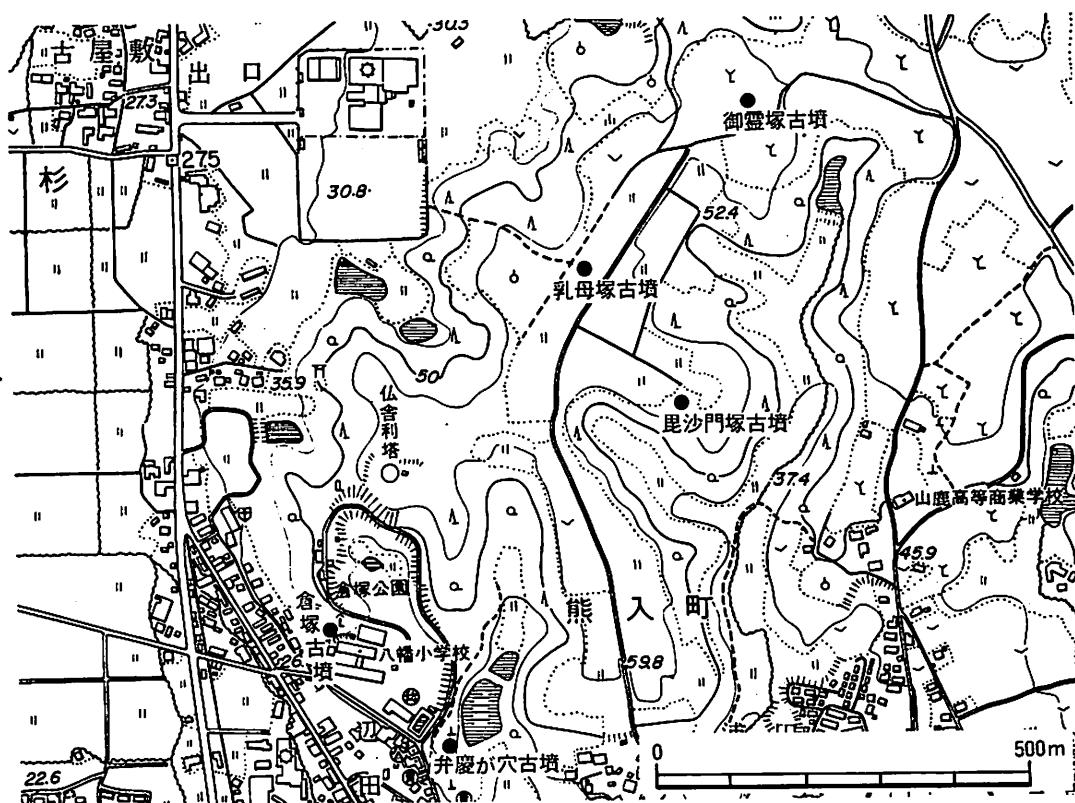
山鹿市大字熊入字上ノ原582

2 立地と環境

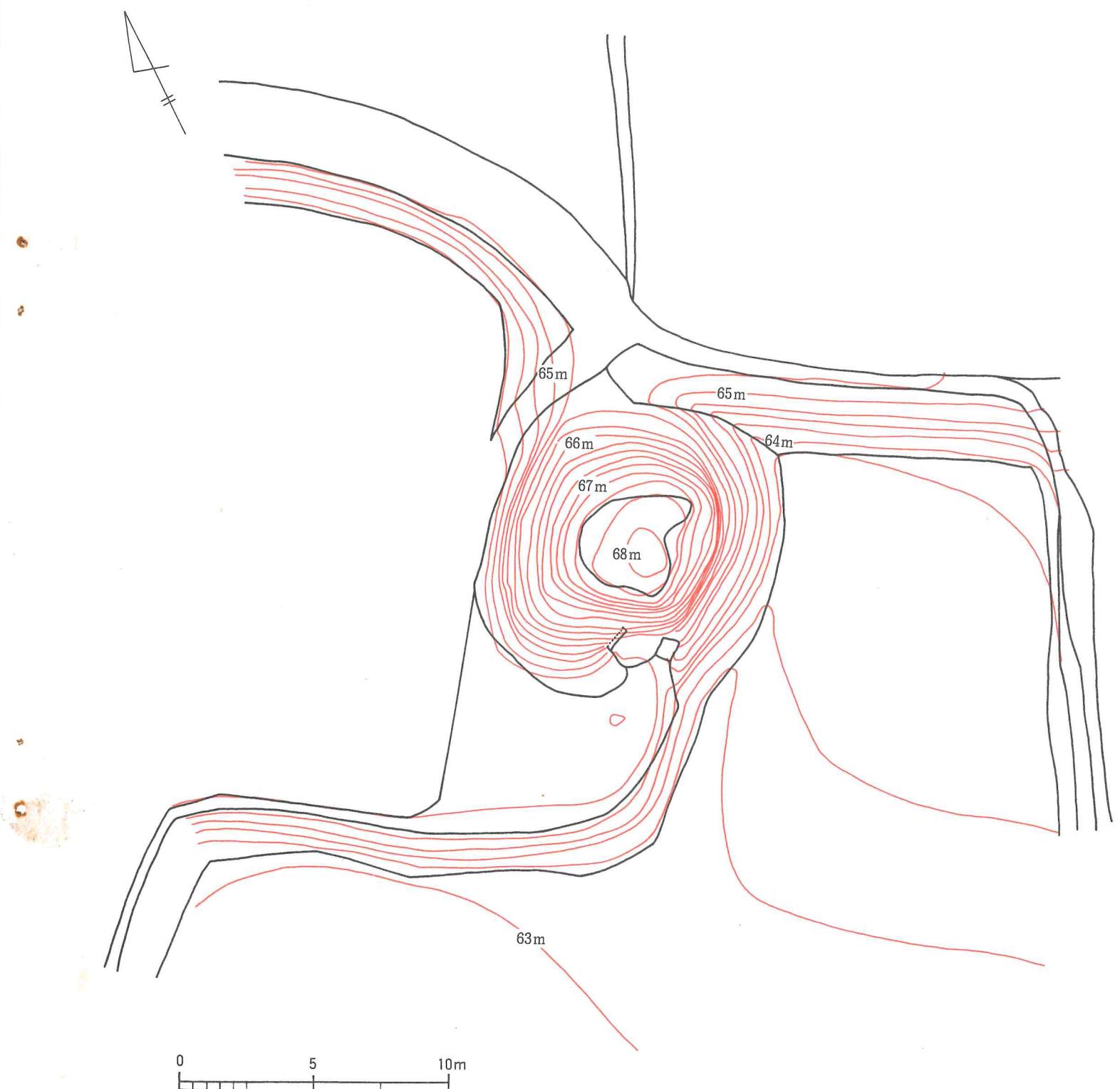
熊入地区の北側には標高65mの台地が発達しており、裾部は複雑に谷が刻まれ舌状を成しています。古墳は弁慶ヶ穴古墳から北東へ約550mの位置で、舌状をした台地の先端に築かれていました。台地の上は昭和43年の圃場整備事業で水田化が行われ、造成のため一部地形の変化が生じています。周辺部の殆どは山林で比較的自然の地形を保っていました。

3 過去の記録

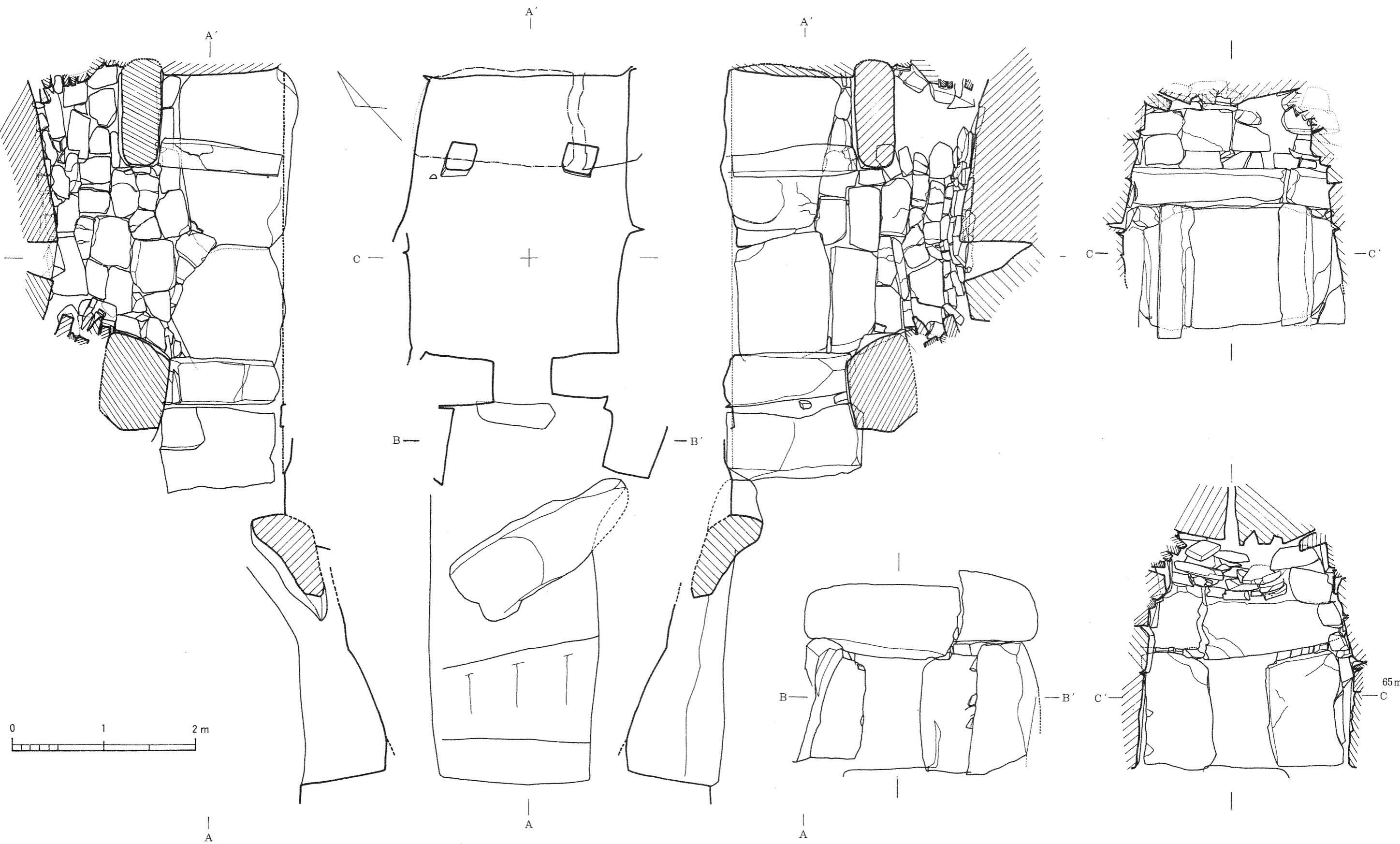
この古墳は古くから開口しており、肥後国誌にも山鹿手永熊入村の条に次の様に記載されています。



第9図 毘沙門塚古墳位置図



第10図 昆沙門塚古墳測量図



第11図 昆沙門塚古墳石室実測図

御料人塚 里俗ノ説ニ昔時吉田落城ノ時又ハ御宇田落城ノ時トモ云城主ノ娘幼年ナルヲ乳母カ介抱ニテ此邊リ迄落忍ヒ来リシヲ敵方ヨリ追来リテ切殺シタルヲ理シ故名クト云一説ニハ御靈塚ト云、此塚ヨリ西ニ有ルヲ其乳母ヲ殺シテ埋メシ所故乳母カ塚ト云リ右城主ノ姓名不分明又此邊ニ別ニ塚アリ其中切石ヲ壁トシテ弁才天ヲ安ス夜更テ此邊リニ奇火見フル事アリト云

御料人塚は現在御靈塚と呼ばれているもので詳細については後述することとして、毘沙門塚古墳については内部は切石による石室であることが知られ、弁才天を祀っていたと記載されている事から考えると、肥後国誌が書かれた明和9年（1772）の時点では既に開口していたことが明らかとなりました。

山鹿郡誌には熊入村の条で多くの古墳と共に次の様に記載されています。

毘沙門塚 字上原ニアリ 中ニ石屈アリ何レノ頃ヨリヨ屈内ニ毘沙門安スヨリ毘沙門塚ト云
屈中圓径八尺位

鹿本郡誌では次の様に記載していました。

毘沙門塚 同村（八幡村）熊入にあり、圓塚にして既に発掘せらる内部には大なる切石を以て疊みたる石棺あり何時の頃にや此石棺内に毘沙門を祀れり、故に其名あり、東西四間南北五間高さ壱間半。

肥後国誌では古墳内部に弁才天を祀ていたとして、古墳の名称については何等書かれていません。しかし、山鹿郡誌と鹿本郡誌では毘沙門天となっており、その名をとって毘沙門塚古墳としたことが理解されます。

4 墳丘（図版9-1, 2, 第10図）

周囲を開墾されかなり小さくなつて現在直径12m、高さ4mを計る円墳ですが、本来の大きさについては時間的、経済的に不足したため確認することが出来ませんでした。

昭和42年にここを訪れた際には墳頂部に巨大な梅檀がそり立っていました。梅檀は古墳を抱きかかえるように根を張り、その先端は石室の中にまで達していました。しかし、20年を経過した今日では梅檀は朽ち果て、墳丘の一部は陥没していたりして全面に雑木が繁茂しています。

5 内部主体（図版9-3～13, 第7図）

内部主体は凝灰岩を使用した横穴式石室で主軸はN43°Eでほぼ南西方向に開口しています。

石室は单室で比較的大きめの石を腰石とし、壁には一部に切石を使用していますが、多くは小さ目の割り石を使用しています。これら石材の多くは梅檀の根によって割られており、特に石室天井石と石屋形天井石、それに羨門眉石の巨石が二つに割れています。さらに、石材の中には欠落したり、亀裂が進んだりしているものもあり、前庭部では羨門天井石が転落しており石室の崩壊は進行しつつあります。

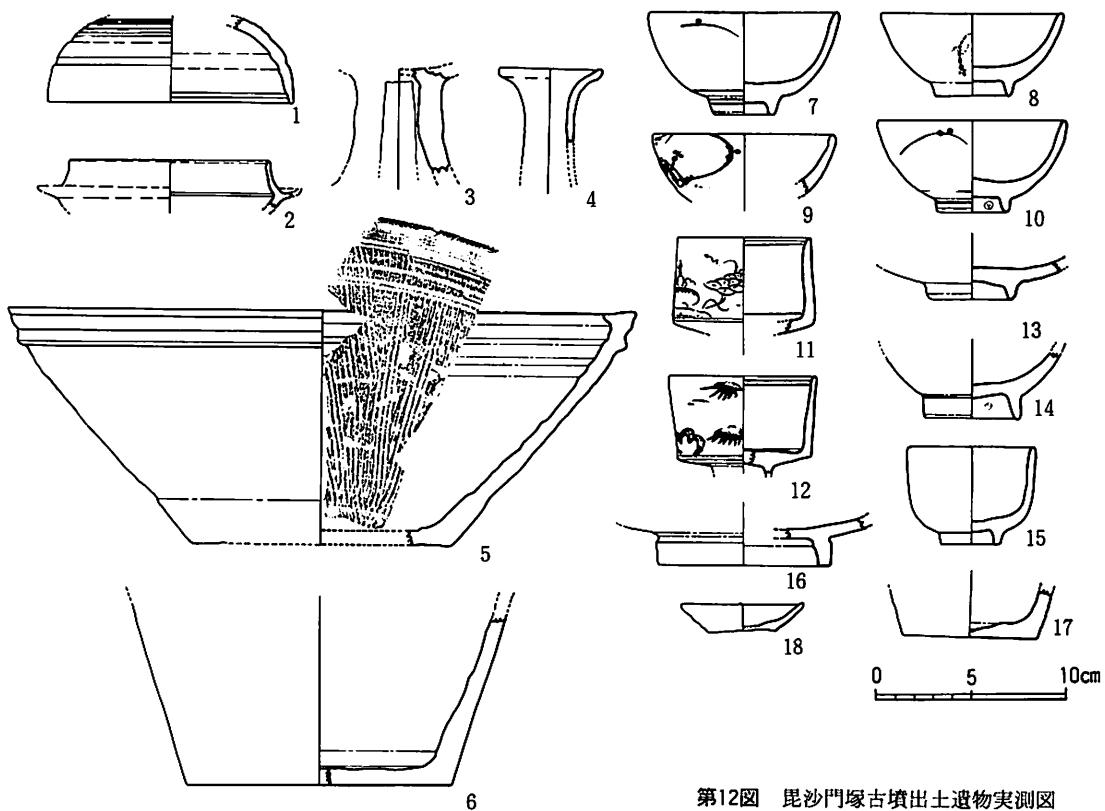
石室は長さ310cm、幅220cmの長方形の平面プランで左右の壁には2個の巨石で腰石としています。奥壁には石屋形が作り付けてあり、奥壁が石屋形奥壁を兼ねていました。また、石屋形天井石を支える袖石が通常板石となっていますが、この古墳では柱石になっていました。この様な例は非常に少なく、僅かに福岡県宗像郡玄海町所在の『桜京古墳』(福岡県指定史跡)が存在するのみです。

石屋形を持つ古墳は主に菊池川流域を中心として分布し、南は白川流域から緑川流域にかけて見られ、北は福岡県遠賀川流域にまでも見ることができます。

これらの古墳の多くは彩色による装飾文様が施されているところから、今回の調査では装飾文様が確認できるのではという期待が持たれましたが、残念ながら古くから開口していたため退色がひどく赤色顔料が確認出来ただけで、装飾文様の確認には至りませんでした。

床面には石材の落下とともに盛土が流れ込んで80cm程の厚さで堆積していました。また、開口が古いため床面の状態が悪くかなり荒されていました。

なお、石室内に祀てあった毘沙門天については、石室が危険な状態になったため地元の若宮八幡宮に移転していました。



第12図 毘沙門塚古墳出土遺物実測図

6 遺物(第12図)

古くから古墳内部に毘沙門天が置かれ信仰の対象になっていたため、供献品として近世陶磁器の出土が多く見られました。古墳に伴う資料も出土しましたが数も少なく、殆ど移動しており原位置を保っているものはありませんでした。

1～3は須恵器で、1は坏蓋の破片ですが復元口径は12.8cmになり、器高は5cm程度になるものと思われます。胎土には砂粒を含み天井部にはカキ目を施し、肩部には一条の沈線を巡らしています。内面口唇部にも僅かに浅い沈線を巡らしています。

2は坏身の破片で復元口径は10.5cm、最大径14cm程度になるものと思われます。蓋受けは1.7cmと高く、1とセット関係にあったものと考えられます。

3は高坏脚部の破片で長方形の透かしを4個配していますが本来の大きさについては不明です。

4～14は近世陶磁器で4は陶器の一輪ざし花瓶の口縁部と思われます。

5は土師質の陶器すり鉢の破片で口径33cm、高さ12.5cmの大きさになります。口縁部は水平で外面には三角断面の凸帯を一条巡らしており、内面には5本単位のカキ目を上下方向に不規則に施文しています。

6は須恵質の陶器深鉢の破片で底部近くのみを残しています。底部の復元直径は14cmになりますが高さは不明です。底部のため叩目は見られず、ナデ仕上げを施していました。

7～10は茶碗で8のみが陶器で残りは総て磁器でした。いずれも口径は10cm内外で高さも5cm程度の大きさです。磁器はいずれも染め付けで、7と10は同じ絵柄が書かれています。

11、12も染め付けの湯呑み茶碗で口径は11が7cm、12が7.8cmになります。いずれも底部を欠いているため、高さは不明です。

13は青磁の皿の破片で高台を有しています。14は染め付け茶碗の破片で口縁部を欠いています。

15は小代焼きの湯呑み茶碗で口径6.7cm、高さ5.1cmの大きさです。16も陶器で高台付きの皿になるものと思われます。

17は土師器で底部は糸切りとなっています。現状では皿になるものと思われます。

18も土師器で底部に僅かながら糸切りの痕跡が認められました。口径6.5cm、高さ1.4cmの小さな皿で、一見手捏土器のように見えます。

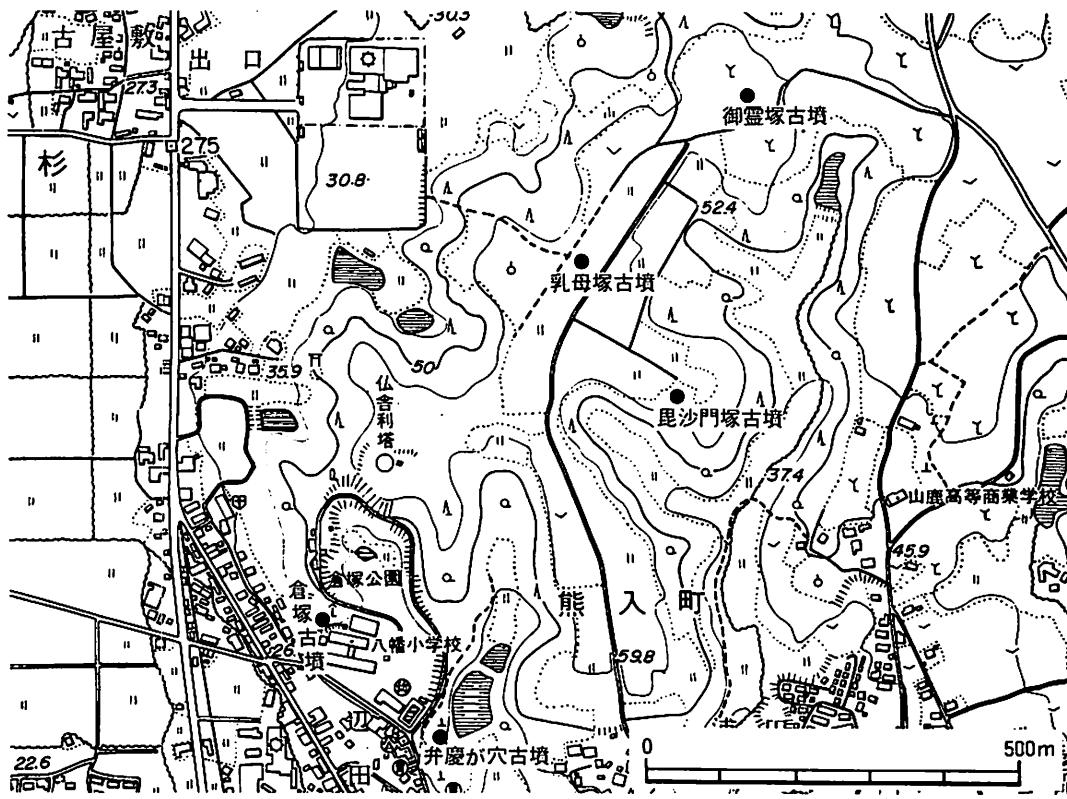
5 倉塚古墳

1 所在地

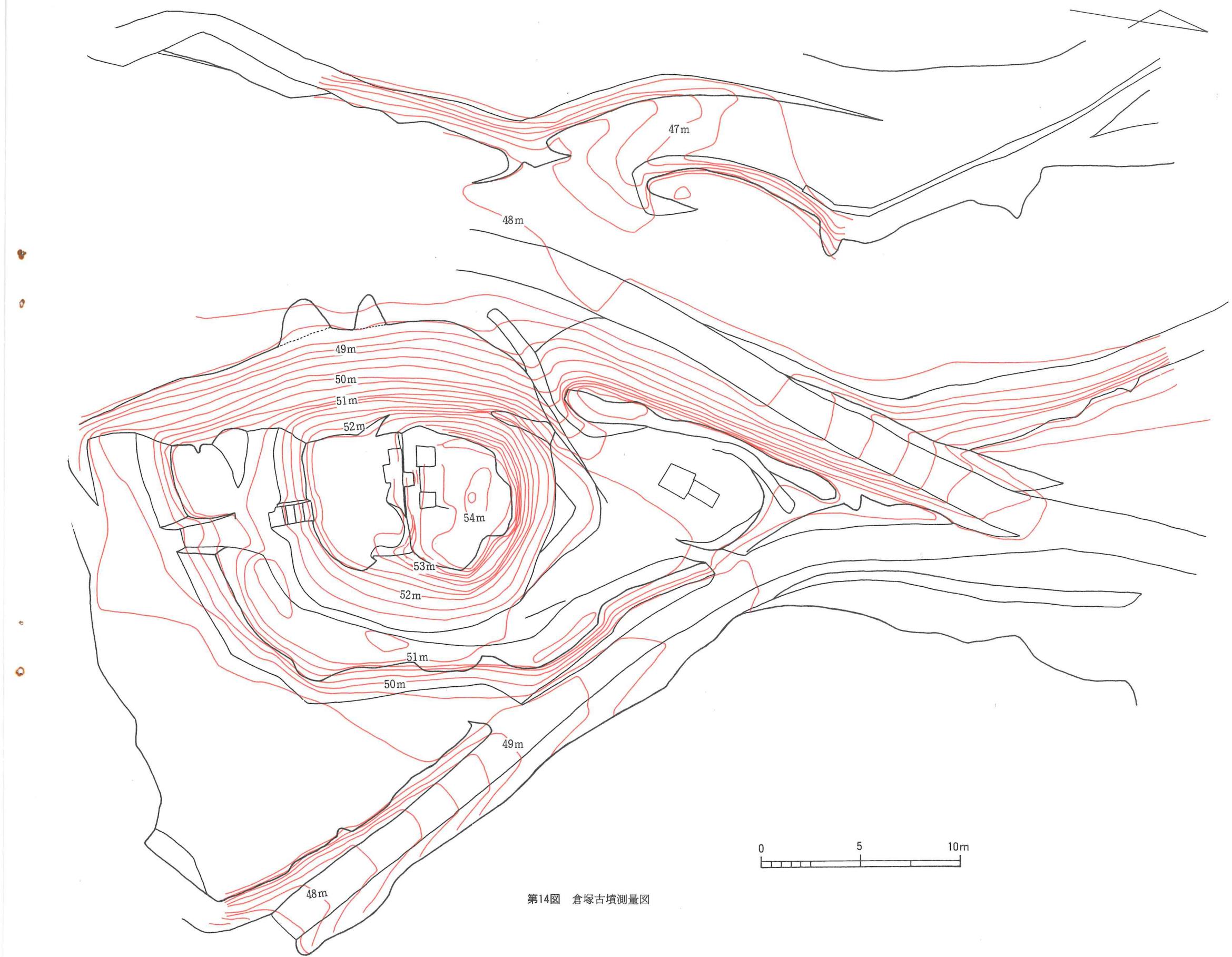
山鹿市大字熊入字戌亥原306

2 立地と環境

市立八幡小学校の北側に隣接する倉塚公園は桜の名所として市民に親しまれていますが、この中に倉塚古墳が築かれています。ここは熊入台地の西南端に位置し、舌状に発達した標高50mの台地先端に立地しています。東側の小さな谷を隔てて南東250mの所には、舟と馬の絵で有名な国指定史跡の弁慶が穴古墳が存在しています。さらに南東300mの所には近年円筒埴輪を出土して初めて古墳として確認された観念寺古墳が立地しています。これらの古墳はほぼ一直線上に並ぶように築かれています。倉塚古墳からは岩野川沿いに発達した氾濫源が一望でき、その中に築かれた臼塚古墳と臼塚西古墳は南西800mの位置に在り、金屋塚古墳は南へ1000mの距離に築かれています。さらに岩野川を挟んで西側には国指定史跡の鍋田横穴群やチブサン古墳が存在する平小城台地を見渡すことができます。



第13図 倉塚古墳位置図



第14図 倉塚古墳測量図

3 過去の記録

倉原古墳についての記載は山鹿郡誌が最初ですが、古墳としの認識があったかは疑問です。

鞍塚（ママ） 戊亥原ニアリ以所ヲ不知

古墳として記録されたのは鹿本郡誌が最初です。

倉塚 同村（八幡村）熊入にあり雜樹林中に入りて未発掘なり。周囲より陶器の破片多く出づ、

今より凡そ三十年前此塚の上に金比羅大靈社風鎮稻荷等五神を祭れり東西四間南北五間
高さ三間。

大正5年に鳥居を建立していますが、その工事に際しても耳環等の遺物数点が出土したという話
が伝えられました。^出

このように遺物の出土からも古墳としての認識はされていますが、これまで正式な調査は実施さ
れた事が無かったようです。

4 墳丘（図版15、第14図）

舌状に延びた標高50mの台地先端部に築かれたこの古墳は信仰の地として祠や鳥居が作られ、墳
丘には古木が繁り、まさしく鎮守の森の感がします。また周囲の地形も段々畠状に削平されたり、
公園としての開発も行われたため古墳の原形は留どめていません。特に古墳の西側は墳頂部から裾
部まで比高差4mにわたり大きく削り込んでいるため、墳丘裾部は直線となって地肌がむきだしに
なっています。墳丘北側から南側にかけては比較的原形に近い形で残っており裾部は円形を呈して
います。この周囲は幅2~3mで平坦面が巡り、さらに一段下がって円形を描いています。

のことから墳形については円墳の可能性が高いようです。

墳丘は現在東西約12m南北14m高さ3mの大きさを測ります。下段の裾部まで含めると直径30m
程度の規模が考えられます。

墳頂部は祠を安置している北側半分を残して、南側半分を深さ1.5m程度削平し祭壇としていま
す。さらに南側には参道の石段が築かれ裾部へと続いています。なお、周溝については未調査で確
認していません。

5 内部主体

墳頂部は南側半分を祭壇として削平していますが、北側の祠に向かって石段が築かれています。
この中に古墳の石材が顔を覗かせるようにしているのが見られます。

この石材は板石を立てて使用しており、横穴式石室の羨門袖石の可能性が高いようです。さらに
石段の左右に一部石積みが施されていますが、そこに小さな穴が開いていたので竹を差し込んだら
2m程度はすんなりと入ってしまいました。のことからも内部主体は横穴式石室であろうと考え

られます。

註1 中川正隆「倉塚古墳」『石人』35年11月号

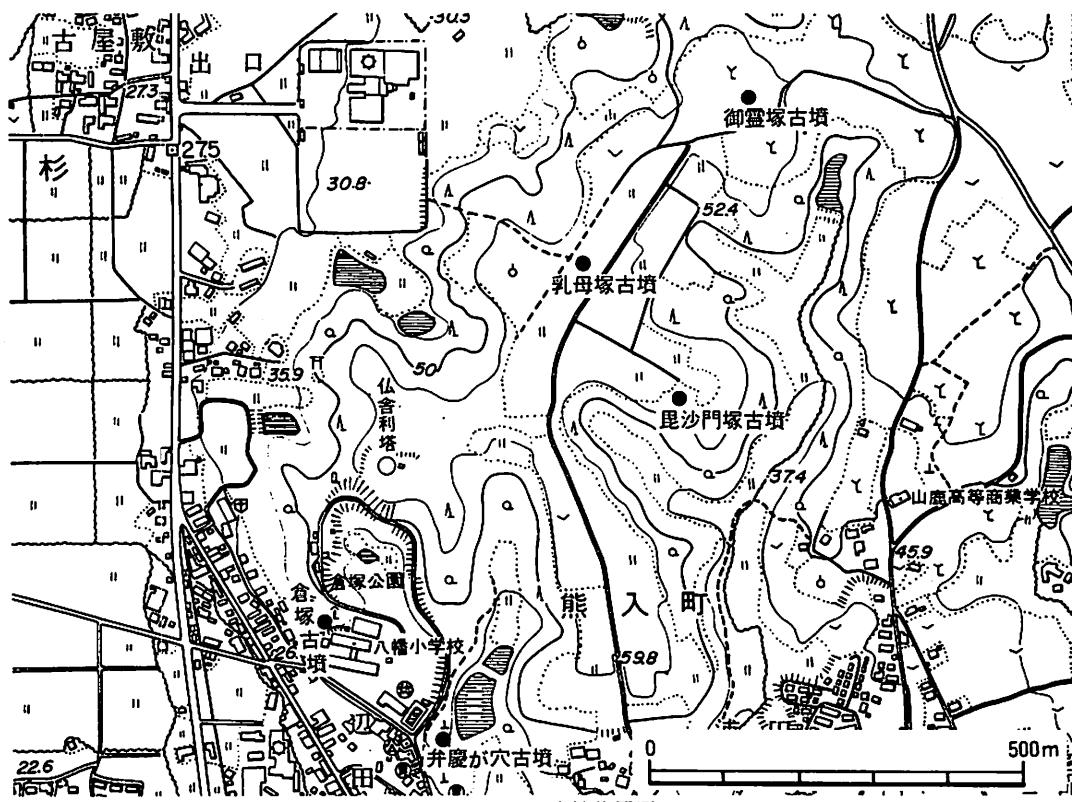
6 御靈塚古墳

1 所在地

山鹿市大字熊入字東原721

2 立地と環境

熊入台地の上に存在する古墳の中では最も北に位置しており、毘沙門塚古墳から北へ400mの距離にあります。ここはひょうたんびらの麓から南に延びる熊入台地の基部に当たり、台地の中では最も高い標高65mの位置に立地しています。



第15図 御靈塚古墳位置図

3 過去の記録

肥後国誌にこの古墳に関して御料入塚として記載されていますが、既に毘沙門塚古墳の項で内容については紹介していますのでここでは省略致しますが、この塚は中世の墓としての認識が有りました。さらに、山鹿郡誌においても肥後国誌に伝えている内容を記載しているところから、同じ評価を与えていたようです。

その後の鹿本郡誌には次のような記載が有ります。

御料塚 八幡村熊入にあり、圓塚にして俗に御嬢塚といふ。天正の頃城村の城落城せし時城主の娘、其乳母と共に此邊まで落ち延び来りしが遂に敵の為に見出されて殺されしを葬りしと、附会の説ならん、未発掘なり天正時代より古代式なり。

このように鹿本郡誌では肥後国誌に書かれている説には疑問を感じ、古墳としての評価を考えています。また、この時点では古墳は未発掘であるところから、原形を保っていたことが窺えます。

昭和30年4月には原口長之氏によって調査されました。古墳はすでに半壊の状態で僅かに凝灰岩の割岩が数個確認されています。当時は内部主体は石棺だったろうと考えられています。^{註1}

4 墳丘（図版16-1，第16図）

古墳は三枚の畳に囲まれた所に残っていますが、いつの頃からか一鍬ずつ削り取られてしまい、今では東西15m、南北11m、高さ3mを計る三角形をしています。

墳頂部に二箇所の窪みが残されており、昭和30年の調査の跡と思われます。

東側の墳丘は比較的原形に近い傾斜面をしていますが、西側ではほぼ垂直に削り取られ、北側は一直線になるように削られていました。

今回は墳丘測量を主体とした調査でしたので、墳丘はもとより周溝の確認まで至りませんでした。従って、古墳本来の規模等については今後トレンチ等を入れて確認する事が望されます。

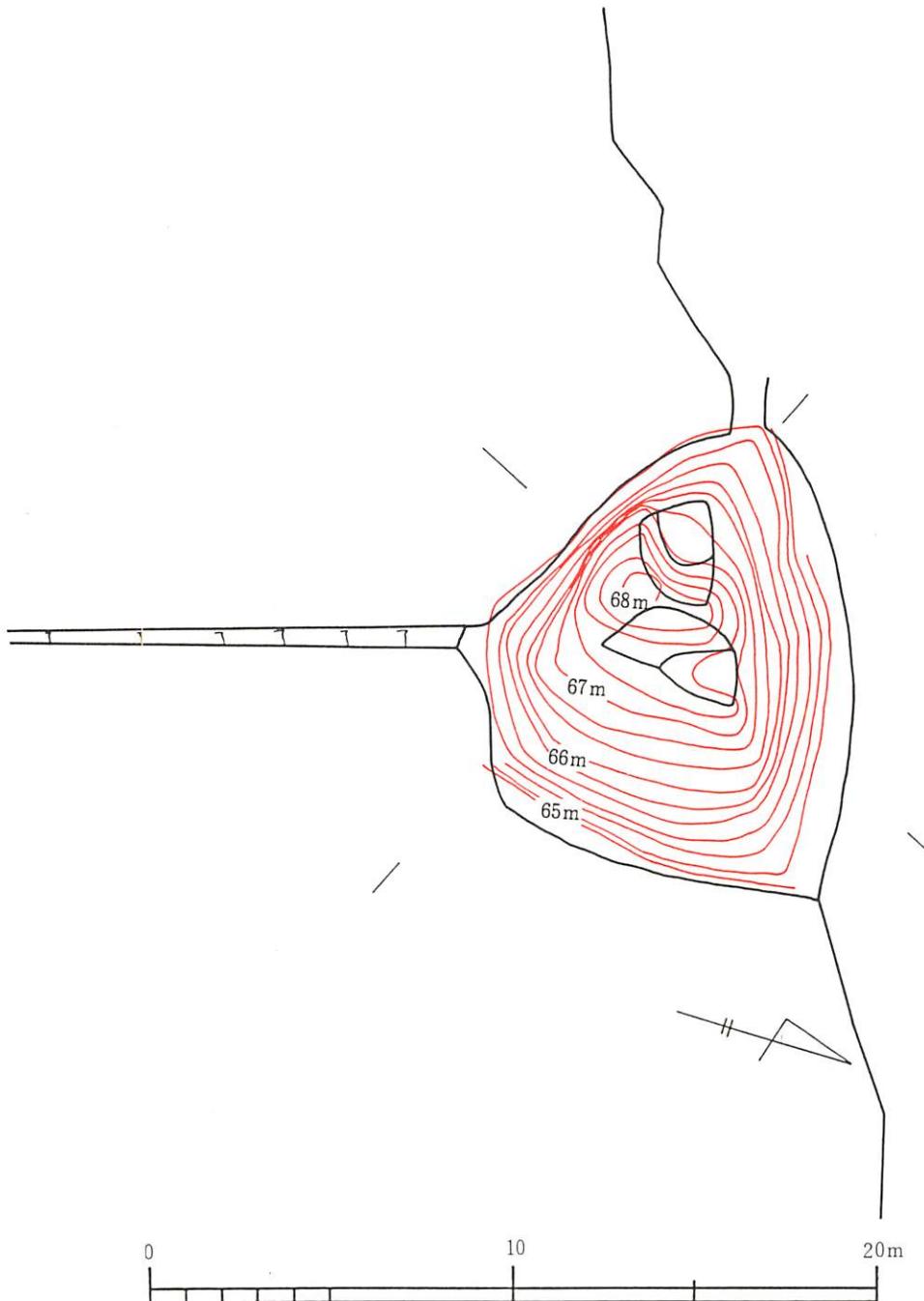
5 内部主体

原口長之氏の調査では凝灰岩の割岩が数個出土したところから内部主体は石棺のみであったろうと考えられています。

現在墳丘の西側裾部に凝灰岩の割石が顔を覗かせていますが、この石材に限って考えるといずれも厚みがあり、粗い調整のため石棺の石材とは異なり、横穴式石室の石材の可能性が高いようです。

しかしこれらも今後確認調査を実施することが望れます。

註1 原口長之「原始」『山鹿市史』昭和60年



第16図 御靈塚古墳測量図

7 猿樂塚古墳

1 所在地

山鹿市大字名塚字権現ノ尾503

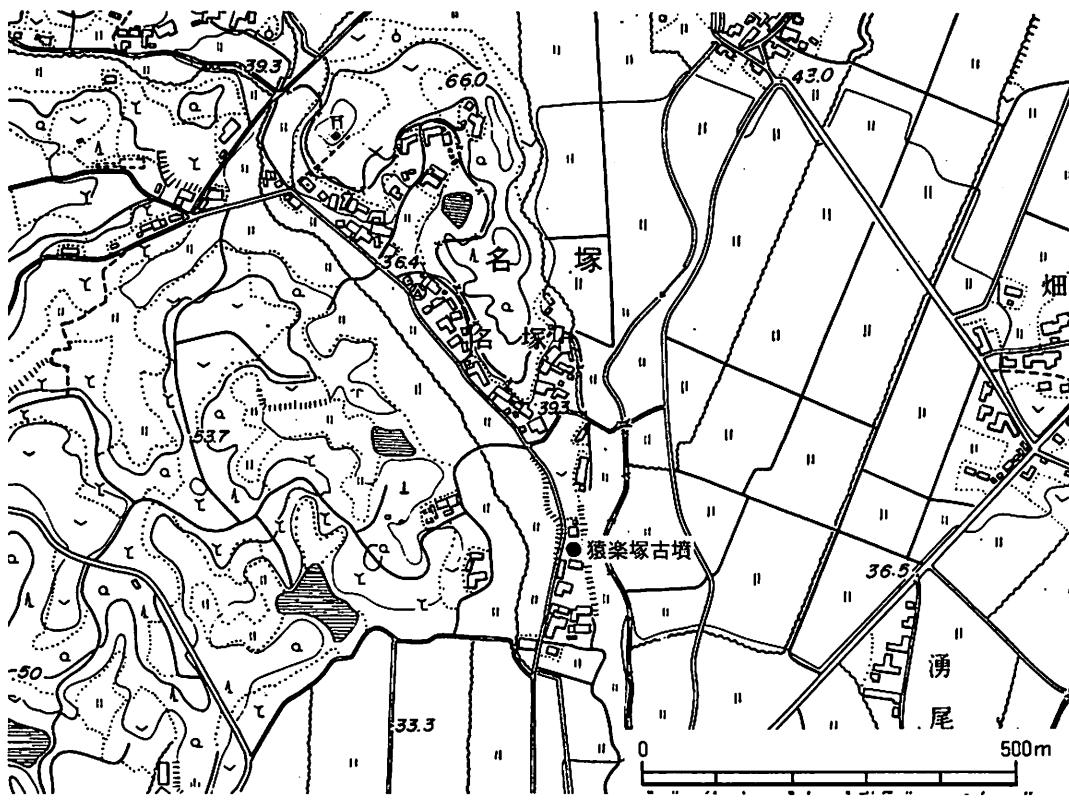
2 立地と環境

八幡地区の中で最も東に位置するのが名塚地区です。ここは「七つの塚」が存在していたところから「なづか」と呼ばれるようになったと伝えられています。

名塚地区は山鹿市街地から北へ約3kmのところにあたり、震岳の東南麓から細長く南へ延びた丘陵の先端を取り囲むように集落が形成されています。猿樂塚古墳はこの丘陵の先端部に築かれています。丘陵の両側には小川が流れ、その流れに沿って水田が営まれています。

2 過去の記録

猿樂塚（さるがくづか）古墳は地元の人達の間では「さるごづか」と呼ばれています。「さるごづか」がどのようにして猿樂塚と書くようになったのか考えてみましょう。



第17図 猿樂塚古墳位置図

肥後国誌には中村手永名塚村の条で次のように記載されています。

猿河塚 不知所以宝永ノ此（頃）農夫此塚ヨリ短刀ト茶碗ヲ掘得テ即時ニ大熱ヲ発シ病ヲ得シ故復元トノ如ク埋メヌレハ其病快クナレリト云名塚ノ地名始干此歟・・

ここでは猿河塚と書かれており、「さるがわづか」もしくは「さるごづか」と呼ばれていたことが理解されます。また宝永年間（1704～1711）の盗掘で遺物が出土したとしています。

山鹿郡誌においては肥後国誌の内容を紹介しつつ、七つの塚の考察を行っています。

猿川塚 村ノ南權現尾字ニアリ広サ六畝十七歩 此塚ヲ崩シテ崇アリシコト度々有シト云
又云當村ニ七塚アリ名塚ノ村名是ヨリ起ルト雖其塚不詳 一ハ錢亀塚 一堂面塚 一
丸塚 一七浦墓所ノ塚 一中名塚ノ上ノ塚 一下名塚ノ南ノ塚 一三隅田塚 一猿川
塚 都テ八塚アリ七塚ハ此内ナルヘシ 肥後誌云宝永ノ此農夫猿川塚ヨリ短刀ト茶碗
ヲ穿得テ即時ニ大熱発シ病ヲ得シ故復埋タレバ快ト云トアリ

山鹿郡誌では猿川塚と書かれており「さるがわづか」が訛って「さるごづか」となったものと思われます。

鹿本郡郡誌には次のように書かれています。

猿楽塚 圓塚未発掘、此塚の附近に笛吹と云ふ所あり、伝へ云ふ笛吹にて笛を吹けば此の塚
にて猿楽を成すを以て此の名ありと、西南の役此塚に台場を築きたり、今猶痕跡存す。
八幡村名塚にあり東西十一間南北十二間高さ三間。

この段階で猿楽塚という名が付けられているようで、地元の人達の間では「さるごづか」が生き続けていたものと考えられます。

4 墳丘（図版16-2，3，第18図）

この古墳は西側道路からみるとなだらかな墳丘の全面に芝が覆い、悠久の眠りについているように見えます。

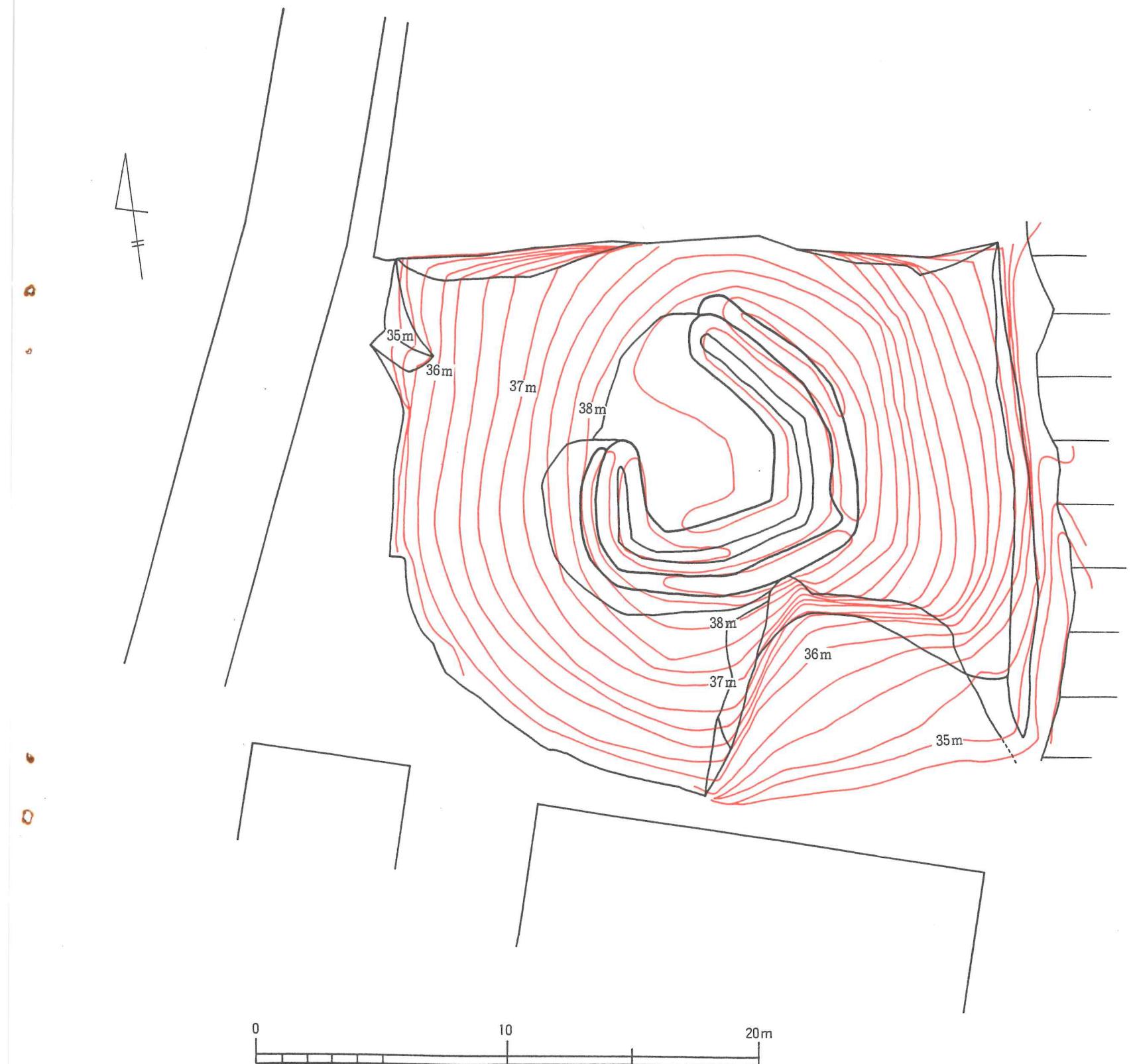
しかし、古墳の周囲には人家が建ち、すでに周囲は原形を保っていない程に削られています。裾部はすべて削り落とされ、北側では墳丘のほぼ3分の1を一直線になるように削られ、庭つくりが行われました。

南側では人家が裾部を削って建ててあり、南東コーナーでは大きく削り込むようにして畠が作られています。東側では下を流れる小川によって侵食され、大きな崖面を残しています。

墳頂部には「コ」字形に浅い溝が巡らされ、これが鹿本郡誌に書かれていた西南の役の痕跡であろうとおもわれます。

したがって、古墳の規模については現段階では東西25m、南北22m、高さ3.2mを測りますが、本来は直径30mの円墳になります。

また、削られた裾部では礫まじりの粘土層が観察され、河岸段丘上の自然地形を利用して古墳を築いたものと推察できました。



第18図 猿楽塚古墳測量図

5 内部主体

肥後国誌によると既に宝永年間農夫によって短刀と茶碗を掘り出し、また元のように埋めたことを書き伝えていますが、残念なことにこれらの品々がどのような状態で出土したかまでは伝えていません。

さらに古墳自体の高さから考えても、現在僅か3.2mを測る程度では内部に横穴式石室が存在するとは考えにくくこのことから少なくとも内部主体は横穴式石室ではなく、石棺の可能性が大きいと考えられます。

6 遺物

遺物は宝永年間に掘り出され、すぐに埋め戻された短刀と茶碗が唯一のものです。

その後正式な発掘調査は行われていないため、この古墳からは時期を決定すべき資料は未だ発見されていません。

III その他の調査

1. 舞野石棺群

1 はじめに

『平山で作業中に人骨が出たので調査して欲しい』との連絡を受けたのは昭和61年9月2日のことでした。最初は甕棺内からの出土との連絡でしたが、その後石室内かららしいとのことで半信半疑で現地へ赴いたのでした。

現場は山鹿市大字平山字舞野の杉山で地主の入江金二郎氏（福岡県八女郡立花町大字白木在住）が杉山をキュウエイーフルーツ畑にするため、ブルドーザーによって切り開いている時石棺1基が発見されたのです。

入江氏によると、ブルドーザーの運転手が石棺の蓋石を開けたところ中から人骨が出たため、急拠近くのお寺と隣接地の市議会議員池田秀男氏に連絡されたのでした。

さらに、池田氏から教育委員会社会教育課文化係へ連絡がなされ、博物館には社会教育課からの連絡でした。

その後9月25日と10月15日にも石棺が発見され合計3基の石棺を調査することができましたので、石棺の番号は調査順に1～3号石棺としました。

調査に際しては地主の入江金二郎氏と池田秀男市議会議員にお世話になりました、また、人骨調査に際しては、遠路長崎より来ていただいた松下孝幸助教授をはじめ、長崎大学医学部解剖学第2教室の皆さんに大変お世話になりました。記して深く感謝いたします。

2 立地と環境

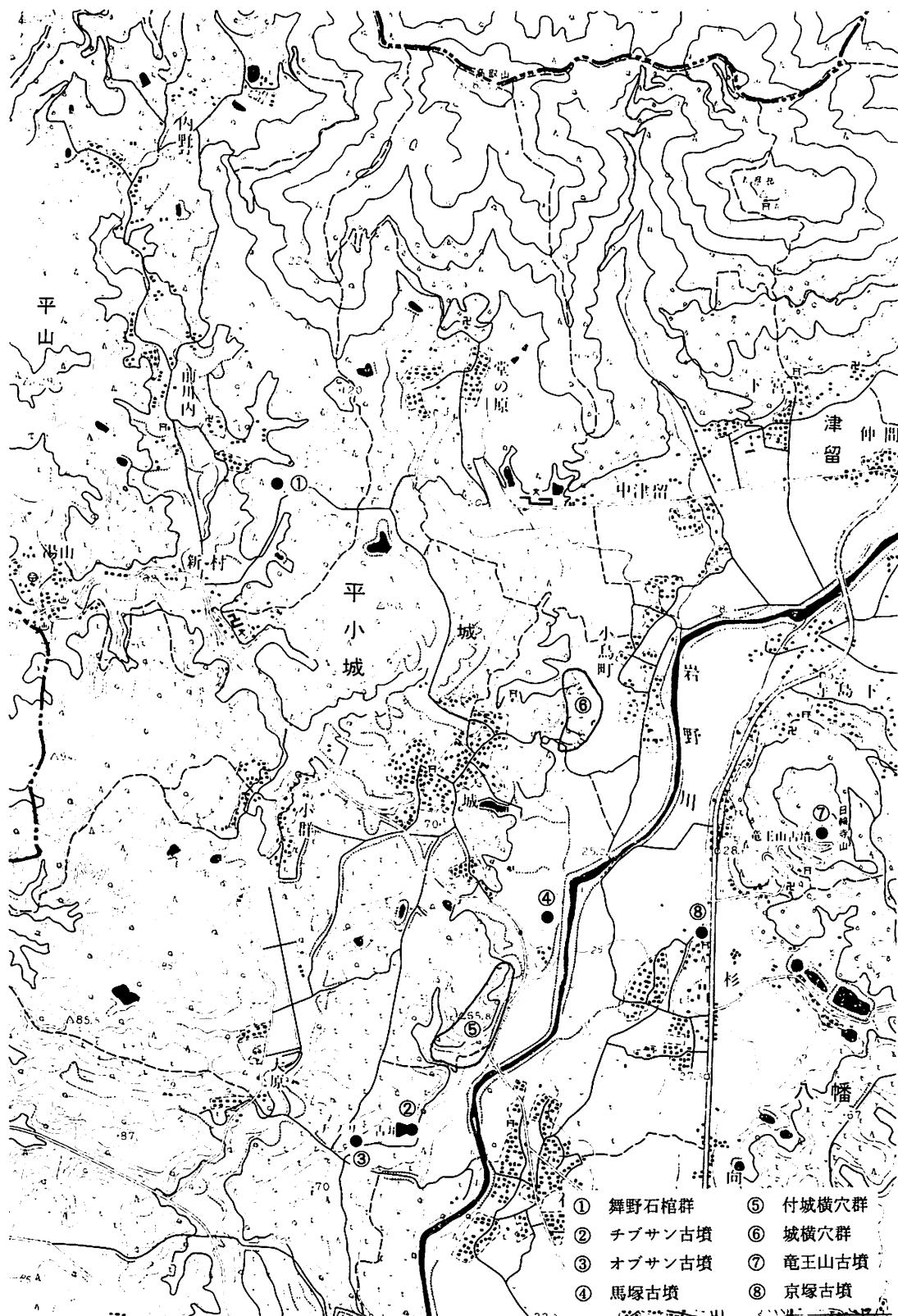
山鹿市の西北端に位置する平小城校区は、山林の占める割合が他の校区に比べ最も高くなっています。裏返すと水田面積が最も少なく校区の殆どは山林、台地を形成し、その裾部に流れる小川に沿って僅かに水田が営まれています。

石棺を出土した舞野地区は平小城地区の中では北東部にあたり、三岳校区と隣接しています。

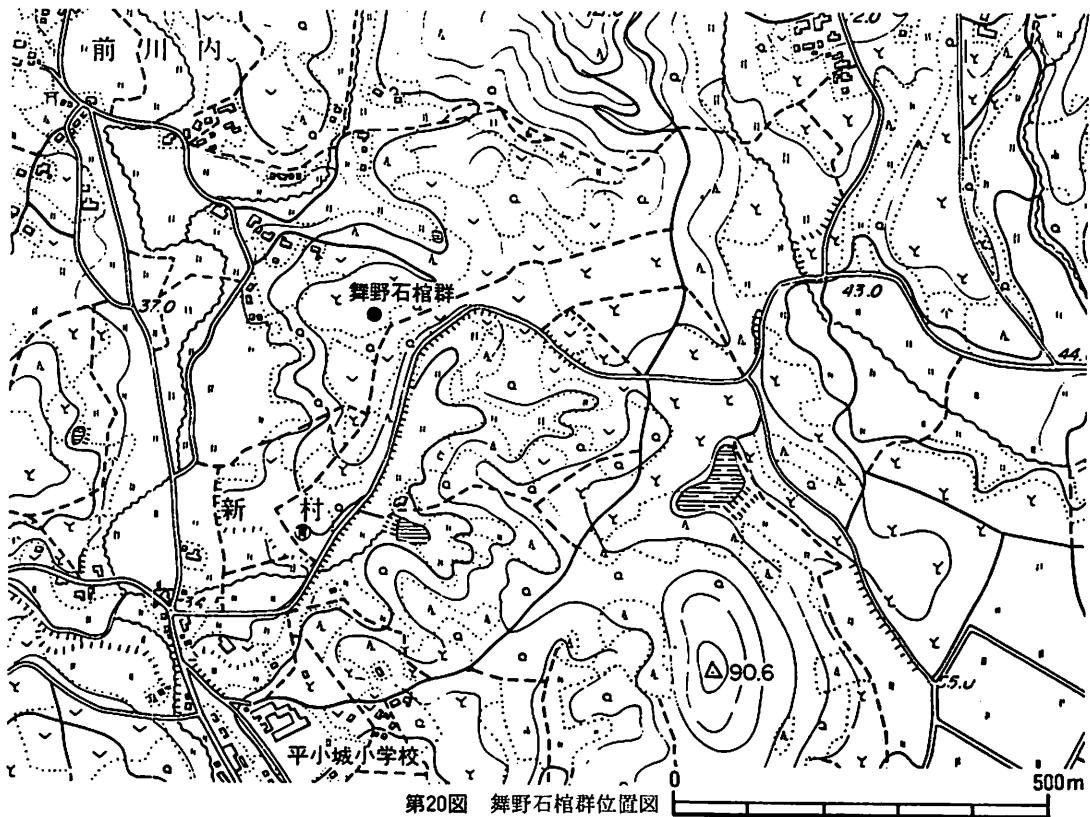
平小城校区の北端には鹿本郡鹿北町と境を接している高取山（標高328.4m）が存在しており、高取山南麓から南へ細長く延びる台地は菊池川と支流の岩野川の合流点まで続いています。

この台地は平小城台地と呼ばれ、舞野地区は標高60mの台地基部に位置しています。

平小城台地には数多くの古墳や横穴群が築かれています。とくに南から国指定史跡の鍋田横穴群とチブサン古墳、県指定史跡オブサン古墳、付城横穴群、馬塚古墳、城横穴群が存在し、さらにオブサン古墳周辺には西福寺石棺群も存在しています。



第19図 平小城校区古墳分布図



第20図 舞野石棺群位置図

中世城関係では天正15年（1587）の肥後国衆一揆の中心舞台となった城村城跡、東西付城等が築かれています。

これらは台地中央から南に集中的に分布しているもので、舞野地区を含めた台地北側には今日まで古墳等の確認はされていませんでした。

従ってこの石棺群の存在は今後の調査に新たな方向性を示したものとして高く評価することができます。

遺跡は全体に北側に向かって傾斜しており、石棺が出土したのはこの斜面の頂上部でした。

3 1号石棺（図版18-1, 19, 20-1, 2, 第21図）

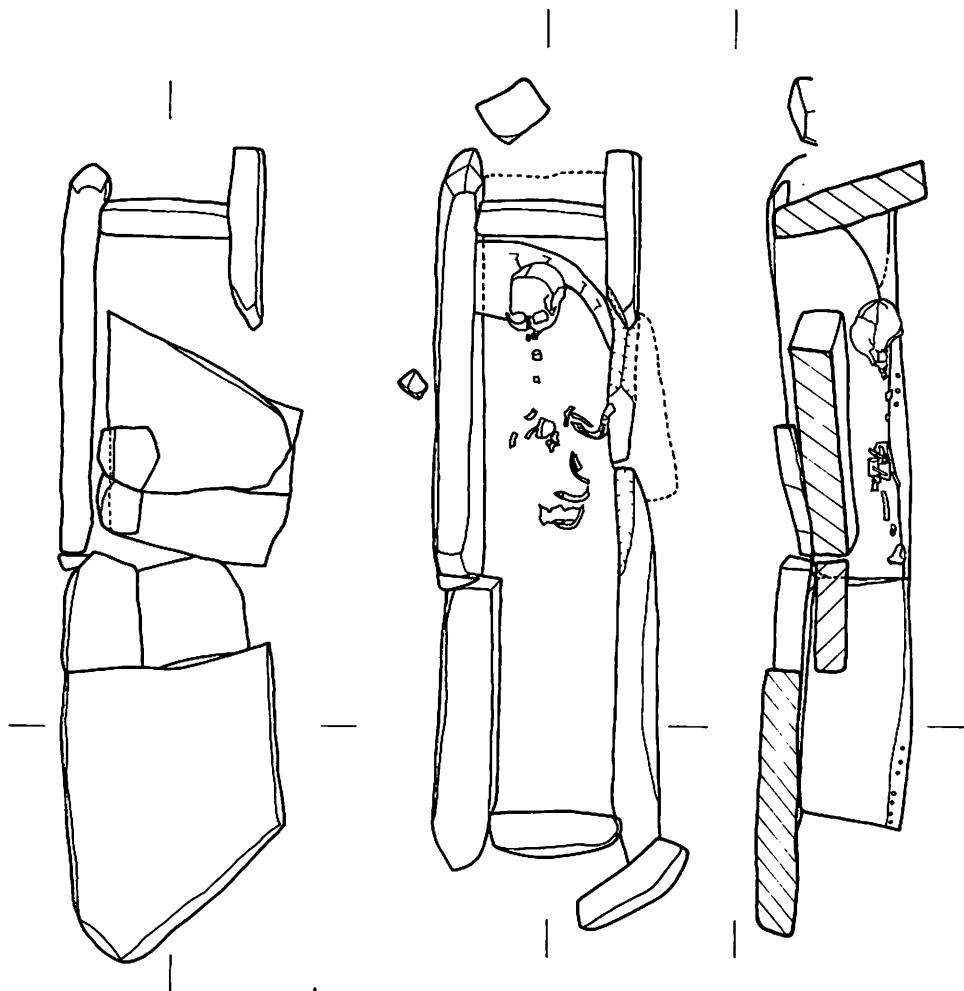
舞野石棺群発見の発端になった石棺で2枚の蓋石の一部は割れたり、棺身の中に落ち込んだりしていました。

石棺は阿蘇凝灰岩板石を使用した箱式石棺で、左右の側石は2枚で構成され、端石を挟み込むように棺身部を築いていました。

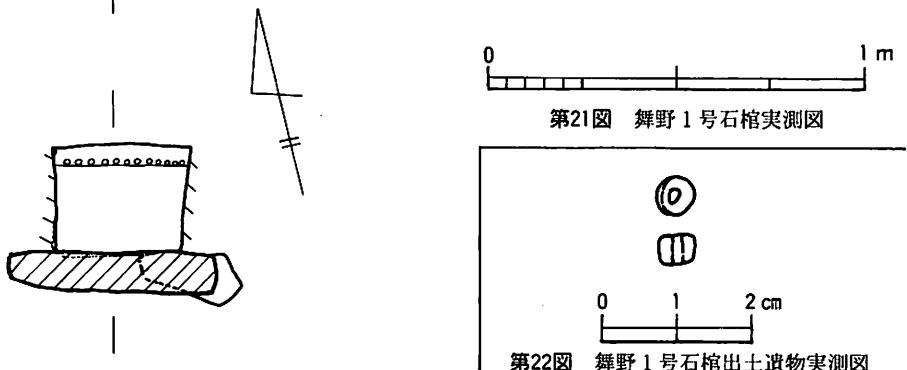
端石は共に内側に傾く様に組まれ、側石も全体に内側に傾いていました。そのため南側端石を挟み込むために西側の側石に二次加工が施されていました。

大きさは内側で長さ151cm、幅31cm、深さ32cmを測り、主軸はN14°Eでほぼ北北東に向けていました。

石棺内には比較的保存状態の良い人骨が残されていました。人骨は北側に頭部を置くように埋葬



第21図 舞野1号石棺実測図



第22図 舞野1号石棺出土遺物実測図

されていましたが、残存している骨は頭蓋骨と四肢骨の一部でした。

とくに下顎骨と四肢骨については長崎大学医学部の松下先生から現位置を保っておらず移動しているとの指摘を受けました。

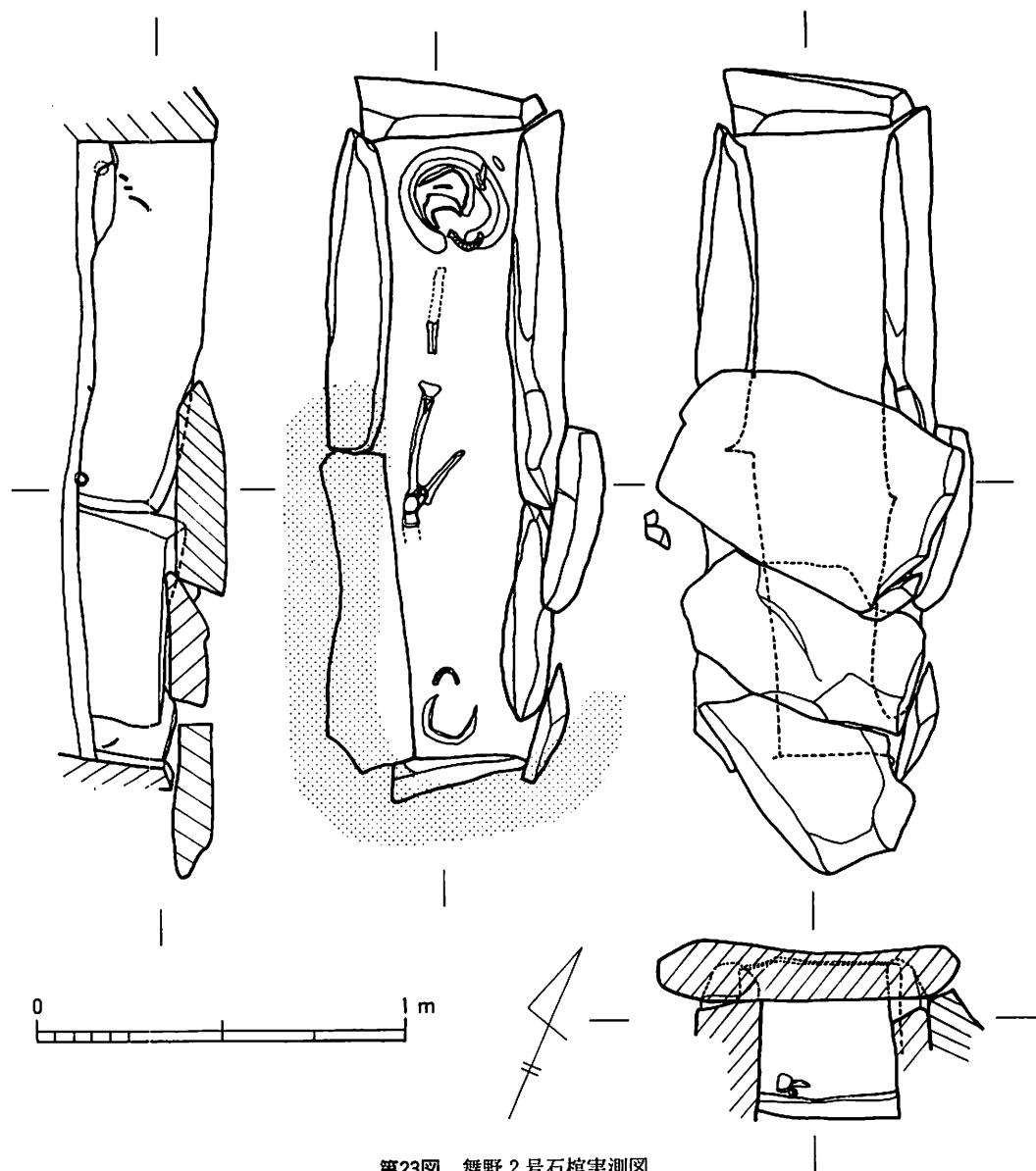
このことを裏付けるかの様に、頭部にあたる部分では青灰色の粘土を使って枕が造られていたが、人骨攪乱の際破壊されその形状は明らかに出来ませんでした。しかし、粘土枕の存在は疑いの無い

ところでした。

また、床面にはフワフワの土と礫が混在する形で厚さ5cm程度を確認することができましたが、この土と礫は人骨の上にも被っていたことから、二次的な擾乱の際生じたものと考えられました。

なお、石棺内の副葬品としてガラス製小玉1点を検出しましたが、色調はモスグリーンで直径5.15mm、高さ4.35mm、孔径1.85mmでした。

また、棺外から土師器片1点が出土しました。さらに頭部外側には軽石1個を置いており、墓標としての性格が考えられます。



第23図 舞野2号石棺実測図

4 2号石棺(図版20-3, 21, 22-1, 2, 第23図)

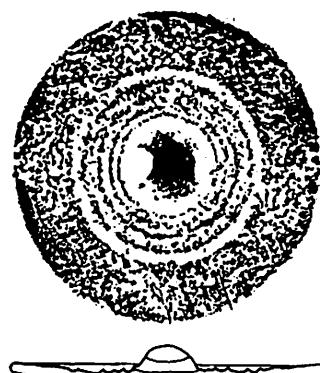
1号石棺の東側約60m程離れて出土したものです。これも凝灰石の板石を使用した箱式石棺で、すでにブルドーザーによって蓋石の一部を欠いており、そのため3枚の蓋石を残した状態で検出することになりました。

石棺は側石を東側が4枚、西側が2枚の石材で構成し、端石は各1枚の石材を使用しており、さらに、1号石棺とは異なり端石が側石を挟むかのように組合せていました。

大きさは内側で長さ169cm、幅38cm、深さ30cmを測り、主軸はN24°Wで北北西に向かって築いていました。

内面には全面に赤色顔料を塗っており、北側では粘土枕を配していました。床面には青灰色の粘土を敷き、その上に赤色顔料を散布していました。

また、内部からは人骨2体が検出され、北側粘土枕に頭蓋骨を残しているものを1号人骨、南側に頭蓋骨を残しているものを2号人骨とした。人骨は保存状態が悪く1号人骨は頭蓋骨のみ、2号人骨は頭蓋骨と四肢骨の一部を残しているのみでした。さらに、枕の状況から1号人骨を最初に埋葬し、その後2号人骨を追葬していることが明らかになりました。

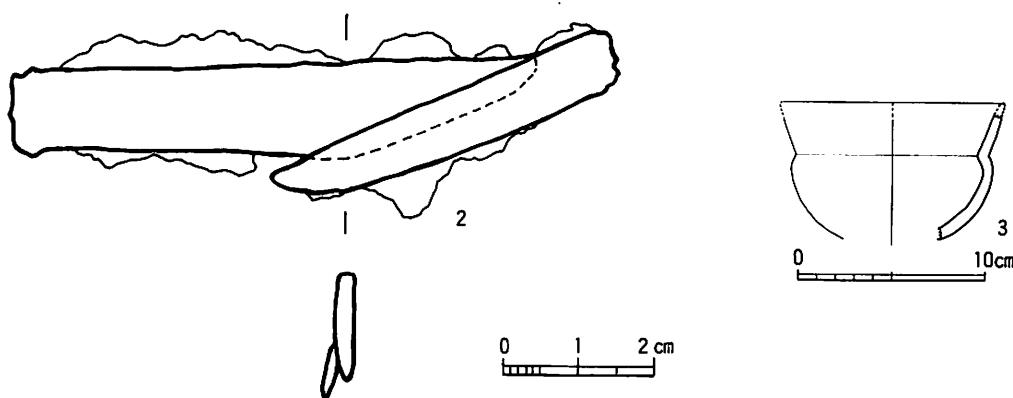


1号人骨の頭部にはドーナツ状の粘土枕があり、その右側から刀子と鏡が出土しました。

鏡は鏡面を外に向けて、枕に立て掛けるように置かれており、刀子は鏡と頭との間の枕の上に置いてありました。

さらに、棺外からは蓋石の上に置いた状態で土師器片が出土しており、追葬の段階で置かれている可能性は極めて高く、時期の決め手になるものと思われます。

鏡は(図版22-3, 第24図-1)直径4.2cmの重闇素文鏡で熊本県下はむろん九州でも最小の鏡です。



第24図 舞野2号石棺出土遺物実測図

自体の保存状況は極めて良く、一部では本来の光沢を残している所も見られます。鏡の廻りには幅7mmの中に4条の円環を巡らし、その外側に幅7mmの平縁が巡っています。

なお、全国で最も小さい鏡は、兵庫県尼崎市下坂部遺跡出土の重環素文鏡で直径3.8cmである。

刀子は（第24図-2）2点が接合した状態で出土しており、現場では刀子であることが確認できないほど保存状態が悪かった。しかし、その後の作業を進める中で、刀子が2本交互に接合していることが明らかになった。共に刃部鍔であるが、大きい刀子は長さ7cm、幅1.2cmを測り、小さい刀子は長さ4.9cm、幅0.8cmを測る。

土師器は（第24図-3）口径12cm、高さ8cm程度になる小型丸底蓋の破片である。これから追葬の時期を4世紀後半に位置付けられ、石棺築造は4世紀前半から中頃になるものと考えられます。

5 3号石棺（図版23、第25図）

この石棺は1号石棺と2号石棺との間から出土したものであるが、造成作業中であったため相互の距離については確認することができなかった。

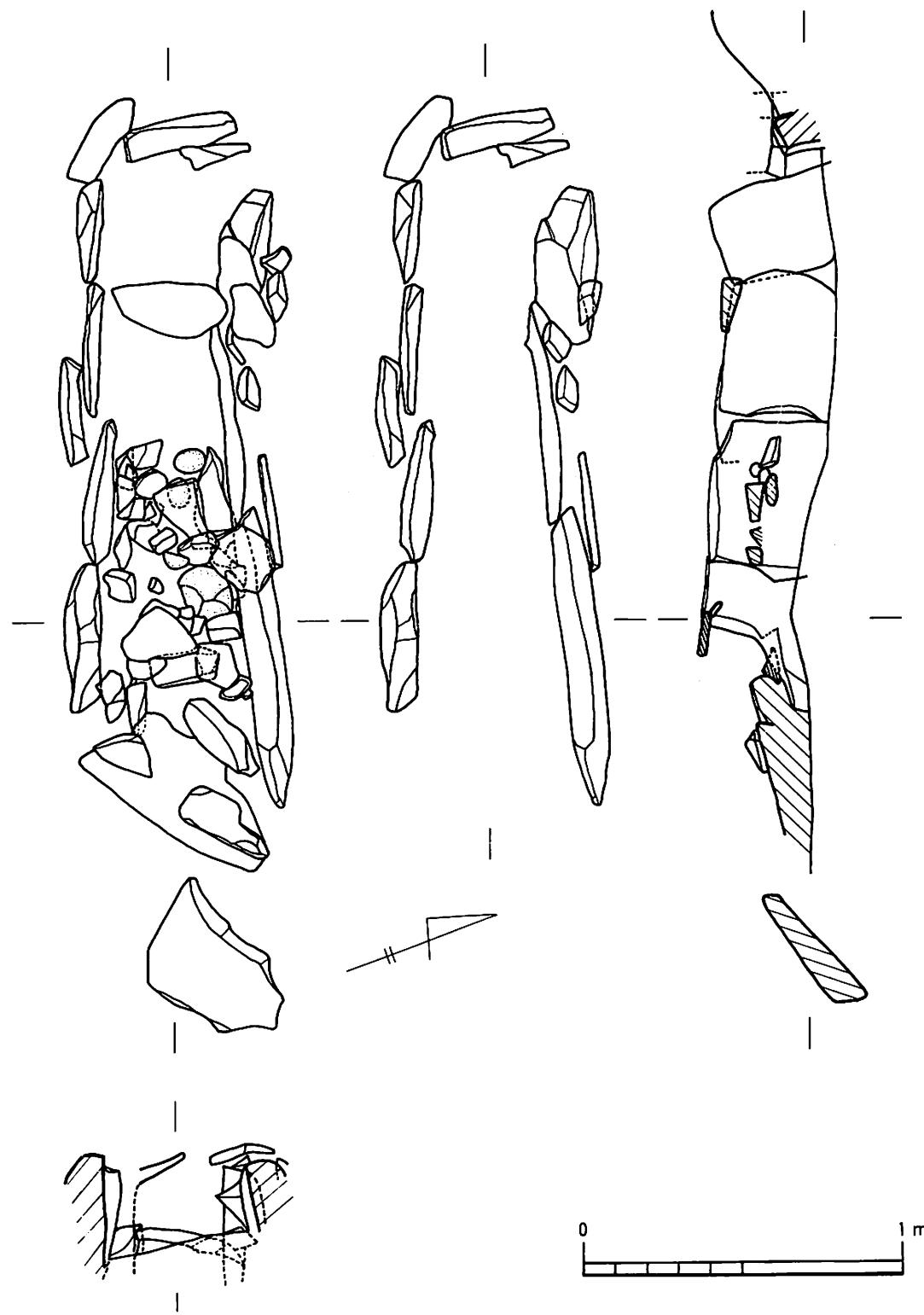
発見された時はすでにユンボで蓋石を移動しており、3枚の石材を確認することができたが棺身のみを調査しました。

石棺は凝灰岩板石を使用した箱式石棺で、これまで調査した1、2号石棺に比べると大きく、丁寧に組合せていました。

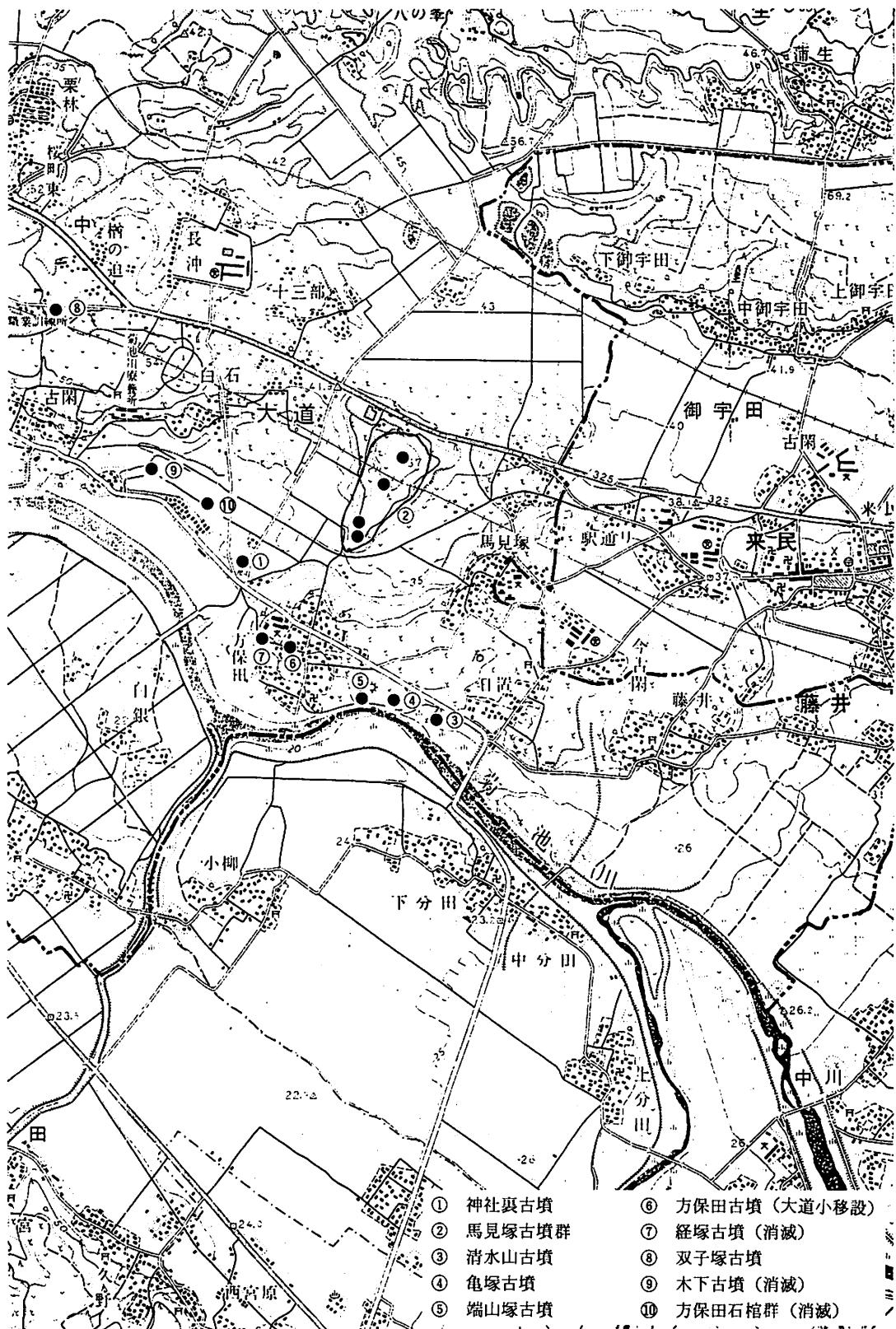
主軸はN71°Wで東南東に向けて築かれていますが、東側端石とその周辺は過去に破壊をうけていてすでに石材を欠いていました。そのため左右の側石は4枚と6枚が残っており、西側端石は2枚の石材で築かれています。

大きさは内側で幅45cm、深さ35cmを測り、長さは200cm前後になるものと思われます。内部は全面に赤色顔料を塗っていました。

石棺内東側からは多くの礫が不規則な状態で検出されました、これは過去の破壊に伴って投げ込まれたものと推察されます。



第25図 舞野3号石棺実測図



第26図 大道地区古墳分布図

2 神社裏古墳

1 所在地

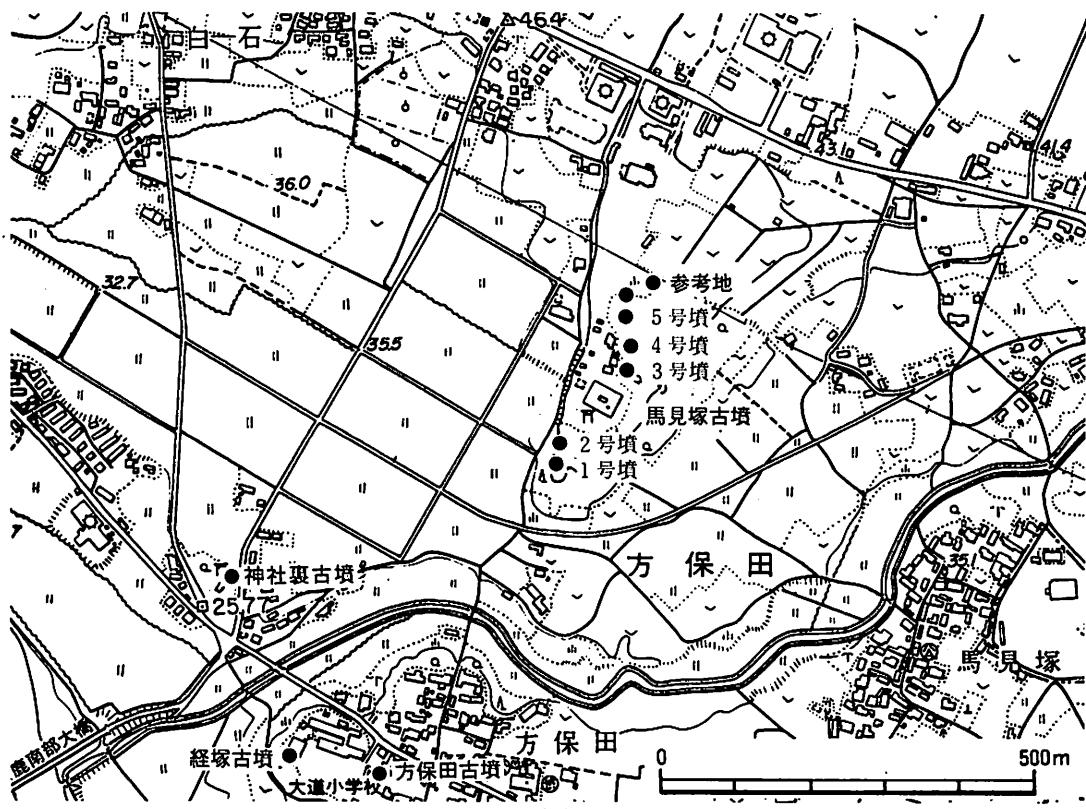
山鹿市大字方保田字尾跡2521-1

2 立地と環境

この古墳は方保田の集落から方保田川を挟んで西側に位置し、方保田神社境内に存在しています。ここは菊池川右岸に発達した標高33mの河岸段丘南端で、南側には菊池川を挟んで広大な菊鹿平野が広がっています。

周辺には弥生時代から古墳時代にかけての遺跡や古墳が数多く残されています。とくに北東500mの地点には馬見塚古墳群が存在しているのをはじめ、北西500mの地点には舟形石棺を出土した木下古墳（昭和43年圃場整備事業に伴い消滅）が築かれていました。さらに北西へ250mの地点は箱式石棺から内行花文鏡を出土した方保田遺跡が広がっています。

方保田川より東側の段丘上には国指定史跡方保田東原遺跡をはじめ、菊池川に沿うように南端部に東西方向に5基の古墳が並んでいましたが、現在では3基を残すのみです。



第27図 神社裏古墳位置図

3 過去の記録

この古墳は昭和50年にはじめて古墳として確認されたもので、過去における調査や記録は何等見いだす事ができませんでした。

4 墳丘（図版24、第28図）

神社境内の杉林の中に存在していますが、神社築造の段階で古墳の墳丘を大きく削り取っています。さらに東側には圃場整備事業に伴って道路拡幅工事が行われ、その時東側裾部を一部削り取ってしまいました。

墳形は主軸をN30°Eを測り、ほぼ北東方向に向かっている前方後円墳であろうと考えられます。

大きさは周辺の破壊がひどかったため復元値で長さ約30m程度になめものと考えられます。後円部は直径約20m、高さ2.5mで、前方部は現状では幅5m、高さ1.5mです。

5 内部主体

古墳の高さから考えても石室の可能性は少なく、石棺を埋葬しているものと考えられます。なお古墳から南へ僅か40mの所では、参道によって箱式石棺が壊され露出しています。凝灰岩の石材を使用したのですが、内部の調査は未だに行えない状況にあります。

6 遺物

これまで遺物は何等発見されていません。



第28図 神社裏古墳測量図

3 馬見塚古墳群

1 所在地

山鹿市大字方保田字辻、石原

2 立地と環境

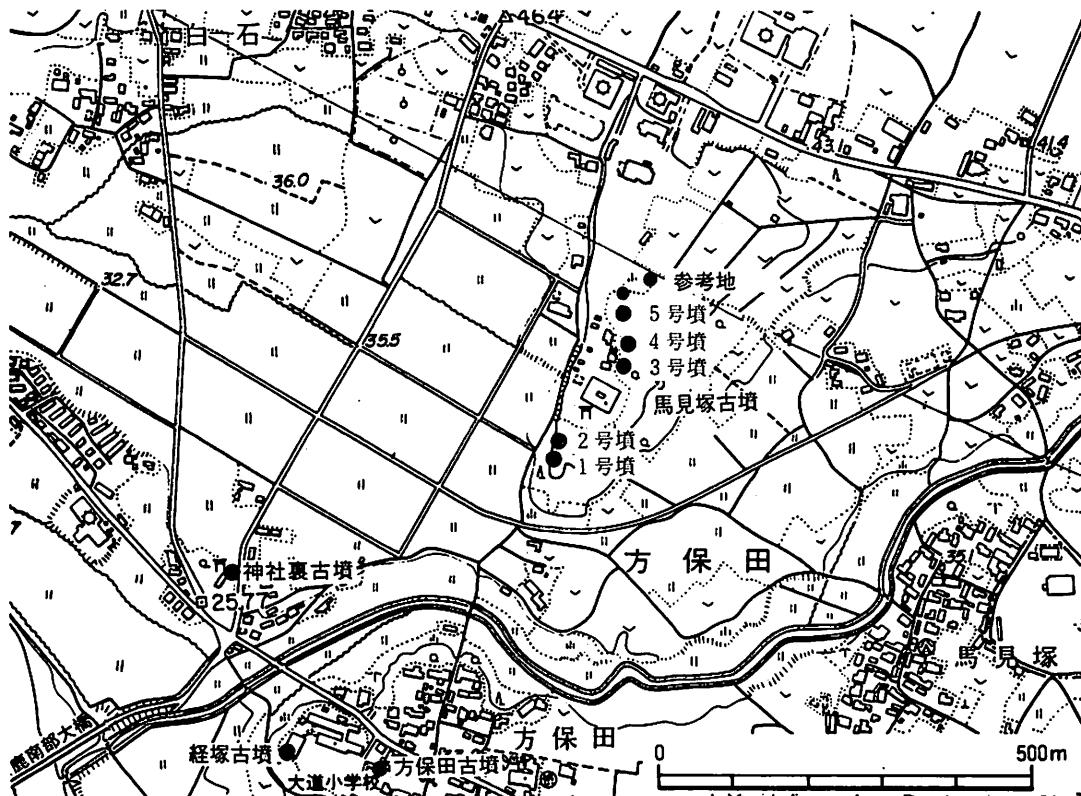
山鹿市東端部で鹿本町と境を接する方保田地区は、菊池川中流域の右岸に発達した河岸段丘上に立地しています。

段丘は山鹿の街から鹿本町まで延びており、その中央部にひときわ高く、こんもりと茂った森を見ることができます。

この森は標高57m、比高差17mで南北に延びた丘の上にあり、この中には馬見塚熊野神社と宮地嶽教会が建っていて鎮守の森の観を呈しています。

この森の中に現在4基の古墳を残す馬見塚古墳群が存在しています。

これらの古墳は南北に延びる丘の尾根に沿った形で並んでおり、南側から1～4号墳としました。かつては最も北側に辻古墳が存在していましたが、昭和40年牧草地造成のため調査後破壊されましたので、少なくとも5基は存在していたことになります。



第29図 馬見塚古墳群位置図

3 過去の記録

肥後国誌には馬見塚古墳群について次のように記しています。

馬見塚原 馬見塚村北ノ曠原ヲ云村外レニ大ナル塚アリ是即チ馬見塚也 景行帝巡狩ノ時此地ニ
馬ヲ叡覽アリシト云或説文永弘安年中蒙古人襲来ノ時菊池肥後守武房此所ニテ勢汰ヘ
セシ所トモ云是否ヲ知ラス . . .

この外大道小学校に保存してある『大道村郷土誌』は大正の始めに書かれた地誌で、当時の大道村の様子が詳細に記されており、この中に古墳に関して次の記載があります。

大道村にはA. 完全なるもの10、B. 半壊せるもの4、C. 全壊して現在認むべきも、なきも往時ありしこと明らかなるもの4、D. 横穴0、計18。古墳の種類、円形古墳10、瓢形4。と書かれてあります。

この瓢形とは前方後円墳のこと、市内で確認している前方後円墳はこのほか僅か2基しかなく、いかに前方後円墳が集中して存在していたかが窺えます。

これらの古墳の中心的存在が馬見塚古墳群であります。

4 1号墳（山鹿市大字方保田字石原1385）（図版24-1，2，第30図）

馬見塚古墳群の中では最も南に築かれた円墳で、馬見塚熊野神社本殿の桧山の中にあります。丘陵の南端部に位置しているところから、自然の斜面を利用した古墳の築造を行っています。

そのため古墳南側では裾部をどこにとるかによって、古墳の大きさに影響しますが現状では最大径22m、高さは南側で4m、北側裾部からは2mを測ります。

墳頂部と南側斜面には3個の盗掘跡が残っていますが、比較的原形を保っているといえます。

内部主体は今日まで正式な発掘調査が実施されていませんので不明ですが、墳丘の高さから考えて石棺系の可能性が高いようです。

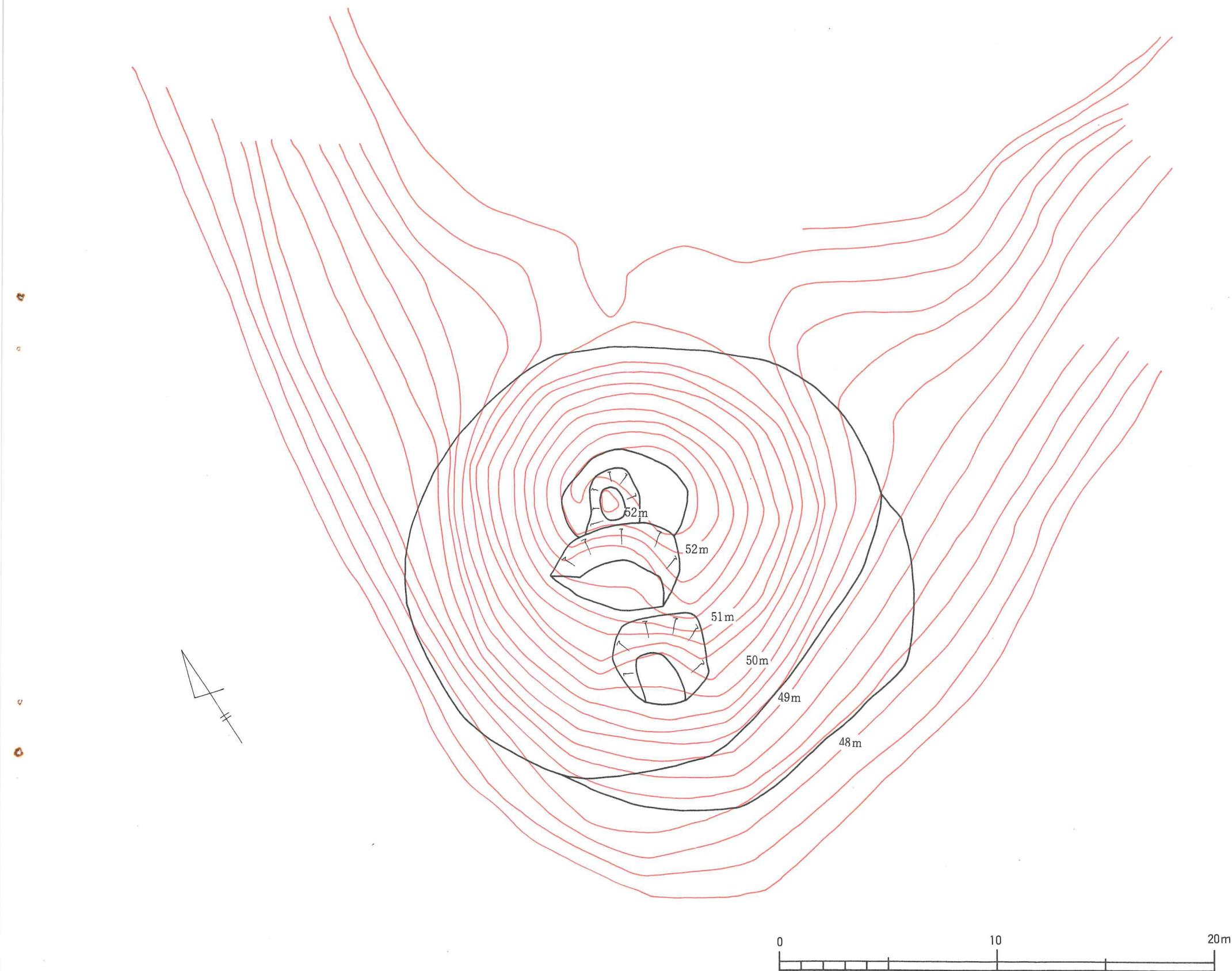
5 2号墳（山鹿市大字方保田字石原1385）（図版25-3，26-1，2，第31図）

1号墳の北側に位置し、裾部で僅か10m、墳頂部で30mしか離れていません。

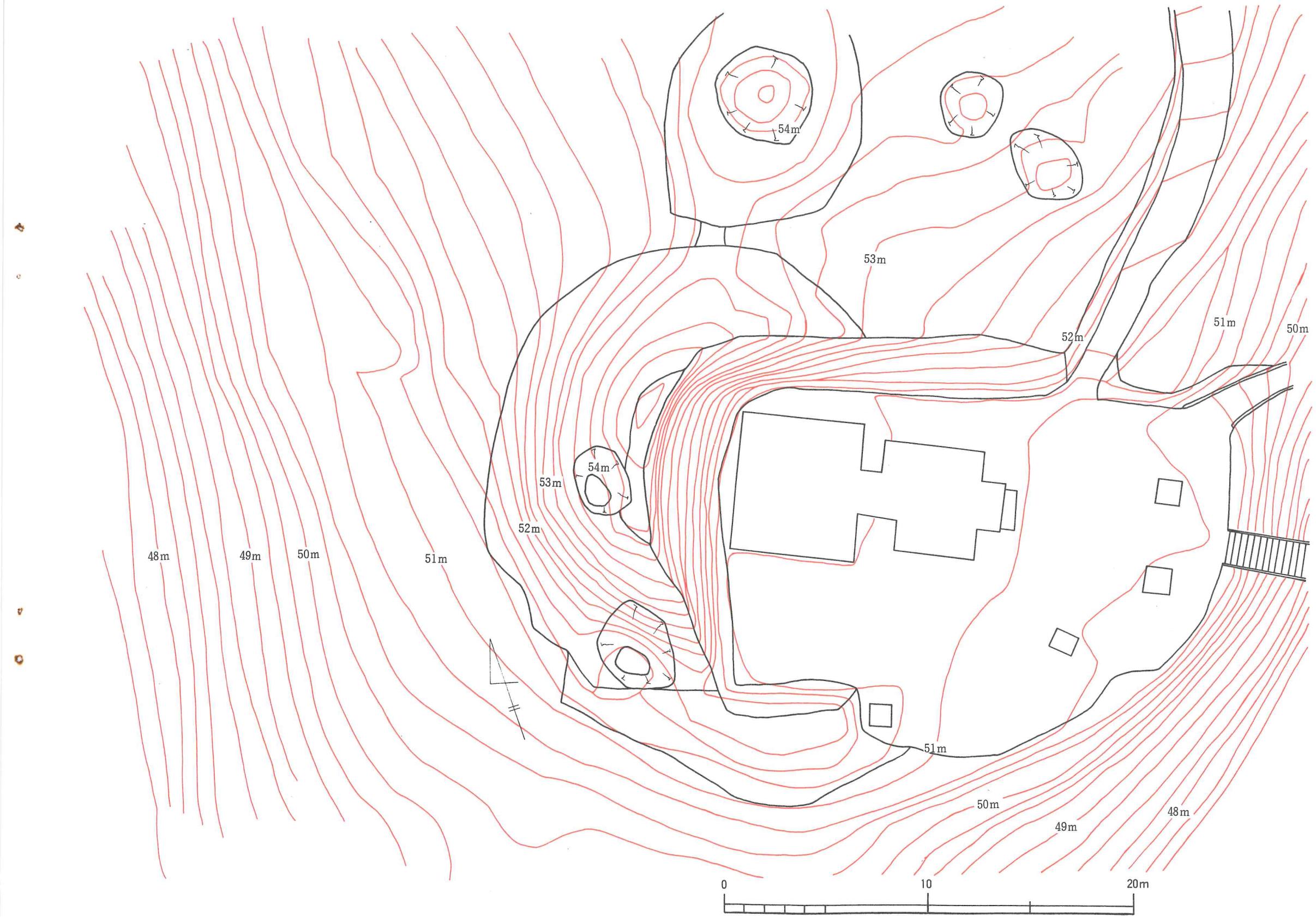
残念なことに馬見塚熊野神社本殿建築の際墳丘の半分以上を削り取られ、その斜面にはつつじを植樹してあります。そのため、現状では直径27m、高さ3.5mの古墳になるものと考えられます。

ただ古墳北側に中央を窪ませながら円形に僅かに盛土した地点が見られますが、これが別の古墳か前方後円墳の前方部ではないかとも考えられましたが、単に穴を掘った際に土を周囲に積み上げたものであろうかと考えました。

かつて墳丘削平面において丹塗りの礫が露出していましたので、内部主体は石棺系で礫床であったものと考えます。



第30図 馬見塚 1号墳測量図



第31図 馬見塚 2号墳測量図

6 3号墳（山鹿市大字方保田字辻）（第32図）

2号墳から北へ150m離れた位置で宮地嶽教会の境内の中に浮島の様に残っています。

その間には宮地嶽教会の本殿や祈とう所等の施設が建てられており、3号墳から1、2号墳を見通すことができなくなっています。

古墳の周辺を削り取られているため頂上部が多少東側に偏っており、西側の斜面が緩やかになっている。そのため、墳丘は長径10m、短径8.5m、高さ1.75mを測るが本来の規模については不明である。

現状で果たして内部主体が残っているかが問題であるが、残っているとすれば石棺になると思われます。

7 4号墳（山鹿市大字方保田字辻）（第32図）

3号墳と5号墳に挟まれた位置に残っており、3号墳とは墳頂部で25m、裾部で14mの距離にあり、5号墳とは墳頂部で42m、裾部で僅か10mしか離れていません。

古墳自体は墳丘全体に竹や雑木が覆い茂っていますが、周囲を削られ、現在長径約16m、短径1.5m、高さ2.25mの規模で、墳頂部は平坦面が直径約5mになっているところから円墳になるものと考えられます。

内部主体は墳丘の高さから石棺の可能性が大きいと考えられます。

8 5号墳（山鹿市大字方保田字辻）（第33図）

4号墳の北側で標高54mの高さに位置しています。この古墳の北約180m地点に辻古墳がかつて存在していました。

墳丘は北側裾部が一部削平されていますが、ほぼ原形を保っています。古墳の大きさは長径38.5m、短径33m、高さ6mの大形の円墳で、墳丘全体には雑木が密生し全体を見渡すことができません。

北側裾部の削平を考慮すると、本来の大きさは直径40m以上の規模であったことが窺えます。

直径40mを超す円墳は、菊池川流域に於いては他に鹿本郡植木町所在の県指定史跡「慈恩寺経塚古墳」（直径44m、高さ7.5m）と菊池郡西合志町所在の「ヌレ観音古墳（黒松古墳群内）」（直径40m、高さ8m）の2基のみです。

したがって、この古墳は方保田地区の中は無論のこと、菊池川中流域における中心的存在の古墳であると言えます。

内部主体は未調査のため不明ですが、昭和40年に発掘調査された辻古墳の例から考えて石棺の可能性が大であろうと考えられます。

9 参考地（6号墳）（山鹿市大字方保田字辻）（第34図）

墳丘自体の存在は確認されていませんが、僅かに墳丘の一部と思われる部分が存在しているので参考地としてここに紹介しておきます。

5号墳の北側約15mの位置にあり、宮地嶽教会と隣接する堀川セメント工業の資材置場と接しています。この資材置場は一段低く削平されていますが、その際この古墳を破壊した可能性が高いようです。墳丘の残存部は竹藪となっていて、西側に5m程度離れた土手には、かつて溝状遺構（周溝）の一部が露出していましたが、今では見ることができない状況にあります。

のことからここが古墳の可能性が極めて高いものと考えられます。

現在長さ10m、幅3m、高さ1mで残っていますが、裾部から復元すると直径13m程度の規模の円墳になります。

9 参考地（7号墳）（山鹿市大字方保田字辻）（図版26-3，第34図）

5号墳から北東方向へ35m離れた竹藪の中に僅かながら盛土を残している地点があります。

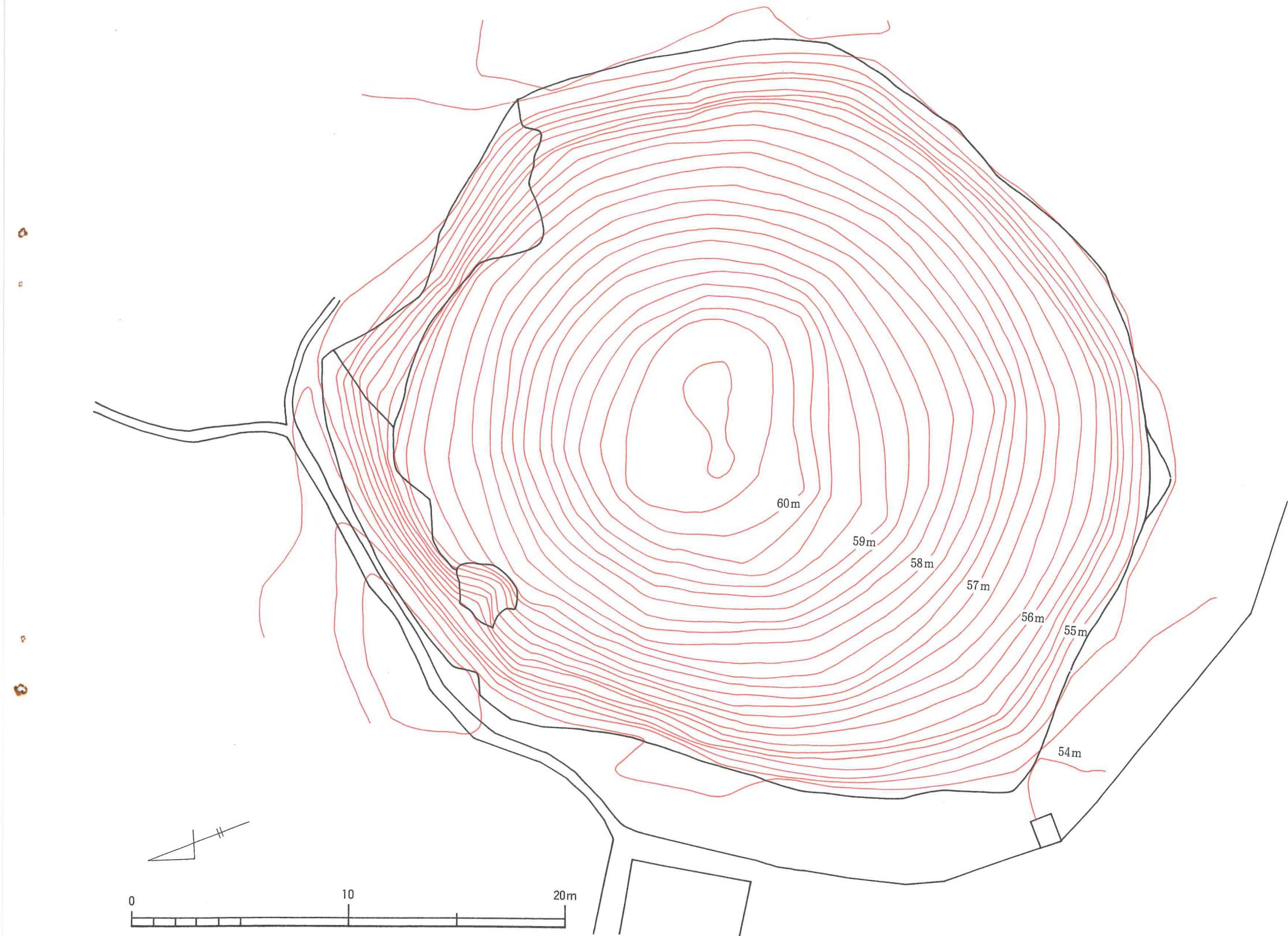
墳丘と思われる部分も一見単なる土手の様にも見えますが、中心部に石材が散在しているところから古墳の可能性が高いと考えました。

墳丘の西側は大きく削られ、北側では竹藪のため測量ができませんでした。そのため墳形も断定できませんが円墳の可能性が大きいようです。現在長さ13m、幅5m、高さ1.5mを測ります。

石材が数個顔を覗かせていましたが、石棺か否か断定できませんでした。しかし石棺の可能性が大きいようです。



第32図 馬見塚3・4号墳測量図



第33図 馬見塚5号墳測量図



第34図 馬見塚古墳群参考地測量図

IV まとめ

今回の調査では多くの成果を得ることができましたが、反面新たな問題点も出てまいりました。ここではそれらの問題点を整理し、まとめとします。

錢龟塚古墳に関しては、まず標高161.8m、比高差でも106mの高さの山頂部において古墳を築造していたという事実が明らかになりました。

これまで熊本県においては標高はともかく、比高差100mを超す山頂で古墳が発見された例はありませんでした。そのため山頂部が調査の対象にすらならなかったと言っても過言ではないでしょう。この古墳の存在によって、今後の古墳調査の対象区域を山頂部に広げる必要性が生じてきたと言えるのではないでしょうか。

とくに古墳時代でも前期に属する古墳については、熊本県はこれまで宇土半島基部に集中して分布していましたが、全国的に山頂部に築かれる例が見られるところから、将来は県内各地で発見される可能性が生じてきました。

次に石室の構造が豎穴系横口式石室であるか初期横穴式石室であるかの問題です。

豎穴系横口式石室と初期横穴式石室の定義については諸説があり、現在の段階では明確にされていないようですが、いずれにしても錢龟塚古墳の石室が初期の横穴式石室の形態を示していることは事実のことあります。

さらに石室内に石障を巡らしていたことも明らかになり、いわゆる肥後型の横穴式石室の特徴を備えていたことも判明致しました。

これまで肥後型の横穴式石室は熊本県内では熊本市以南の白川流域と緑川流域を中心に分布しており、菊池川流域においては、僅かに玉名市所在の伝左山古墳のみが確認されていたに過ぎませんでした。

いわば空白地帯に初期横穴式石室と石障系横穴式石室（肥後型）が合体したようなこの古墳が出現したことは、熊本県における横穴式石室の発生とともに石障系横穴式石室（肥後型）の発生の問題を考えるうえにおいて重要な位置を占める事になるでしょう。

とくに熊本県下において、石障系横穴式石室を持った古墳は総て円墳であるという指摘がありますが、錢龟塚古墳の場合全長65m以上の前方後円墳であり、その点でも今後に残された問題は大きいものといえます。

また、古墳の時期についてですが、今回の調査では何ひとつ時間的位置付けをすることができる遺物は発見されませんでした。しかし、石室の形態から5世紀中頃であろうと考えます。

京塚古墳は、地元の人々の間では廃材置き場であると伝えられており地元に残る伝承が時には誤って伝えられる事があることを思い知らされました。

地下レーダー探査によって古墳である事が確認されましたが、このことは将来の調査に新たな方向性が見いだせたものと考えます。

非破壊的な調査方法が実施できるようになれば、保存を目的とした調査を行うに当たっても遺跡

自体を発掘せず、言わば完全な姿のまま整備なり何なりの方法が可能となります。

ただ、現在の我々の技術では画像の解析に決定的な判断材料を持っていないのが現状ですので、解析技術の向上を計るためにも、より多くの画像パターンを集め必要があります。

さらに、今後は機械の精度を高める必要があります。解析される画像がより鮮明になることによって、内部構造の確認に際しより正確な判断が出来るようになります。

また、機械の小型軽量化が必要で、現在の大きさでは持ち運びが不便で総ての現場で使うことは不可能です。

これらの点が改善されればより効率的な調査が出来るものと思われます。

毘沙門塚古墳は石室内の石屋形が特徴的であることが明らかになりましたが、石室自体は樹根によって崩壊が進行しています。すでに石材の大半に亀裂が走り、天井石、眉石、石屋形天井石等の巨石までもが大きく割られています。一部では石材の転落も見られ、いつ落ちてもおかしくない状況にあります。

今後は石室の補修工事を実施しない限り一般公開に供することは危険極まりないものと考えられます。

舞野石棺群では3基の箱式石棺の内2基から3体分の人骨が検出され、人類学的な検討を加えていただきました。また、重闕素文鏡が女性人骨とともに出土しました。

菊池川流域においてはこれまで数多くの石棺が出土し調査されていましたが、時間的な位置付けが出来るものは皆無で、調査員の勘に頼っていたところは否めません。

石材の材質や数、さらには組み合わせかたによって時間的な差や、地域差、さらには身分差などがあるのではないかと考えます。

いずれにしてもこれらの問題点については今後解明して行かなければならず、解明することが調査員としての責務であると考えます。

NHK熊本放送局は開局60周年記念として装飾古墳の謎について特集を企画され、私達の調査をその取材の対象に組み入れていただきました。

そのため、今回はこれまでの調査とは異なり、NHK熊本放送局の全面的な協力を得て科学技術を駆使した調査を実施することができました。

京塚古墳で実施した地下レーダー探査については大栄設計株式会社の技術協力によって行うことができました。社長自ら額に汗しながら何度も何度もテストを繰り返していただいた結果、古墳内部が横穴式石室であることが判明しました。さらに周溝の存在も明らかになるなど多くの成果を上げることができました。

また、石室内の装飾文様が煤で汚れて一部しか見ることができなかつた弁慶が穴古墳では、三菱電機株式会社の協力で赤外線テレビによる石室内の撮影を実施しました。

何とか新たな装飾文様の確認ができるだろうかと期待しましたが、残念ながら良い結果を得ることができませんでした。今後は機種の選定について再考し、機会があれば再度実施したいと考えています。なお、この調査の模様は平成元年1月26日NHK総合で、九州特集『黄泉の石室』として放送されました。

V 付 論

熊本県山鹿市舞野遺跡出土の古墳時代人骨

松下孝幸*・分部哲秋*・佐伯和信*・弦本敏行*

はじめに

舞野遺跡は熊本県山鹿市大字平山字舞野に所在する埋葬遺跡で、この遺跡の発掘調査が1986年（昭和61年）の秋に行われ、その結果、石棺から人骨が検出された。

菊池川中流域に位置する山鹿市にはチブサン古墳、鍋田横穴群をはじめとする全国でも著名な装飾古墳群が認められ、古墳時代に独特な古墳文化を創出した地域である。このような古墳文化を作り出し、それを担った古墳人は一体どのような人々であったのかという疑問を、形質人類学に携わる者として、この地を訪れる度にもち続けてきた。

山鹿市では菊池川中流域古墳・横穴総合調査が行われており、湯の口横穴群の調査が昭和59年度（1984年度）から行われている。その結果、人骨も出土したが、保存状態が悪く、今のところ湯の口古墳人の特徴を明らかにするところまでは至っていない。しかし、隣町の鹿本町の津袋大塚古墳の墳丘の東側から出土した石棺からは、保存良好な人骨が3体出土した。この津袋古墳人は男女とも短頭、低広顔という特徴を示し、男性は低身長で、形態的には宮崎県や鹿児島県の山間部の地下式横穴墓から出土する古墳人と同じ傾向を示す古墳人であった。

現在のところ、山鹿市でその特徴を多面的に明らかにできた古墳人は1例も存在しないことから、本遺跡から出土した人骨の保存状態が期待されたが、後述しているとおり、その保存状態はあまり良いものではなかった。しかし、頭蓋には興味ある所見が認められたので、その結果を報告しておきたい。

資 料

本遺跡の2基の石棺から合計3体の人骨が出土した。表1のとおり、1号石棺からは1体が、2号石棺からは2体の人骨が検出された。なお、各人骨の別格・年令は表2のとおりである。

各人骨の残存状態は図2に示すとおりで、全般的にその保存状態は悪いものであった。

この人骨群は、別稿で述べられているように、考古学的所見より古墳時代前期に属する人骨群で

表1 資料 (Table 1. List of skeletons)

ある。

石棺番号	人骨番号	性別	年令
1号石棺	1号人骨	男性	壮年
2号石棺	1号人骨	女性	壮年
	2号人骨	不明	壮年

計測方法は、Marton-Saller (1957) によつたが、鼻根部の計測は鈴木 (1963) と松下 (1983) の方法で行った。

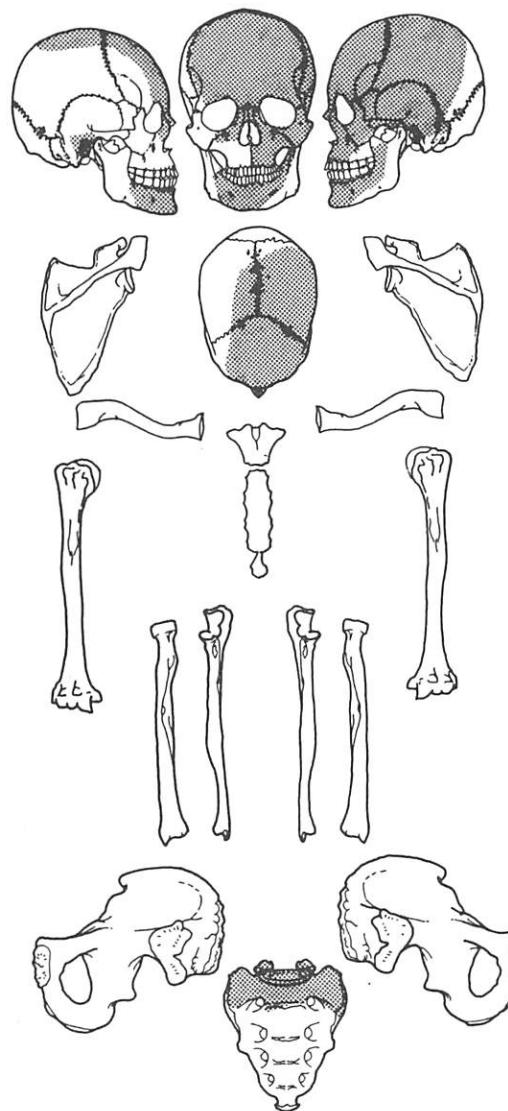
* Takayuki MATSUSHITA, Tetsuaki WAKEBE, Kazunobu SAIKI, Toshiyuki TSURUMOTO

Department of Anatomy, Faculty of Medicine, Nagasaki University

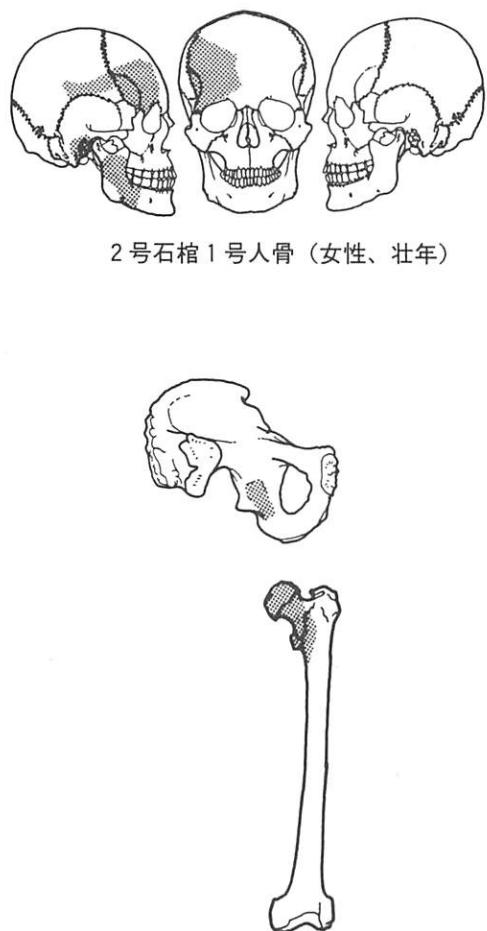
[長崎大学医学部解剖学第二教室（主任：内藤芳篤教授）]



図1. 遺跡の位置 (Fig.1. Location of Maino site, Yamaga City, Kumamoto Prefecture)



1号石棺1号人骨（男性、壮年）



2号石棺1号人骨（女性、壮年）

2号石棺2号人骨（性別不明、壮年）

図2. 人骨の残存部、アミかけ部分

(Fig. 2. Regions of preservation of the skeleton. Shaded areas are preserved.)

所 見

各人骨の残存部は図2に示すとおりである。また、各骨の計測値は文末に一括して掲げた。

1号石棺1号人骨（男性、壮年）

1. 頭蓋

(1) 脳頭蓋

後頭骨、右側側頭骨の大部分を欠損している。骨壁はやや厚く、堅牢である。外後頭隆起の様態や乳様突起の大きさは不明である。外耳道は両側とも観察できたが、骨腫は両側とも認められない。縫合は、三主縫合のうち矢状縫合の前半分と冠状縫合の観察が可能である。矢状縫合は内外両板とも開離しており、冠状縫合は、その右側半は内外両板とも開離しているが、左側半は外板は開離しているものの、内板はほとんどが癒合閉鎖している。

脳頭蓋の計測値はほとんど不可能で、従って、頭蓋長幅示数も算出することができないが、観察したところでは、頭型はおそらく短頭に傾いていたと推測される。

(2) 顔面頭蓋

顔面頭蓋は右側の頬骨や上顎骨体を欠損しているが、その他の部分の保存状態は良好である。眉上弓はやや隆起し、前頭鱗は後方へ傾斜している。また、鼻骨の隆起は弱く、鼻根部は扁平である。頬骨の外側への張り出しが弱い。

顔面頭蓋の全体の計測は、不可能であるが、左側半がほぼ完全に残存しているので、この左側半を2倍することによって、頬骨弓幅と中顎幅の推定値を算出してみると、頬骨弓幅は $[67\text{mm} \times 2 = 134\text{mm}]$ 、中顎幅は $[52\text{mm} \times 2 = 104\text{mm}]$ となるが、顎高と上顎高は計測不可能である。従って、顎示数や上顎示数は算出できない。

眼窓幅は43mm（左）、眼窓高は35mm（右、左）で、眼窓示数は81.40（左）となり、左側はmesokonch（中眼窓）に属している。

鼻幅は24mm、鼻高は52mmで、鼻示数は46.15となり、leptorrhin（狭鼻）に属している。

鼻根部の計測値は、前眼窓間幅が16mm、鼻根横弧長は18mm、鼻根弯曲示数は88.89となり、鼻根部は扁平である、前頭突起水平傾斜角は計測できないが、観察したところでは、その向きはやや矢状方向である。鼻根角は145度、鼻根陥凹示数は13.33である。

側面角も計測できないが、観察したところでは歯槽性突頸の傾向が認められるようである。

下顎骨は径が小さく、下顎体の高径はかなり低い。

2. 歯

歯が残存していた。下顎歯は下顎骨に釘植していたが、上顎歯はすべて遊離していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

$M_3 \ M_2 / P_2 \ P_1 \ C \ I_2 /$	$I_1 \ I_2 \ C \ P_1 \ P_2 / M_2 /$	$/ : \text{不明(破損)}$
$/ \ M_2 \ M_1 \ P_2 \ P_1 \ C \ I_2 \ I_1$	$I_1 \ I_2 \ C \ P_1 \ P_2 \bullet M_2$	$\bullet : \text{歯槽閉鎖}$

下顎左側のM₃は、生前萌出しており、その後脱落し、歯槽が閉鎖した状態なのか、もともと未萌出だったのか定かでない。咬耗度は Broca の1～2度である。なお、風習的抜歯の痕跡は認められない。また、歯の咬合形式は不明である。

3. 軸幹骨・四肢骨

四肢骨は全く残存していなかったが、仙骨、椎骨、肋骨が残存していた。

4. 特殊所見－病理学的所見

矢状縫合に沿ってその左側部に幅約12mm、長さ約35mmの膜状の骨性の構造物が認められる。この異常な骨性構造物に関しては現在検討を進めており、一応の診断がついた時点で改めて報告したい。

5. 性別・年令

性別は、眉上弓がやや隆起し、前頭鱗が後方へ傾斜していることから、男性と推定した。年令は、矢状縫合と冠状縫合のうち右側半が内外両板とも開離していることから壮年と考えられる。

2号石棺1号人骨（女性、壮年）

前頭骨、右側頭頂骨、下顎骨のそれぞれ一部および遊離歯が残存していたにすぎない。眉上弓の隆起は弱そうで、前頭結節の発達は良好である。

遊離歯を歯式で示すと、次のとおりである。

/ / / / P ₁ / / /	I ₁ / / / / / / /	[/ : 不明(破損)]
/ / / / / / / I ₁	I ₁ / / P ₁ P ₂ M ₁ / /	

咬耗度は Broca の1度である。また、歯の径は著しく小さい。

性別は、眉上弓の隆起が弱そうで、前頭結節の発達が良好であることから女性と推定した。年令は歯の咬耗が弱いことから推測すれば、壮年の可能性が強い。

2号石棺2号人骨（性別不明、壮年）

頭蓋片、遊離歯、左側寛骨片、左側大腿骨近位部が残存していた。

頭蓋は左右の側頭骨の岩様部が残存していた。

残存していた遊離歯を歯式で示すと、次のとおりである。

M ₃ M ₂ / P ₂ P ₁ C I ₂ I ₁	I ₁ I ₂ / / P ₂ M ₂ M ₂ M ₃	[/ : 不明(破損)]
/ M ₂ / / P ₁ / / I ₁	/ / / P ₁ / / M ₂ /	

咬耗度は Broca の1～2度で、歯の径は小さい。

左側大腿骨は骨頭から小転子にかけて残存していた。残存部分から推測すると大腿骨の径はあまり大きいものではなさそうである。

性別は、大腿骨の径があまり大きくはないようないことや、歯の径が小さいことから女性の可能性が強いようであるが、明確な決め手を欠くので、ここでは性別不明としておきたい。年令は歯の咬耗状態だけから推測すれば壮年と考えられる。

考 察

男性の頭蓋に関して若干の考察を行っておきたい。

熊本県の古墳人の頭型に関しては、まだ資料が不足しており、県内の各地域ごとの傾向はもとより熊本県全体の傾向すら把握することができていない。山鹿市周辺地域だけをみてみると、鹿本町の津袋古墳人の1例は短頭に傾いていたが、本例もまた短頭に傾いていたと推測され、短頭傾向の例が増えた。また、出土例は多かったが保存状態が悪かった湯の口古墳人の頭型は、推測もできなかつた。

本例の顔面頭蓋はかなり特徴的で、注目すべき点が認められる。顔全体の高径や幅径は破損のため、計測することができず、顔面の特徴を明確にできないが、表2に示しているように、眼窓の高径は高く、また、鼻幅は狭く、鼻高は高い。すなわち、眼窓や鼻部に関してはいずれも高径が高いのである。

今回は、本古墳人の特徴を明確にするために、古墳人としては鹿本町の津袋古墳人を用いたが、前述しているように、本例には眼窓や鼻部の高径が高い傾向が認められたので、高顎・高身長の弥生人の例として福岡県小郡市の横隈狐塚弥生人、佐賀県の二塚山弥生人、三津弥生人を比較資料として表2に掲げた。

表2 顔面頭蓋計測値(男性、mm、度) (Table 2. Comparison of male facial measurements and indices)

	舞 野		津袋大塚		横隈狐塚		二 塚 山		三 津	
	古 墳 人		古 墳 人		弥 生 人		弥 生 人		弥 生 人	
	(松下、他)	(n M)	(松下、他)	(n M)	(松下)	(n M)	(松下、他)	(n M)	(牛島)	(n M)
40. 頬長	—	—	1 99	9 95.89	11 101.45	10 101.10				
45. 頬骨弓幅	1 [134]	—	—	6 136.83	5 144.20	6 142.41				
46. 中顎幅	1 [104]	—	1 105	11 101.82	6 106.00	10 104.30				
47. 顎 高	—	—	1 115	11 126.00	9 122.56	10 125.00				
48. 上顎高	—	—	1 66	15 71.93	10 71.60	13 74.54				
47/45 顎示数 (K)	—	—	—	3 93.13	4 84.97	4 89.95				
48/45 上顎示数 (K)	—	—	—	5 52.71	5 51.34	5 53.05				
47/46 顎示数 (V)	—	—	1 109.52	6 124.38	5 117.47	8 121.58				
48/46 上顎示数 (V)	—	—	1 62.86	10 69.44	6 69.58	10 71.65				
51. 眼窓幅 (左)	1 43	—	1 46	14 42.57	9 44.67	14 42.93				
52. 眼窓高 (左)	1 35	—	1 33	18 34.89	12 36.08	13 35.25				
52/51 眼窓示数 (左)	1 81.40	—	1 71.74	13 81.92	9 81.43	13 82.45				
54. 鼻 幅	1 24	—	1 26	16 25.88	11 26.27	13 27.15				
55. 鼻 高	1 52	—	1 49	18 53.50	11 55.18	14 53.00				
54/55 鼻示数	1 46.15	—	1 53.06	16 48.01	11 47.80	13 51.38				

表2のとおり、頬骨弓幅の推定値は〔134mm〕で、いずれの比較資料よりも小さく、中顎幅の推定値は〔104mm〕となり、横隈狐塚弥生人よりは大きいもののその他の資料よりは小さく、顔面の幅径はそれほど広くはない。上顎高は少なくとも66mmはあると推測されるが、その上限は不明である。眼窩や鼻部の高径が高いことから推測すれば、あるいは上顎高は70mmに近く、高上顎傾向を示していた可能性も考えられる。しかし、下顎骨の高径が低いことから顎高はあまり高くなかったと考えられる。

眼窓幅は津袋古墳人よりは小さく、その他の資料とは大差ない。眼窓高は津袋古墳人よりは大きく、高顎・高身長の横隈狐塚弥生人、二塚山弥生人、三津弥生人の平均値に近い。従って、眼窓示数もこの弥生人群に近い値である。また、鼻幅はいずれの比較資料よりも小さく、鼻高は津袋古墳人より大きく、やはり横隈狐塚弥生人、二塚山弥生人、三津弥生人の平均値に近く、鼻示数もこの弥生人群中に近い値を示している。

すなわち、眼窓と鼻部に関しては明らかにその高径が高いといえるわけで、山鹿市周辺地域の古墳人としては初めての傾向だけに注目しておきたい。

要 約

熊本県山鹿市大字平山字舞野にある舞野遺跡から石棺が発見され、発掘調査の結果、3体の人骨が検出された。人骨の保存状態はあまり良いものではなかったが、頭蓋の特徴をある程度明らかにすることことができたものが1例存在し、この頭蓋の人類学的観察や計測の結果、非常に興味ある所見が認められた。その結果は次のとおりである。

1. 3基の石棺のうち2基の石棺から合計3体の人骨が検出された。人骨は1号石棺から1体、2号石棺からは2体が出土した。
2. 3体とも成人骨であるが、性別を明らかにできたのは2体のみで、男女それぞれ1体ずつであった。
3. この3体の人骨は、古墳時代前期に属する人骨である。
4. 男性の頭型は観察したところでは、短頭に傾いていたと推測される。
5. 顎高と上顎高は計測できないが、頬骨弓幅と中顎幅の推定値はそれぞれ〔134mm〕、〔104mm〕で、幅径はあまり広くない。
6. 眼窓幅は43mm（左）で、眼窓高は35mm（右、左）で、眼窓示数は81.40（左）となり、左側はmesokonch（中眼窓）に属している。
7. 鼻幅は24mm、鼻高は52mmで、鼻示数は46.15となり、leptorrhin（狭鼻）に属している。
8. 鼻根部は扁平で、観察によれば歯槽性突顎の傾向が認められるようである。
9. 風習的抜歯の痕跡は認められない。また、外耳道骨腫は両側とも認められない。
10. 女性に関してはその特徴を知ることはできなかった。
11. 以上のように本古墳前期人には眼窓と鼻部の高径が高いといった特徴が認められ、高上顎傾向

が予想されるが、下顎体の高径が低いことから顔高は高くなかったと推測される。このような高眼窩、高鼻傾向は津袋古墳人には認められず、この点に関しては両者は全く対照的である。今後、人骨の出土例の増加を待って、被葬者の所属時期、埋葬構造などの差異も十分考慮し、分析を行っていけば、菊池川中流域の古墳人の特徴も次第に明らかになるものと考えている。

《擱筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた山鹿市教育委員会、山鹿市立博物館の諸先生方に感謝致します。》

参考文献

1. Martin-Saller, 1957 : Lehrbuch der Anthropologie. Bd. 1. Gustav Fisher Verlag, Stuttgart : 429-597.
2. 松下孝幸、他、1983：山口県豊浦郡豊北町土井ヶ浜遺跡出土の人骨。土井ヶ浜遺跡第7次発掘調査概報（豊北町埋蔵文化財調査報告第2集）：19-30.
3. 松下孝幸、他、1985a：熊本市古城横穴群出土の古墳時代人骨。古城横穴墓群（熊本県文化財調査報告第74集）：129-146.
4. 松下孝幸、1985b：玉名市小路石棺出土の古墳時代人骨。滑石小路箱式石棺・本堂山遺跡（玉名市文化財調査報告第6集）：32-48.
5. 松下孝幸、他、1985c：熊本県益城町福原横穴墓群出土の古墳時代の人骨。福原横穴墓群（熊本県文化財調査報告第77集）：29-42.
6. 松下孝幸、他、1986a：熊本県鹿本郡津袋大塚東側1号石棺出土の古墳時代人骨。津袋大塚東側1号石棺出土人骨研究報告書（鹿本町文化財調査研究報告第2集）：5-33.
7. 松下孝幸、他、1986b：熊本県山鹿市湯の口横穴群出土の古墳時代人骨。湯の口横穴群（菊池川中流域古墳・横穴群総合調査報告書(1)）：111-122.
8. 松下孝幸、他、1988：熊本県山鹿市湯の口横穴群出土の古墳時代人骨。湯の口横穴群(II)（菊池川中流域古墳・横穴群総合調査報告書(3)）：53-63.
9. 内藤芳篤、1975：塚原中世墳墓・丸尾5号墳出土の人骨。熊本県文化財調査報告、第16集：317-322.
10. 内藤芳篤、分部哲秋、1980：清水1号古墳出土の人骨について。清水古墳群・野寺遺跡・林源衛門墓（熊本県文化財調査報告第41集）：22-28.
11. 鈴木 尚、1963：日本人の骨。岩波書店、東京。

Human Skeletal Remains of the Kofun Period Excavated from MainoSite, Yamaga City, Kumamoto Prefecture.

Takayuki MATSUSHITA, Tetsuaki WAKEBE,
kazunobu SAIKI, Toshiyuki TSUKAMOTO

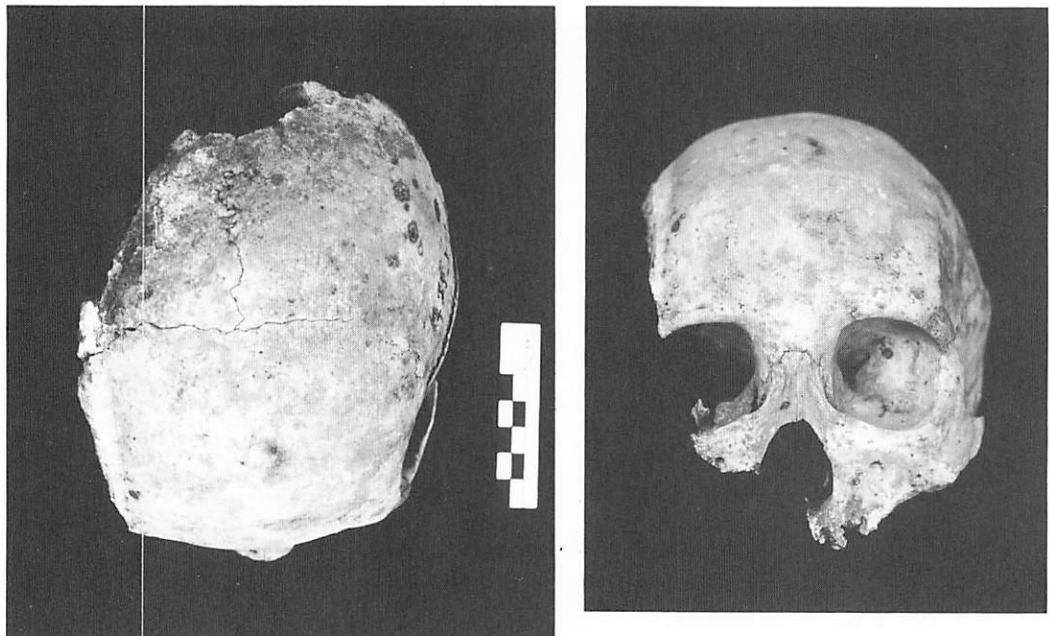
Keybord : Kumamoto pref.,Kofun skeletons, stone cists, high orbit, high nasal height

Three Human skeletal of the early phase of the Kofun Period were excavated from the cists at Maino site, Yamada city, Kumamoto Prefecture, in 1986. They observed and measured anthropologically.

No. 1-1 skeleton is young adult male. Its face is not wide (Bzygomatic breadth: 134mm, Middle facial breadth: 104mm). The orbit and nasal part are high (Table 2).

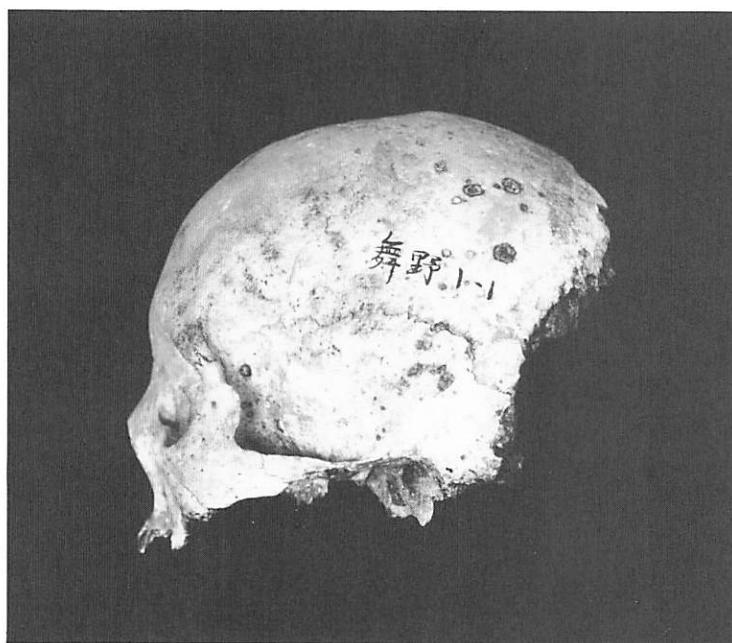
No.2-1 skeleton is a young adult female, Fragments of the skull and teeth.

No.2-2 skeleton is a young adult, fragments of the skeleton and teeth. But its sex unknown.



頭蓋前面 (Norma frontalis of the skull)

頭蓋上面 (Norma verticalis of the skull)



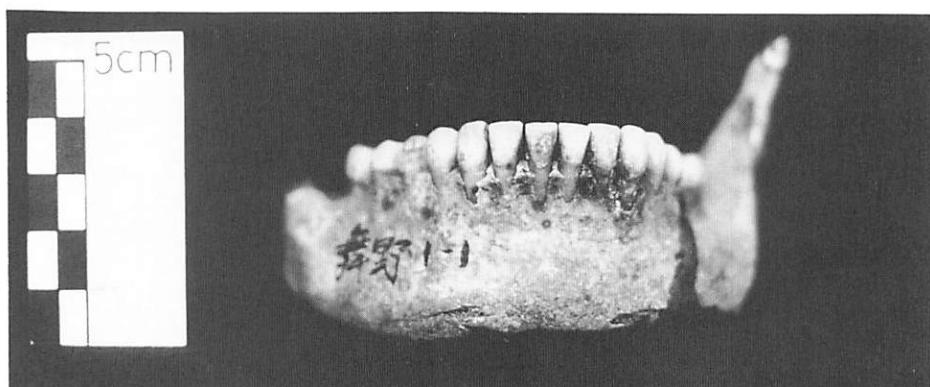
頭蓋側面 (Norma lateralis of the skull)

舞野 1 号石棺 1 号人骨頭蓋 (男性、壯年)

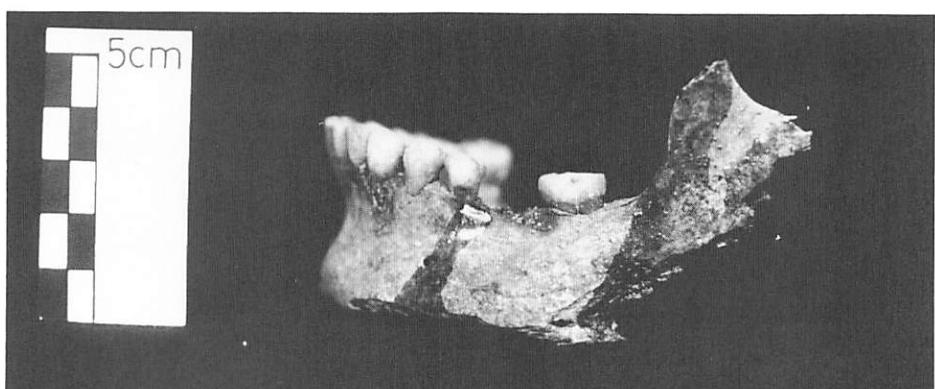
(No.1 skeleton of Maino cist No.1 (young adult male))



下顎骨上面 (Norma verticalis of the Mnadible)

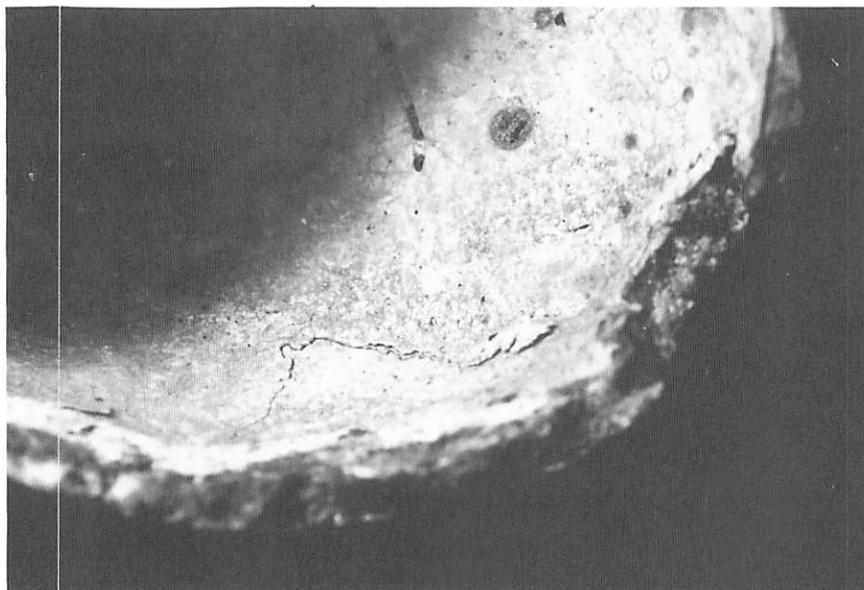


下顎骨全面 (Norma frontalis of the Mnadible)

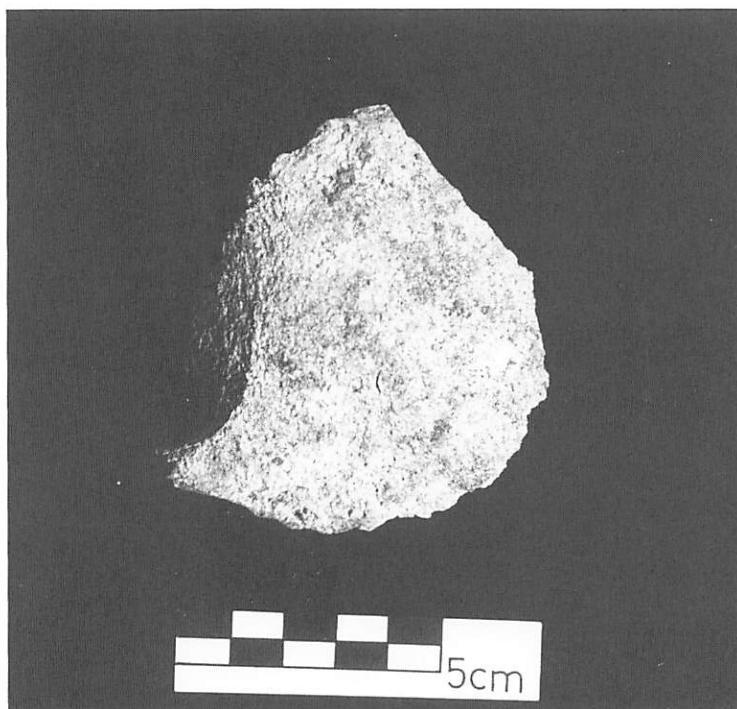


下顎骨側面 (Norma lateralis of the Mnadible)

舞野 1 号石棺 1 号人骨下顎骨 (男性、壮年)
(Mnadle of No.1 sketeton, Maino cist No.1)



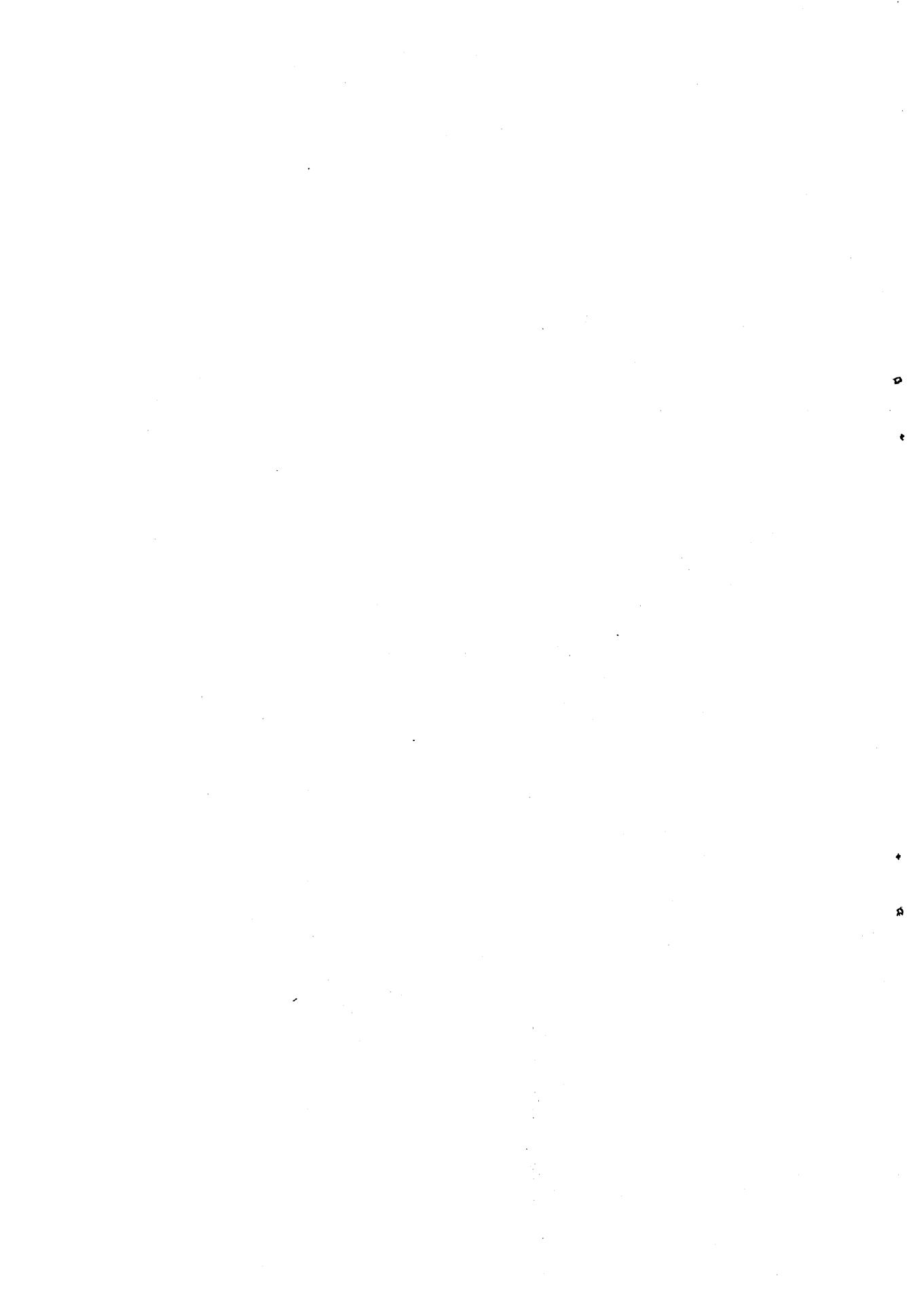
舞野 1 号石棺 1 号人頭蓋内板（男性、壮年）
骨性構造物 (Osseous structure)



舞野 2 号石棺 1 号人骨頭蓋（女性、壮年）
(No.1 skeleton of Maino cist No.2 (young adult female))
前頭骨 (Frontal bone)



版



図版 1



1 錢龟塚古墳遠景



2 後円部全景



3 前方部全景

図版 2



1 後円部西側裾部



2 後円部墳頂部



3 作業風景

图版 3



1 石材散在状况



2 石室全景



3 南侧侧壁全景

図版 4



1 北側側壁全景



2 美門部全景



3 奥壁全景

図版 5



1 美門部近景



2 奥壁近景



3 美門部コーナー



石室南西部全景

図版 7



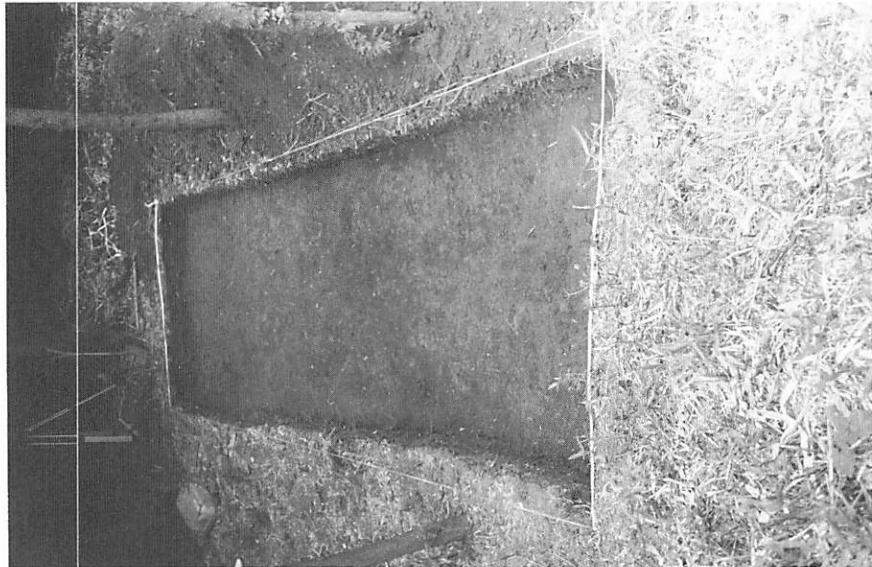
1 京塚古墳調査風景



2 京塚古墳全景
(南西方向より)



3 京塚古墳全景
(南側より)



1 第1トレンチ表土除去状況



2 第1トレンチ槻出土状況

図版 9



毘沙門塚古墳調査
風景

1



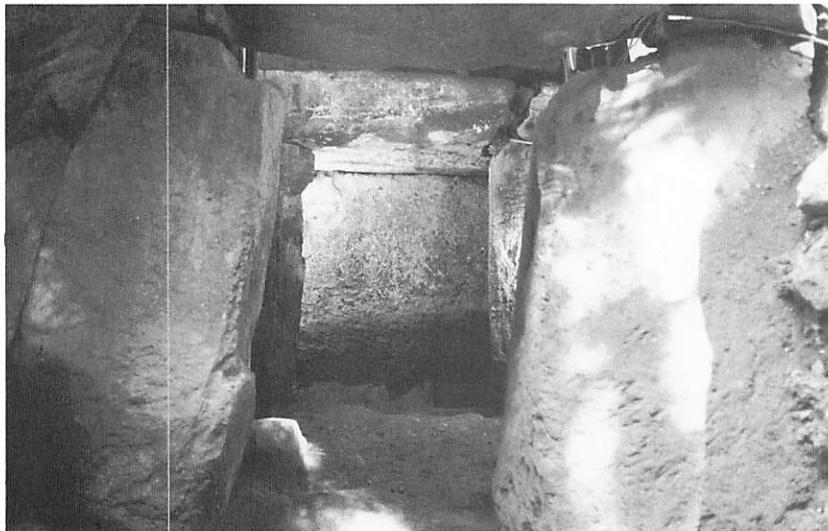
2 古墳全景



3 石室開口状況



1 美門露出状況



2 済門より奥壁を見る



3 石屋形全景

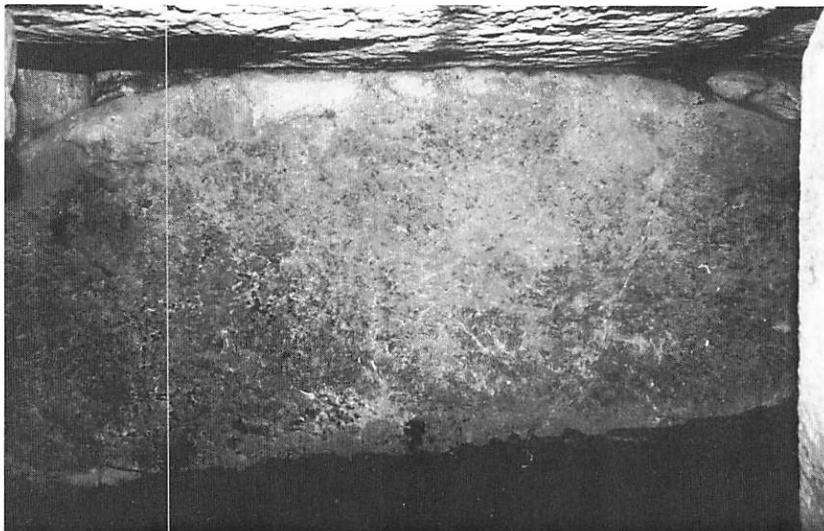


1 石室前壁全景

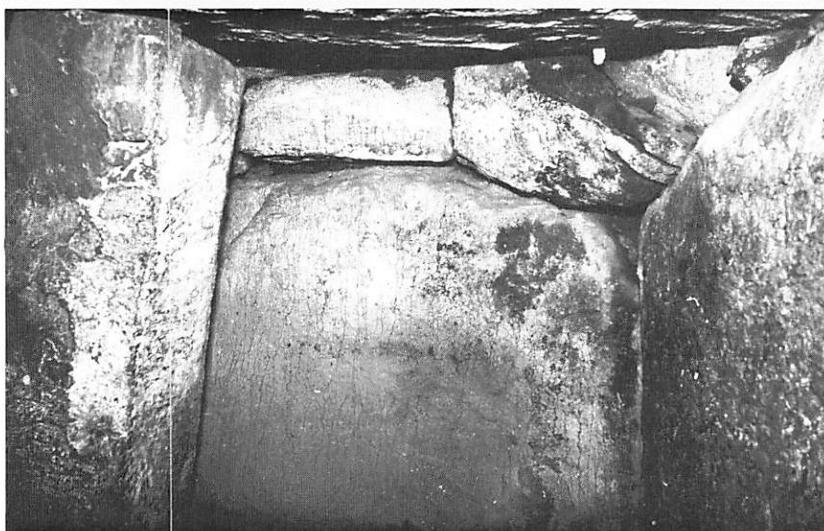


2 石室奥壁全景

図版12



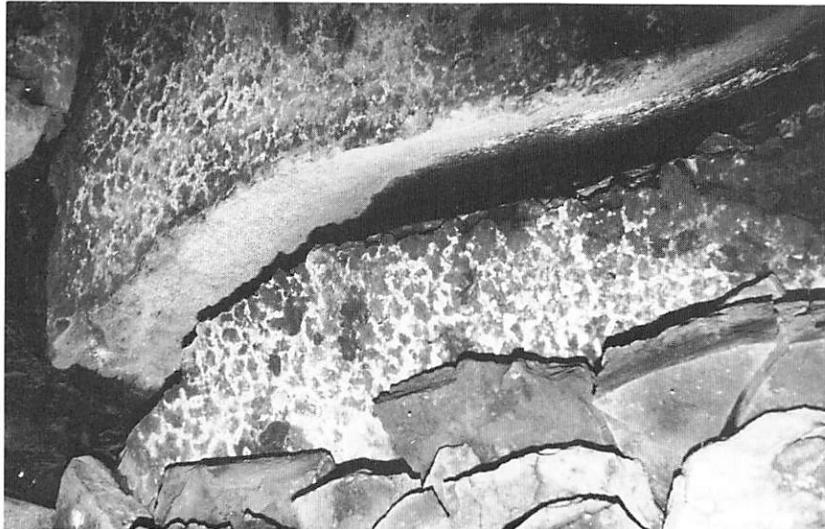
1 石屋形奥壁



2 石屋形左側壁



3 石屋形右側壁



1 天井石破損状況

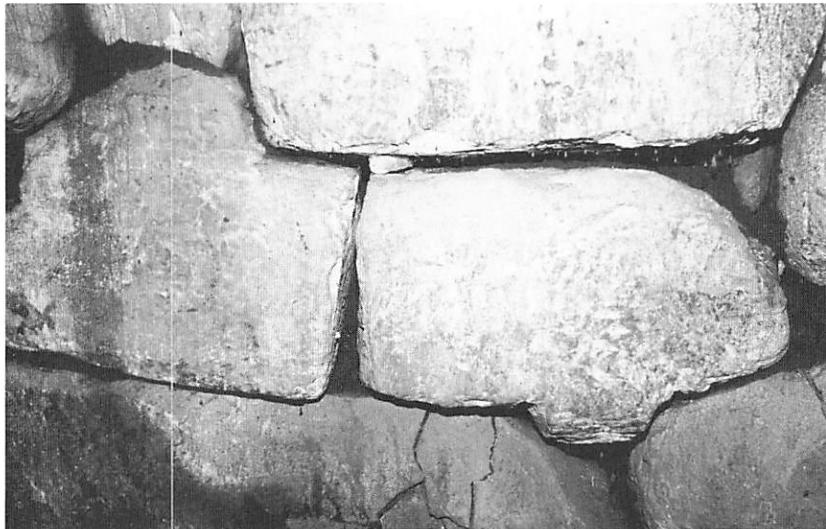


2 石積崩壊状況



3 石屋形天井石破損
状況

図版14



1 石材加工状況



2 前庭部石材出土状況



3 前庭部堆積土層



1 倉塚古墳全景
(北側より)



2 倉塚古墳全景
(東側より) .



3 墳頂部

図版16



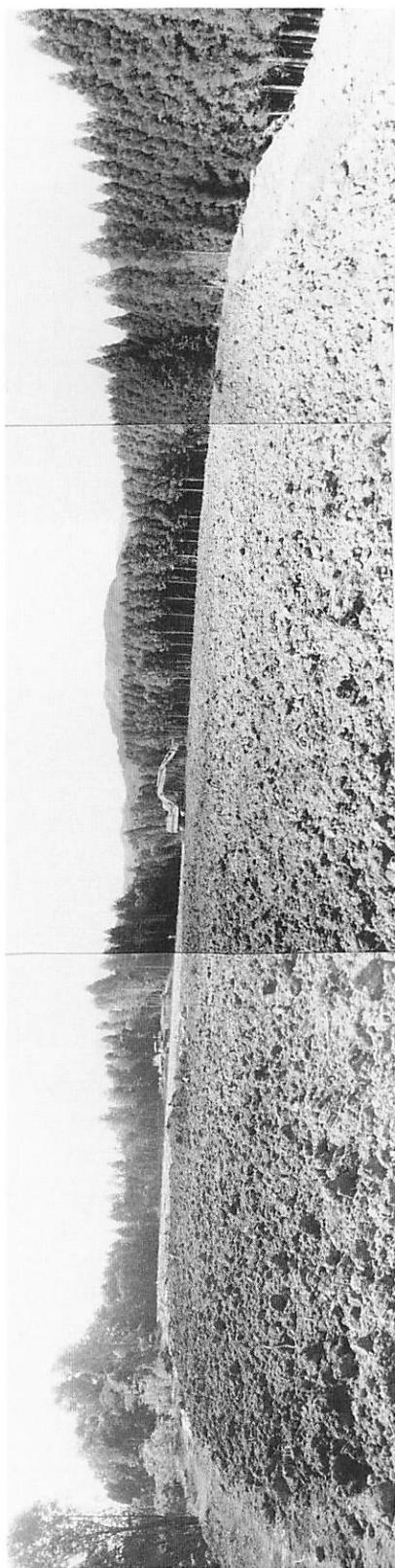
1 御靈塚古墳全景



2 猿樂塚古墳全景



3 猿樂塚古墳近景

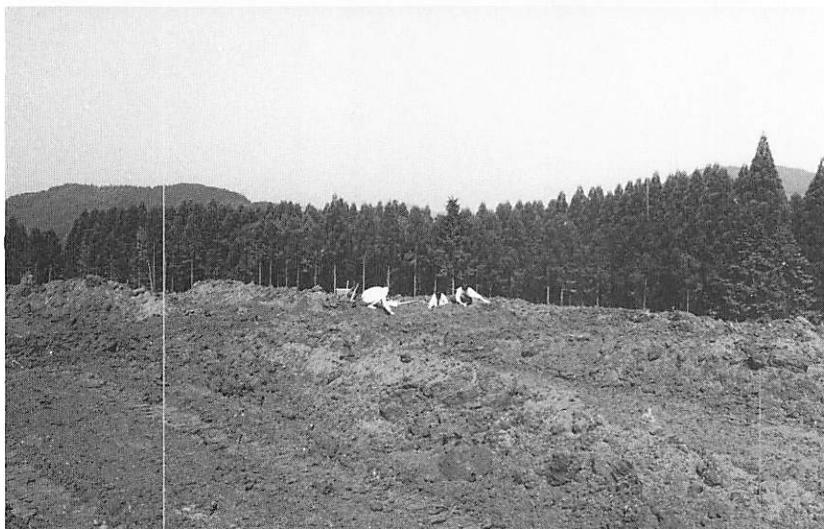


舞野遺跡全景

図版18



1 1号石棺調査風景

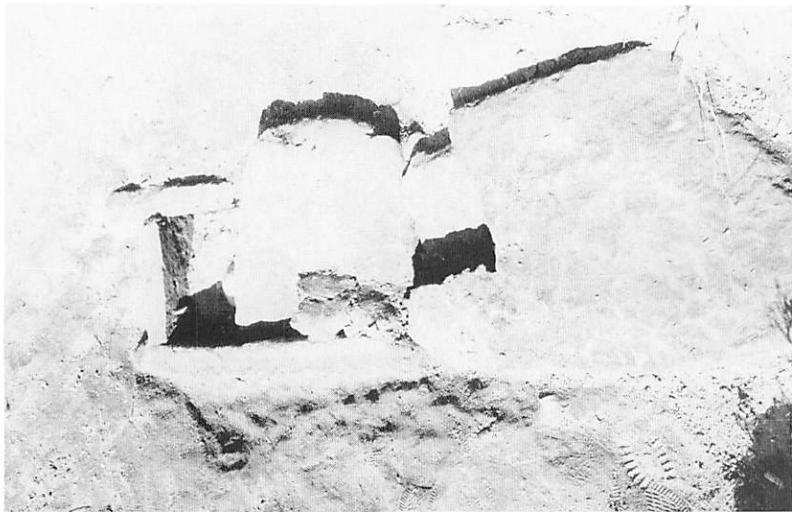


2 2号石棺調査風景



3 1号石棺人骨出土
状況

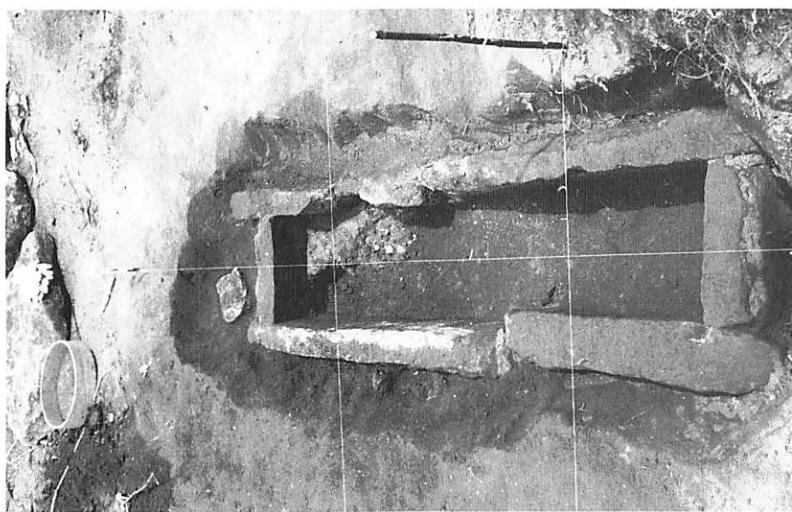
图版19



1 1号石棺出土状况



2 人骨出土状况



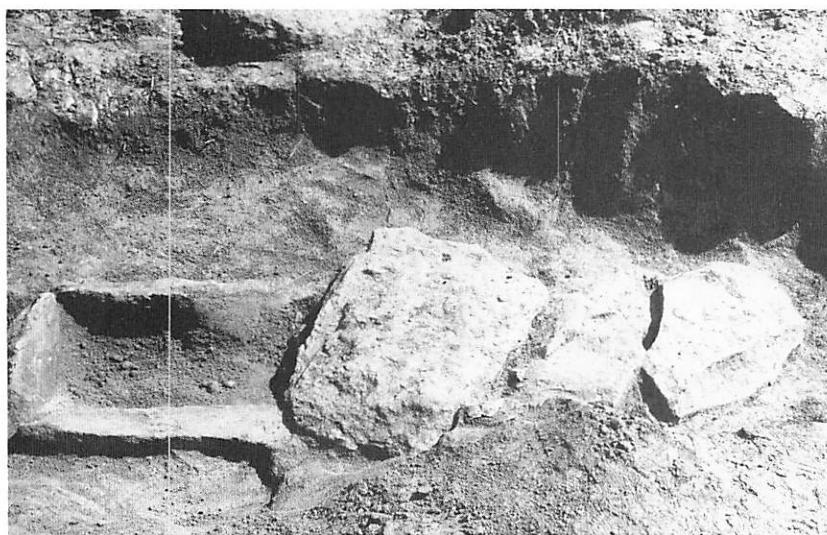
3 人骨除去状况



1 頭骨出土状況

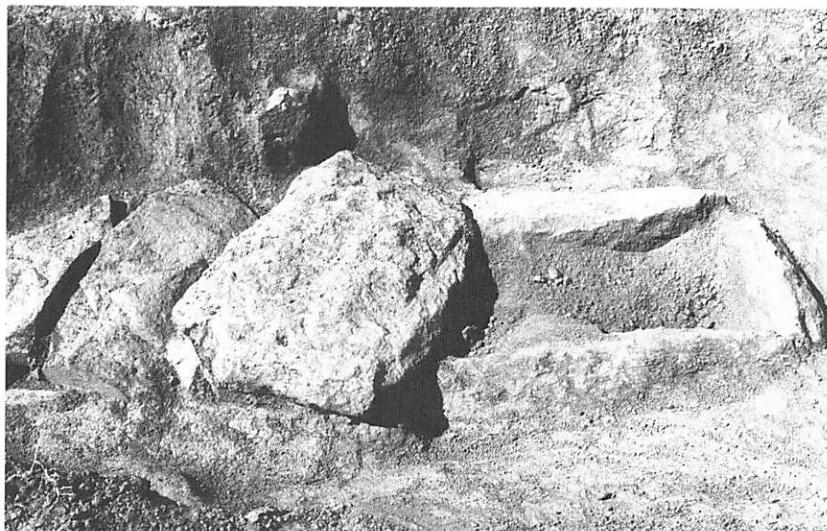


2 人骨出土状況



3 2号石棺出土状況

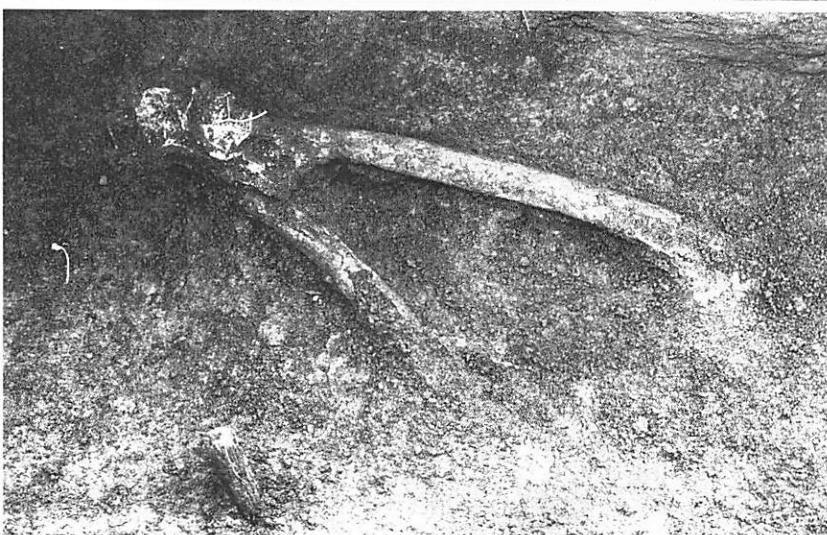
図版21



1 2号石棺出土状況



2 頭骨出土状況



3 四肢骨出土状況

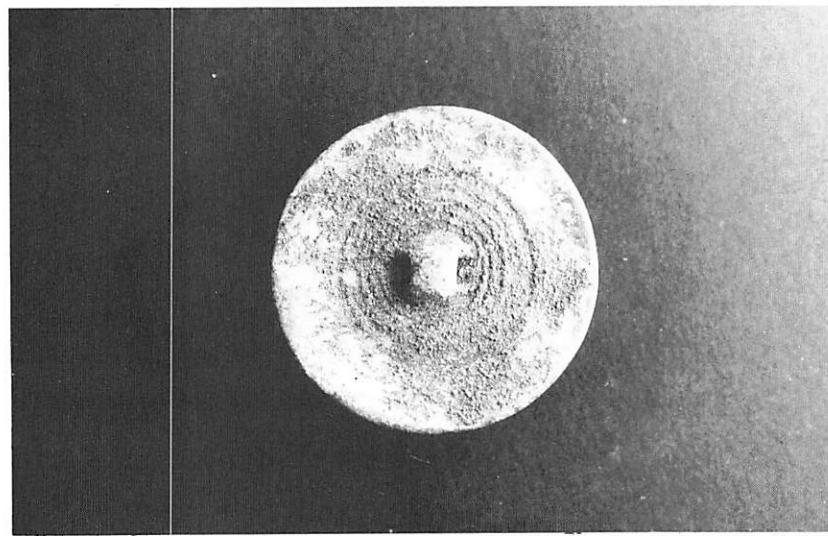
図版22



人骨及び遺物出土
1 状況



2 粘土枕



3 重圏素文鏡



1 3号石棺調査完了状況



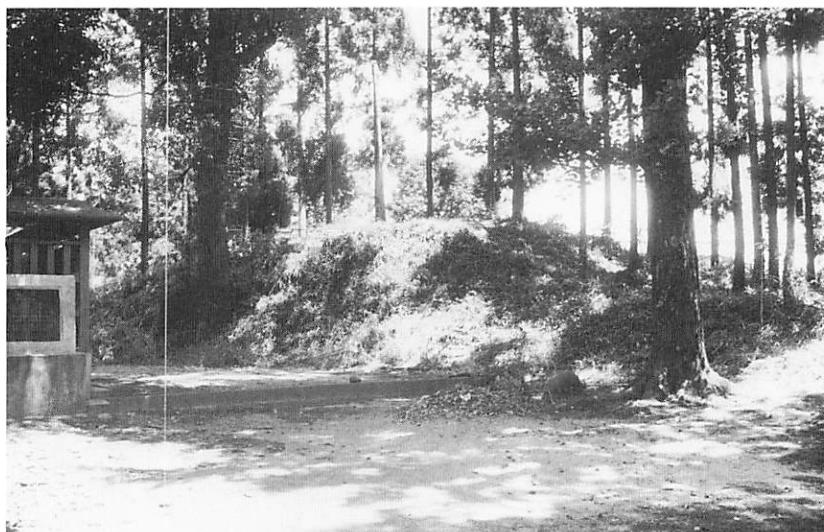
3 蓋石除去状況



2 石棺出土状況



1 神社裏古墳全景



2 後円部全景



3 前方部より望む



馬見塚1号墳
1 (北東方向より)

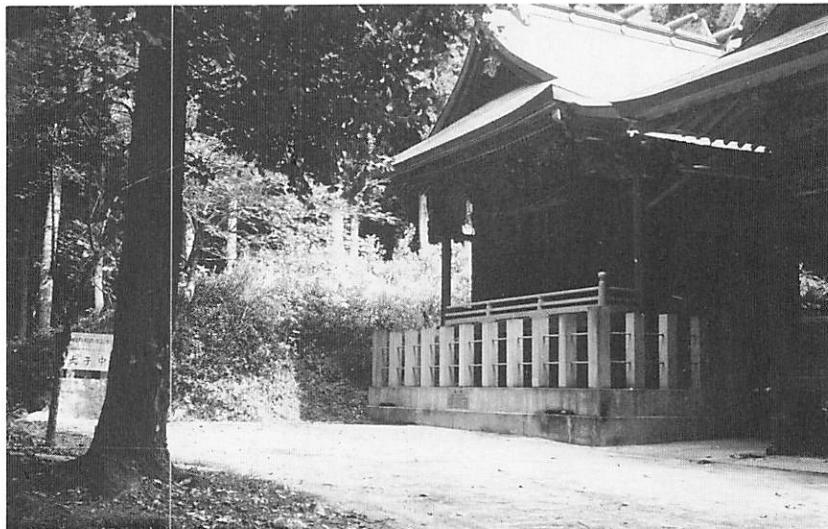


馬見塚1号墳
2 (北より)



馬見塚2号墳
3 (北西方向より)

図版26



馬見塚2号墳
1 (南東方向より)



2 馬見塚2号墳裾部



3 参考地(7号墳)
全景

編 集 後 記

今年ほど歴史の流れの中に生きている事を感じた年はありませんでした。

昭和から平成という歴史の一コマを体験した事で、歴史の意味を考える機会を与えてもらった様です。

とくに私事ですが、調査期間中、病気で一人娘を失ってからと言うもの、人間の存在について考えさせられました。

彼女の存在を証明しうるものとして何が残っているかと考えた時、非常に少ないので驚かされ、今後親として何をすべきかとの思いをめぐらす日々の連続でした。

この事は今日の埋蔵文化財の状況と似た所があります。

我々の祖先が残した数多くの遺物や遺跡が十分な調査もされず破壊されている事がありますが、この事はまさしく、遺跡に暮らした人々の存在そのものを否定した結果となるのではないでしょうか。

開発する側も、調査する側も、過去の人々の血が流れている事実を忘れてはなりません。また、我々が子孫に何を残すかという事も十分考えて欲しいと思います。

最後になりますが調査中、道路づくりや毎日の山登りと何かと苦労の多い日々でしたが、数多くの成果をあげ無事終了したのは何よりも喜ばしい事でした。

調査に参加された人々をはじめ、NHK熊本放送局の皆さんや大栄設計株式会社の皆さんには多大の援助をしていただきました、記してここに感謝いたします。

また博物館においては館長以下全員で調査に対し協力していただき、業務に専念できた事は調査員として感謝する次第であります。

山鹿市立博物館調査報告書第9集

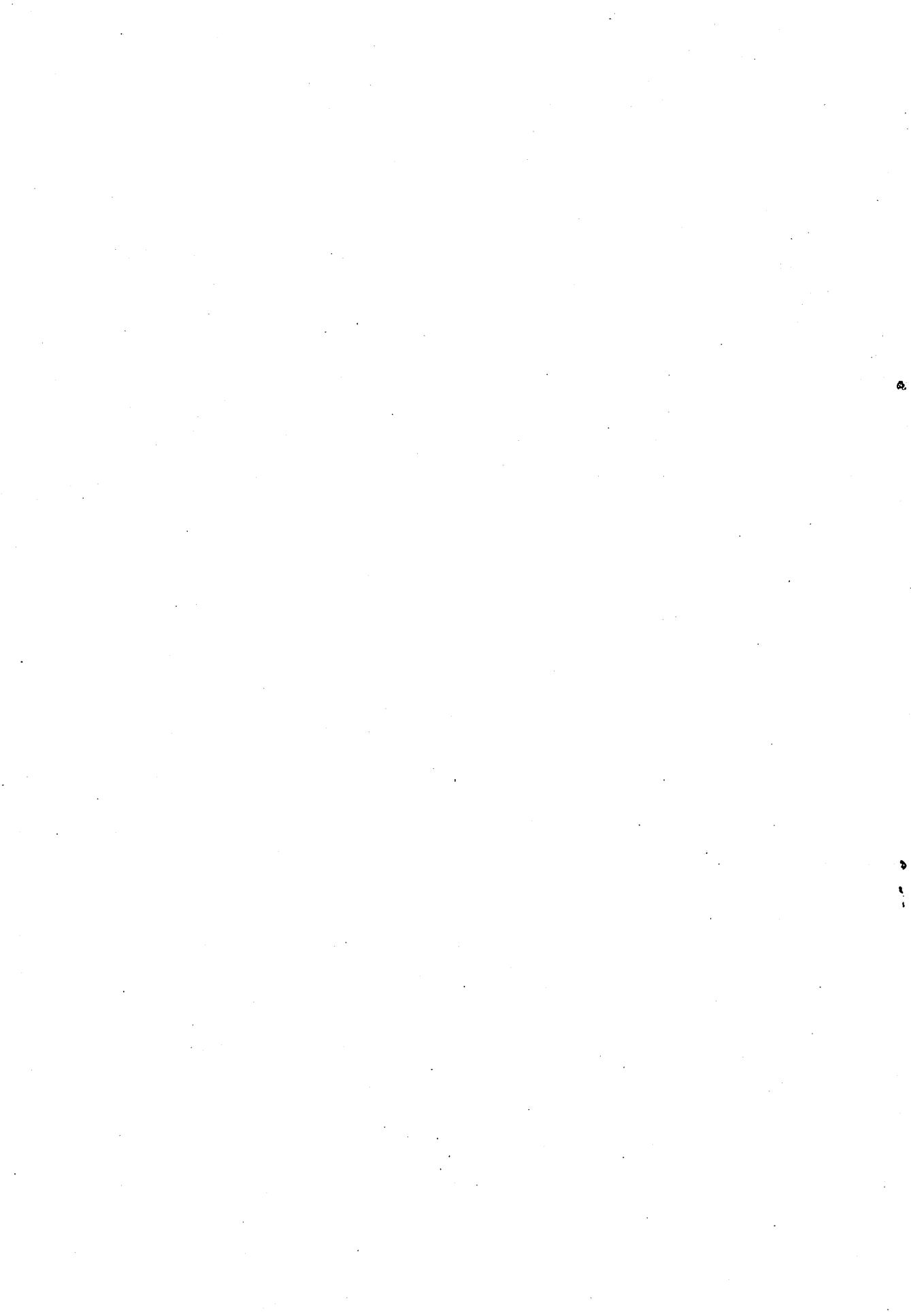
銭亀塚古墳ほか

平成元年3月31日

編 集 山 鹿 市 立 博 物 館
〒861-05 熊本県山鹿市大字鍋田2085

発 行 山 鹿 市 教 育 委 員 会
〒861-05 熊本県山鹿市堀明町1026-2

印 刷 熊 本 県 印 刷 セ ン タ ー



正誤表

『銭龜塚古墳ほか』

菊池川中流域古墳・横穴群総合調査報告書(4) 山鹿市教育委員会 1989年

本文中

頁	行	図 番	誤	正
4	22		佐々陸奥守成正に内通していた	佐々陸奥守成政に内通していた
9	9		3 墳丘(図版1, 2-1, 第4図)	3 墳丘(図版1, 2, 第3図)
9	13		主軸をN5° Wとほぼ南北に向けた	主軸をN5° Eとほぼ南北に向けた
16	9		5 墳丘(第6図)(図版7, 第6図)	5 墳丘(図版7, 第6図)
21	3		4は口径12.8cm	4は口径14.8cm
27	2		理シ故名クト云	埋シ故名クト云
27	26		(図版9-3~13, 第7図)	(図版9-3~14, 第11図)
27	7、17		祀て	祀って
28	12			
33	2		古墳としの	古墳としての
33	15		留どめて	留めて
35	16		東西15m	東西12.5m
38	14		鹿本郡郡誌	鹿本郡誌
44	8		3 1号石棺(図版18-1,19,20-1,2…)	3 1号石棺(図版18-1,3,19,20-1,2…)
46	4		ガラス製小玉1点	ガラス製小玉(第22図)1点
50			第26図 大道地区古墳分布図	第26図 大道校区古墳分布図
52	8		主軸をN30° E	主軸をN30° W
52	9		なめものと	なるものと
56	14		4 1号墳…(図版24-1, 2,	4 1号墳…(図版25-1, 2,
67, 68		第26図	(図中)6号墳, 7号墳 表示漏れ	西側が6号墳, 東側が7号墳

文化財調査報告の電子書籍の末尾に挿入する奥付

この電子書籍は、『山鹿市立博物館調査報告第9集 錢亀塚古墳ほか』を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

なお、平成 17 年(2005)に山鹿市、鹿北町、菊鹿町、鹿本町、鹿央町が合併し山鹿市となりました。調査記録及び出土遺物は、山鹿市教育委員会が保管しています。

書名:山鹿市立博物館調査報告第9集 錢亀塚古墳ほか

菊池川中流域古墳・横穴群総合調査報告書(4)

発行:山鹿市教育委員会

〒861-0592 熊本県山鹿市山鹿 987 番 3

電話: 0968-43-1651

URL:<https://www.city.yamaga.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日:2025 年 7 月 3 日